
雪泥鴻爪

風光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪泥鴻爪

【Nコード】

N2372G

【作者名】

風光

【あらすじ】

白い雪の上に続く、真っ直ぐな足跡。揺らいだり、弱まったり、強くなったり…所々では溶けたり消えたりしながらも、途切れずに残るただ一本の道。『運命』は、幾度もその雪の一部を消すことがあるでしょう。ですが、全ての雪を消すことは出来ません。そして…それこそが『永遠』となるのです。そんな真っ直ぐに続く足跡の一部分のお話を、どうぞ見守ってあげてください。

1 逢遇

「おい、玲はどうしたんだ？」

龍真は不思議そうに辺りを見回すと、その視線を隣に並ぶ少女に留めた。

今日は春分の日だ。青く澄み渡った天蓋には雲一つ見えておらず、ただ西方から送り届けられる茜色の波だけが、空の高みを飾り立てている。

「何か用事があつたみたいよ」

綾子は幼なじみの視線にそう応えようと、更に言葉を続けようとした。

だが、遠くに一人の少年の姿を認めると、慌てて彼に向かって叫んでいる。

「ちよつと待つてて！」

その声に、優しそうな顔の少年は自分達二人に大きく手を振ってくれていた。

「ほら、早く！ 和輝君が待つてるじゃない」

微かに頬を上気させながら急がせる綾子に、龍真はにやにやと笑いながら黙って肩を竦めてみせた。

「何よ！」

隠せないほど真っ赤になつてしまつた綾子が、眦を吊り上げて殴りかかつてくる。その拳を掻い潜ると、龍真は急いで和輝の所へと走り出していた。

「待ちなさいよ、こらっ！」

高らかな笑い声が広がる。

風は自らの腕にその楽しい歌を抱え込むと、二人の背中を追いつ越し、夕暮れ時の空を駆け上つていった。

……
普段、友達と遊んでいる公園に比べると、ここは随分と狭く思える。

だが、それでも、立ち並ぶ幾本かの大きな木々は、適度に他の人からの視線を遮ってくれるだろう。

…これくらいが、今日の実験には好都合だった。

未だに嫩芽の淡緑よりもくすんだ荒肌が目に付く、それらの木々を眺めながら、九歳になる小柄な少年は一人頷くとほくそ笑んでいた。

だが、次には漆黒の幼い瞳が、素早く四方を滑る。

辺りに誰もいない事を確認すると、少年はすぐさま目の前のサザンカの茂みに潜り込んでいた。

濃い緑色の葉陰に身を潜めると、もう一度そつと外を窺ってみる。誰の気配も感じられない事を再度確認すると、彼の頬には満足そうな笑みが浮かび、その瞳にはこれから挑戦してみることへの期待が正直に映し出されていた。

そう、今日、彼は全力で『飛んで』みるつもりなのだ。

思わず笑い声が零れそうになっている自分に気付き、少年は慌てて口許を押さえていた。

そんな彼をからかうように、風が一筋舞い込むと、その栗色の短髪を微かに揺らす。だがその愛撫と共に、白銀の乙女達は優しい励ましも囁いてくれていた。

幾分寒さの和らいだそれら美しい精霊達の姿を見送りながら、少年はにこりと微笑むとそつと囁きを返していた。

「有り難う。でも、『飛べる』かどうかは、まだ分からないんだけどね」

自分自身にも、言い聞かせておく。

もっとも、そんな言葉で今日の楽しみを先に伸ばすつもりは毛頭無い。

ずっと、このチャンスを待っていたのだ。

やがて……少年はその幼い瞳を軽く閉じてしまった。

全身から、力を抜いていく……

地面に触れている足の裏の感触や、周囲の葉擦れの音が遠退いていく。

呼吸の規則正しい旋律すらも心の中から排除した彼は、ただ《自分》の奥底に沈み込んでいる『何か』だけを感じ取っていた。

刹那、少年の姿が、誰の目にも見える目映い黄金色の光に包まれる。

彼は、この《自分》の中から迸る、厳しく張り詰めた……でも温かい流れを、生まれた時からずっと身近に感じてきた。

この『力』の温もりに、どれだけ助けられてきたことだろう……

だが、これが『何』であるのかは、少年には分かっていたいなかった。それに、別に知る必要も無い……いや、名を与える必要も無いではないか。それは確かに、そこに当然のものとして存在しているのだから。

深い静けさが胸中に充ちる。

少年は漸く充分だと判断すると、ただ一つの目的だけを組み立てた。

心の何処かで、純白の敷布が、すぐさま反応して黄金色に輝き出す……

同時に、彼を覆い隠していた優しい光の揺らめきが、大きく弾け

……

……次には、少年の小さな姿は公園の中から消えてしまっていた……

まるで、何一つ変わった事など無かったかのようになり、夕陽がその美しい指先を草陰に伸ばしてくる。清らかな光は、サザンカの緑も含めた《全て》を等しくそつと愛撫しては、鮮やかな朱に染め上げていた。

「……あれ？」

不意に、頓狂な声が響く。

「きゃっ……！」

独りで重い悲しみに塞いでいた曖^{あい}は、突然少年が空中に現れたのを見て、思わずブランコの揺れを止めてしまった。

その栗色の髪の少年は、次には目の前の砂場へと頭から飛び込んでいる。

つい先程まで彼女の幼い心を憂鬱にしていた心配事も忘れ、曖は慌ててその少年を助けようと駆け出していた。

「うっ……んっ」

だが、すぐにその少年は砂にまみれた顔を上げると、愉しそうに笑い出している。そんな少年の姿に、曖はびくつと体を震わせると、その場に立ち止まってしまった。

自分よりも、二つくらい年上だろうか……

曖は黙ったまま、少年を見詰め続けていた。そんな彼女に気付くと、少年は人懐っこい笑顔でにこにこ話しかけてきた。

「やっぱり、行き先がはつきりしないと危ないんだね」

どんな返事をすればいいのかわからない……

曖は逃げ出したくなるのを必死に我慢しながら、次々と話しかけてくれる少年を大きな瞳でただ見詰めるだけだった。

怖い……そう思うと同時に、曖には、この少年が不思議で仕方なかった。

……どうして……この人は……初めて逢ったのに……

どうして……こんなに簡単にお話出来るのかしら……？

「僕の名前は、川瀬 玲^{れい}って言うんだ。君は？」

突然の質問に、曖はこれ以上無いくらいに慌ててしまった。

それでも、消え入りそうな声で答えている自分に気付いて驚いてしまう……

「え……？ あっ……私は……紗雲……曖……」

玲は、この色が白くて大人しそうな曖と言う名の少女に向かって、もう一度にこりと笑いかけていた。

実は、砂場に落ちる寸前、玲は彼女の姿を認めていたのだ。ブランコに座りながら、長い黒髪を背に揺らして俯いている曖を見て、すぐさま玲はこの子をこの自分が知らない町の一番最初の友達にしよう、そう決めていた。

…そうだね、確かに曖ちゃんも僕よりも年下にしか見えないし、きっとサッカーなんて出来ないと思うけど…

でも、僕にはここが何処か分からないだし、まずは誰かを友達にしないとね。

「曖ちゃんって言うんだね。ねえ、曖ちゃん。ここが何処なのか、教えてくれる？」

「え？ あの…香笹町……」
かささ

曖は戸惑いながらも、きちんと応える事が出来ていた。

そう…声に出して、自分できちんと答えていたのだ。その事実が一番驚いているのは、曖自身だった。

「香笹町？」

突然の大声に、曖は大きく身を震わせてしまう。

だが、逃げようとはしない。心の何処からか、留まるように『何か』が伝えてくれていく気がするのだ。

持っている全ての勇気を振り絞って、曖は玲の傍らに留まり続けた。

「…じゃあ、僕が住んでる宮木町のすぐ隣なんだね」

あれだけの『力』を使ったのだ。もっと遠くまで来ているものと信じていたのに…電車の駅で、たった二つ分しか『飛べ』なかったのか…

だが、初めての事だったのだ。くよくよしても仕方が無い。今度挑戦する時には、今以上に頑張ってみよう。

再び笑みを頬に映すと、玲は勢いよく立ち上がった。

その時ふと、曖が何も自分には話しかけてこないことに気付き、玲は不安で瞳を翳らせた。

…曖ちゃん…僕が、急に空から落ちてきたから…怖がつてるのか

な…

今度新しく四年生になる玲にも、自分の持つ『力』がどれ程特殊なものであるかはよく分かっていた。今では、どんなに親しい人にも、この『力』のことを話題にすることは無い。まして、曖とは今日初めて逢ったのだ…信じてなどくれないだろう…

だが、例え相手が年下であり、一緒にはなかなか遊べないかも知れない少女だったとしても、玲はこの『力』や自分自身を怖がられたり、嫌われたくはなかった。

「ねえ、…曖ちゃん、…僕のこと、嫌い？」

漆黒の瞳を不安げに濡らしながら、胸元で細い指を絡めて緊張していた曖は、そんな玲の言葉に素直に驚いてしまった。

大急ぎで、首を横に振る。

「…ううん！…そんなこと、ないの。…私、ただ…とても恥ずかしがり屋だから……」

「そうなんだ！よかった。嫌われたのかと思った」

曖は、もう一度、大きく頭を振っていた。

…本当に、不思議…私、…玲君と、きちんとお話をしてるの……

「ねえ、曖ちゃん。たった一人で、何してたの？」

すっかり安心して声を弾ませている玲の言葉に、曖は急に辛そうに俯いてしまった。

その哀しそうな仕草に、慌てて玲は続けてしまう。

「あつ、ごめんね。そんなに悲しそうにしないで…僕、苦手なんだ」

何か、変なことを訊いたのかな？ 僕……

「…ありがとう」

曖は、そんな玲の気遣いに小さく呟いていた。

そして、物凄い決心と共に顔を上げると、彼に笑いかける。

「あの…その、…聞いて…くれる…？」

…玲君になら、話せるかも知れない…断られるかも知れないけど

……

曖は、玲に嫌われることをとても恐れている自分に、大きな戸惑

いと喜びを感じていた。

…本当に、とっても不思議なの……

「うん！」

だが、嫌われるどころか…玲は心から嬉しそうに頷いてくれた。

暖は、強く両手を握り締めながら、言葉を纏めようとブランコの方へとゆっくり戻り始めた。

玲も、黙ってその後をついていく。

そのままブランコを囲む低い柵に寄りかかると、彼は静かに暖の言葉を待っていた。

ゆっくりとブランコに腰掛ける暖を、夕陽が茜色に柔らかく染め上げている…

(……………)

何だか、見てはいけないものを見ている気がする。

…なんて、暖ちゃんて可愛いんだろう！ …でも……

目の前で悩んでいる暖は、とても儚く、小さく思える。

玲は優しい沈黙と共に、ずっとずっと…暖を見守り続けていた。

玲が見守り続ける中、漸く暖はその愛らしい唇から微かな声を押し出していた。

「あのね…私……一昨日、この町に…引っ越してきた…ばかり、なの……だから……」

きゅっと小さな手を胸に押し付けながら、絞り出すように暖は続けた。

「…ここの……新しい、学校の…二年生に…なるんだけど……その……」

こんな話を、玲はきちんと聞いてくれているのだろうか…

心配になって暖がチラッと目を上げると、玲は真剣な顔で耳を傾けてくれていた。

そして、不安になって見上げている自分の視線に気付くと、彼は励ますようににっこりと微笑んでくれる。

暖はどうしようもなく慌ててしまい、胸元まで真っ赤になると再

び視線を地面に落としてしまった。

「…あの…私、…とっても臆病で…恥ずかしがり屋だから…その、…」

少しだけ、息を吸い込む。

掠れた声で、泣きそうに震えながら、それでも曖は最後まで話していた。

「……きつと……友達なんて……出来ない……と、…思う……の……」
「そんな事無いよ!」

曖の言葉に、玲は思わず叫んでしまった。

絶対、僕ならそんなことを心配したりしないんだけど…

…でも、曖ちゃんにとつては『そんな事』じゃないんだ。

そうは思うものの、やはり玲にとつて曖の悩みは不思議なものだった。玲にとつて、友達とは自然に出来るものだった。自分から先に声を掛けてしまえば、それで全てが上手く続いていくのだ。

「ううん! ……そうなの……」

曖は、玲の叫び声に精一杯反発していた。

…いつもなら、…私、こんなことを言わないのに……

「だって…私、…あまり、お外で遊ばないし……運動も上手く出来ないし……」

その幼い唇から流れ出す言葉が、一際大きく揺れる…

「その…玲君だって……そんな女の子と…友達になんて……」

曖にとつて、それは恐ろしい言葉に思えた。

「なるよ!」

だが、力強い言葉が応えてくれる。

「僕なら、曖ちゃんと『友達』になるよ。だって、初めて見た時、そう決めたんだからね」

「……!」

曖は驚いて玲の顔を真っ直ぐに見上げていた。

胸中に、どつと大きな喜びが押し寄せてくる……

「有り難う……!」

曖は瞳を濡らして微笑んでいた。

玲の言葉に偽りや同情は無い。その《当然》の確信が、心の何処かにあったのだ。

「……私…教室で一人になるのが…恐かったの……でも…でも、この学校で一人になっても…玲君がそう言ってくれたから…私、きちんと学校に行くね……」

「うん！」

その言葉は、玲にとっても嬉しいものだった。

そうだよ。皆が学校に行って、愉しく遊ばないといけないんだ。

曖は、ほっとして軽くブランコを漕いでいる。

その優しい姿を見ながら、玲は小首を傾げると言った。

「でもね、大丈夫だよ、きっと。この小学校でだって、友達は出来ると思うよ」

「え…？」

ブランコを止めてそっと見詰めてくる瞳に、玲は力強く頷いていた。

「そうだよ。だって、曖ちゃんがどんなに臆病で恥ずかしがり屋でも、教室の皆が全員曖ちゃんのことを嫌いになるなんて、そんなこと絶対に無いよ。何十人もいるんだから、きっと僕みたいに、曖ちゃんを嫌いにならない人だっているはずだよ」

「でも……」

それでも、曖は心配だったのだ。勿論、今では玲が『友達』になっ

てくれたので、その不安も随分と小さくなっているのだが…

曖にとって、友達とはそれ程沢山いなくてもいいものだった。

「でも……もう一人くらい…この小学校に、友達がいてくれるといいかしら…」

だが、それは曖にしてみれば贅沢な望みだった。

「だって、曖ちゃんは可愛いし、優しいし…他にも僕の知らない良いところが、きっと沢山あるはずだからね。そんな曖ちゃんを『好き』になってくれる人は、絶対にいるはずだよ」

「玲君……玲君は……その……私を……」

……少し、ドキドキする。

そう……、私……きつと、玲君が……『好き』なの……？ 『友達』じゃ……なくって……？

不安と恐怖と、期待とが入り交じった心で、曖はただ言葉を待っていた。

玲は、そんな曖に躊躇うことなく頷いている。

「うん！ 僕は曖ちゃんのことを好きだよ」

そう言った瞬間、玲は自分が本当にそう思っていることに気付いて驚いていた。

「だからね、きつと曖ちゃんのことを好きになってくれる人は、ここにも沢山いると思うよ。きつと、ね」

「うん……」

曖はにつこりと微笑みながら、玲を見詰め続けていた。

……凄い……私、今日初めて逢った玲君の顔を……ずっと、真っ直ぐに、見ていられるの……

それは、曖にとっては随分と『凄いこと』だった。

不意に、小鳥達の忙しい啼き声が聞こえてくる。銀の鈴が鳴っているかのような微かで愛らしいシジュウカラの声に包まれながら、曖は再びブランコを漕ぎ出そうとした。

だが足を地面から離れた瞬間、えも言われぬ不安が胸の中に溢れてくる。曖はすぐにブランコを止めると、確かめるようにそつと玲に尋ねていた。

「でも……友達が出来ても……その……逢いにきてくれる……？」

「うん！ 勿論……」

勢いよくそう言い掛けて、玲ははたと言葉を止めてしまった。

「でも、何処に来ればいいのかな？ もう、砂場に頭から飛び込みたくはないからね！」

愉しそくに片目を瞑る彼の言葉に、曖はくすくすと笑い出していた。

玲も、大きな笑い声を上げている。

数週間ぶりに、曖の体からは心からの笑い声が溢れ出していた…

「じゃあ、…私のお家に…その…『飛んで』来てくれるの…？」

玲の話を聞いても、曖には『飛ぶ』ということがあまりよく分かっていなかった。

「うん！ 心配しなくても、大丈夫だよ。

ここまで遠くに『飛んだ』のは今日が初めてなんだけどね。でも、近くにだったら今までもきちんと『飛べ』てるし…」

「初めて…だったの…？」

「こんなに遠くまで来たのは、ね」

…良かった…玲君が、他の所に『飛んで』いなくて…

静かに喜んでいる曖の前に、もう一度心の中で確認すると、玲は一人頷いて言った。

「じゃあ、家を教えてくれる？ これくらいしか疲れないなら、春休みの間は毎日来れるよ」

「本当？」

嬉しくなつて、曖はブランコから飛び降りていた。

「うん！ 明日も、今くらいの時間なら来れるからね」

一日中、曖ちゃんといえることは出来ないかも知れない…

やっぱり、時々はサッカーや野球もしないといけないんだ。

…だが、それでも、曖にとっては充分だった。

「うん。私、ずっとお家で待ってる……」

そう言いながら、ふと残念なことに気付いてしまった。

学校が始まったら…

俯いて寂しそうに曖が呟くと、玲は暫く考え込んだ後で言った。

「仕方ないね。

でも、水曜日だったら、夕方には来れると思うよ。それに、曖ちゃんだって、こっちの学校で出来た友達と、時々遊ぶばないといけないからね」

そんなこと……

曖にしてみれば、どんな友達よりも玲と一緒にいられる方が嬉しかったのだが…ただ、これは仕方の無いことかも知れない。

「…じゃあ…毎週、水曜日に来てくれる…？」

曖は精一杯の期待を込めて、玲を見上げていた。

「いいよ」

「嬉しい…」

自然と笑みが零れてしまう。

にこにこしながら、曖は不意に玲の手を取ると走り出していた。

「お家はこっちなの…！」

そんな事をしている自分に、曖は少しも気が付いていない…

太陽はその身を半ば隠しながら、全てを紅に塗り替えている。その光の中で、二人の子どもは嬉しい笑い声と共に、美しい煉瓦色のマンションに向かって駆け出していた。

二人を追い越した風は、曖の幸せに包まれた笑顔に驚きかつ喜びながら、その出来事を伝えるために地平へと旅を急ぎ、去っていった。

「凄く高いところだね」

玲は廊下の手摺りから身をのりだすと、地面を見下ろしていた。

五階つて、こんなに高いんだ…

「気を付けてね…」

心配で心配で…

曖自身はもう恐くなくなったのだが、下を覗き込んでいる玲を黙って後ろから見ていると、どうしてもときどきしてしまう。

「うん。大丈夫だよ」

につこり笑うと、それでも曖を安心させるために玲は手摺りから身を引いた。

「お家は、こっちなの」

また覗いたりする前に…曖は急いで玲を階の奥へと案内すると、一つの扉の前で立ち止まった。

ポケットから、鍵を大事そうにそつと取り出す。その様子に、玲は不思議になつて尋ねていた。

「誰もいないの？」

「…うん」

曖が不意にうなだれてしまう。鍵を差し込もうとしていた細い腕も、力無く垂れ下がってしまった。

「あの、ごめんね。…そんなに、悲しまないで」

どうして、それほどまで悲しくなるのかは分からなかったが、曖の寂しげな顔は見たくない…

慌てている玲に、曖は精一杯の笑顔を向けようとした。

「ううん…私がいけないの…ごめんなさい……」

大きく、息を吸い込む…

「…私、…ママがいけないの…私が生まれた時…すぐに、…死んじやった、って……パパが…」

「そうなんだ、…ごめんね…」

「ううん…」

普段は明るい玲までが、何も言えなくなってしまった。

まだ、彼には本当の《死》がどんなものかは分かっていない。

…だって…僕にはお父さんもお母さんもいるから……もしも、お母さんがいなくなったら…

玲はその想像に嫌悪を感じ、急いで考える事を止めてしまった。

そして、黙ってしまった曖に励ますように笑顔を向けると、明るい声を出していた。

「さあ、曖ちゃん！ 中に入ろうよ」

「…うん…」

曖はほつとしたように、ゆっくりと鍵を回していた。

曖は玲を自分の部屋に通すと、ちよつと待ってて…そう言つて、隣室のベランダに干してあった洗濯物を、手際よく取り込み始めた。その間、玲は少し窮屈そうに曖の部屋で待っていた。

綺麗に整えられたベッドや机。本棚には青や黄の背をした本達が、

几帳面に並べられている。

でも…漫画は少ないみたいだね。

そんなことを考えている玲自身も、漫画を読むよりも外で遊ぶ方が多かった。ゲームも、あまりしないのだ。

暖の部屋を見ていると、どうしても散らかしたまま家で待っている自分の部屋と比べてしまう。何だか、居心地が悪い。

…とても、暖ちゃんには僕の部屋を見せられないね。

よし！今日は帰ったら、一番に部屋を片付けよう…

「ごめんなさい…待たせてしまって…」

ジュースが入ったグラスとお菓子を並べた盆を持って、暖が部屋に戻ってくる。

今まで、遊びに行った先で、年下の女の子にこんなことをされた経験が無い玲は、更に窮屈そうに身を縮めてしまった。

…暖ちゃんには、きつと、色々教えられてしまうんだろうね。

玲は、今度四年生になると言うのに、暖には敵わないものがこれほどもある自分に、少し恥じ入っていた。

「どうしたの…？」

先程までと違って何も言わなくなってしまった玲を見て、暖は不思議そうに尋ねていた。

「うつん、あのね…」

「……？」

「僕、暖ちゃんには色々と教えてもらわなくちゃいけないみたいなんだ。僕が知らないことを、暖ちゃんは沢山知ってるからね」

「私が…？」

まるで分からずに、小首を傾げてしまう。

…玲君こそ、私の知らないことをいっぱい知っているはずなの…

「うん。例えば、その…」

珍しく、玲は真っ赤になって言い淀んでいた。

「どうやったら…いつも、部屋が綺麗になるのか、とか…」

その言葉に、暖はくすくすと笑い出していた。

優しく愛くるしい笑い声は、恥ずかしがっている玲の心をそっと包み込んでくれる…

「…簡単なの…」

曖は微笑みながら、本棚に目を向けた。釣られて、玲も綺麗に並ぶ背表紙を見つめる。

「あのね…ここに並んでるご本には…」

細く、透き通るような白い指先が、本棚の上を緩やかに滑っている。

「…みんな、お家が決まってるの。…だから、私が読みたくなってご本を連れ出してしまったら…後で、きちんとお家まで連れて行ってあげないといけないでしょう…？」

「うーん、それが難しいんだ。すぐに、連れて行ってあげる所を、忘れてしまうからね」

曖が再びくすくすと笑い始める。玲もその笑い声に和して、愉しそうに声を上げた。

その笑い声が落ち着いた頃には…最早、玲は窮屈さを忘れてしまっていた。

曖が用意してくれたジュースを飲みながら、玲は今迄知らなかった曖の事を、随分と教えてもらっていた。

生まれてから数ヶ月の間、曖はこの香笹町で暮らしていたそうだが、勿論、そんな頃の記憶など無い。

「でも…少しだけ…」

何となく…身近に感じる事が出来る。

…だから、引越しも頑張る事が出来たのだ。

「パパは…私に、一つだけ…お約束させたの」

「何を？」

じつと、曖から目を離さずに玲は尋ねていた。

すっかり陽も落ちてしまい、辺りは薄暗い青闇に覆われ始めているのだが…まるで、気付いてもない。

「あのね…」

それは、曖も同じだった。

「この町には、本当に素敵な薫りがする、笹の群生があるんだって……そこには、澄んだ湧き水があるそうなの……」

でも、絶対に、曖はそこには行つてはいけないよ、って……」

「ふん……危ないんだろうね」

「うん……」

隣町に住んでいるのだが、玲はそんな不思議な笹の話聞いた事が無かった。

本当に……世の中には、知らない事が一杯あるんだね……

曖がその小さな口を閉ざすと、替わりに玲は自分の事を話し始めていた。

宮木町で、生まれた時から一度も引越などせずに暮らしていること。

祖父母はもういないが、両親は元気で一緒に暮らしていること。

姉も一人いること。

それと、従兄弟の赤ちゃんが近くに住んでいること。

自分の『力』は、気が付いた時には使えていたこと。

その『力』が役に立った、色々な出来事のこと……

曖は、玲が話す全てのことを、まるで疑おうとはしなかった。中には、とても不思議な話もある。よく分からないこともある。

でも……玲君には、その力があるんだもの……

……「ただ、それだけ」のことだった。

黄金色に煌く、楽しい一時が流れていく。

ふと白い壁に掛かった時計が視野に入り、その針が示している時刻に気付くと、玲は思わず「わっ！」と叫び声を上げていた。

その声に驚いて目を大きくしている曖に、玲は困ったような顔をする。

「もう、七時になっちゃった……」

曖も慌てて時計を見上げる。

大変：！ もうすぐ、パパが帰ってくるのに：お夕飯の仕度も出来てないの：

玲君だって、もうずっと前にお家に戻ってないといけないのに：まるで自分が叱られているかのように、曖はしょんぼりと身を小さくしてしまった。

「大丈夫だよ。曖ちゃんのせいじゃないからね」
勿論、そうなのだ。

今気付いてみれば、部屋の中もすっかり暗くなっている。改めて見れば、お互いの顔すらぼんやりとしているではないか。
だが、：曖には、玲が元気に笑いかけてくれているのが分かっていた。

：そうなの：私の為に、笑ってくれてるの……
曖は、その事が本当に嬉しかった。

玄関から出ると、廊下の灯りに照らされながら、玲は励ますように笑顔を向けた。

「ありがとう。もう寒くなってくるから、ここでいいよ」

「また：『飛ぶ』の？」

「うん！ でも、今度は空を飛ぶことにするよ。一瞬で『飛んで』しまったら、疲れて明日来れないかも知れないからね」

そうなの：明日も、来てくれるの……

分かっているながらも、曖はやっぱり少し寂しくなっていた。

ずっと、一緒にいたいのに……

：でも、それは贅沢なのかしら……

「じゃあね！」

片手を上げると、玲は不意に灯りの下から飛び出していた。

小さな体が、軽々と廊下の手摺りを飛び超える……

玲の言葉を信じていながらも、曖は小さな悲鳴を上げずにはいられなかった。

駆け寄って身を乗り出すと、じっと目を凝らす。

いた！ 波の上で穏やかにたゆたう小舟のように、薄い暗闇の中をゆるやかに滑りながら、遠くで大きく手を振ってくれている。

…玲君って、本当に凄い…お空も飛べるんだもの…

次第に消えていく玲に向かって、曖も元気に手を振り返していた。父親が帰ってくれば、朝までとは少しだけ変わってしまった曖の様子に、随分と驚かされることだろう。

.....

曖の家が見えなくなると、縹渺たる青い波に身を委ねながら、玲は視線を前に向けていた。

「曖ちゃんって、とっても…」

とっても…何なのかな？

可愛いし、凄い事も出来るし、優しいし…

だが、それだけでは足りないのだ。

ぶつぶつと呟きながら、玲は全身に『力』を満たし、腕を組むと更に深く考え込もうとした。

(……！)

次の瞬間、考え事など忘れ、真剣な目を見ると玲は後ろを振り返っていた。

今、通り過ぎた所…下の方から『何か』の不快な乱れが立ち昇ってきたのだ。

夜空よりも暗い…漆黒に染まる低い山々が連なっている。丁度、

宮木町と香笹町の境辺りだ。

様々な木々が生い茂る山々の重なりを見ながら、玲は小さく呟いていた。

「何か…変、だね…」

空気が、少し澱んでいる気がする。闇が歪むような…

だが、改めて意識を集中させても、先程感じたような大きな『力』

の揺らぎは、最早玲には捕えることが出来無かった。

…まあ、いいか。早く帰ろう。

それ以上は深追いせずに、一路家に向かって速度を上げる。

今日、素敵な友達を見付けることが出来たこと…その歡びに、胸を激しく躍らせながら……

1 逢遇 おわり

2 逢魔時

玲が初めて曖と出会ってから、一月が過ぎようとしていた。

既に桜の季節も終わり、香笹町と宮木町を隔てている山々にも、今では鮮緑が目立つようになってきた。

玲は約束通り、春休みの間は毎日、そして学校が始まって毎週水曜日には必ず曖の所へと通い続けている。だが、残念な事に、二人が共に居られる時間は短いものだ。しかし、それでも…どれだけ短いものであっても、二人にとってその時間は輝かしい黄金色に満ちているものであり、豊かな銀の流れをその光の中に辿るものだった…

春休みも終わりに近付いていた頃、曖の許から家へと帰る途中で、玲は一度だけ町境の山の中へと舞い降りた事がある。

初めて曖と出会った日の帰りに、『何か』の澱みを感じた辺りだ。まだ裸木が立ち並んでいる山間を、ゆっくりと飛んでいく。

…静かなものだ。この辺りは決まった道があるわけでもなく、人の姿などまるで見かけることがない。

時折、玲が縄張りに入り込んでしまうのだろう、ジョウビタキの舌打ちが常緑樹の茂みの蔭から聞こえることがある。カッカッカッ…と、ツグミの声もやけに大きく聞こえてしまう。

本当に、静かだ。

あの夜の不快感など、森の何処から感じられない。

「おかしいなあ。あんなに、強烈だったのに…」

再び上昇すると、藍色に沈み始める山肌を広く眺めた。

あれは…移動していたのだろうか。

あの時、人間が無理をしてこの山奥にまで分け入り、何らかの儀式を執り行った結果、周囲の『何か』を乱してしまった…確かに、考えられないわけではない。

…でも、この辺りの精霊達って、人間の姿にあまり慣れてないみたいなんだよね…

では、人間以外のものだろうか。

玲は空中に留まったまま、腕組みをして首を傾げていた。

…でも、それなら、どうしてあの時だけ感じたのかな。別に、意識して『力』を探っていたわけでもないし…あんなに簡単に感じ取れるくらい、大きな『力』を放つなんて…

あの時以来、玲は事ある毎に意識の網を町中に広げ、異質な『何か』を探ろうとしている。だが、この近くには…少なくとも、宮木町には危険を感じるような『何か』は捕捉出来なかった。

「うーん…」

眉を顰める玲の体が、集中していた『力』の散漫に困って、ゆっくりと地上に落ちていく。

そんな玲を、不意に微茫とした甘い薫りが包み込んでいた。

「ん？」

何だか、体中の力が風に乗って大気中へと溶け出してしまいそうだ。

「…おいしそうな匂いだね」

香気の誘いに心を乱されないように慌てて気を引き締めると、玲は飛行に専念し、薫りの源を探し始めた。

白銀の乙女達がその馨香を腕に抱き取る場所は、すぐに見つかった。幾重にも重なった枝越しに、小さな泉が見えてきたのだ。間違はなく、薫りはその泉の周囲から溢れてくる。

小さな泉は、天の残照を写して深い蒼に染まっていた。その水面には、漣一つ見えていない。

周囲を灰色の石で囲まれた泉は、ただ静かに…深い沈黙をその身に纏いながら、音も無く舞い降りる玲を迎え入れていた。

鳥の囀りや、僅かな葉擦れさえも、この泉の意に従って声を潜めているようだ。この山中の何処よりも、沈黙が重く立ち籠めている。その泉の周辺には、素晴らしく魅惑的な薫りを放つ、濃い緑色をし

た笹の群生が広がっていた。

（ここが…曖ちゃんが言ってた所なんだ）

こんな森の奥深くになんて…注意しなくても、曖ちゃんは絶対に来れないんじゃないかな…？

何だか、独り言も口に出れない。ここでは、一言も口から紡いではいけない気がするのだ。僅かでも声にすると、次には全てが硝子のように砕け散ってしまいそうだ…

泉の傍らには、随分と汚れてしまっている祠が奉られていた。滑るような足取りで近付くと、そと中を覗き込んでみる。

小さな社の中は、かなり乱れていた。何があるのかは暗くてよく分からないが、それでも、極めて稀には手入れもされているのだろうか…

腐りかけた木片が、祠に打ち込まれている。黒く濡れたその小さな板には、少したけ文字が読み取れた。

「…夢鏡ノ泉^{むきょう}…」

口に出してしまったその瞬間、馥郁と漂っていた笹の香りが突如強まる。

辺りを支配していた沈黙までもが風に乗リ、玲の小さな体に痛みを伴うような冷氣となつてぶつかってきた。

驚き慌てる玲の眼前では、泉の表面が激しく泡立ち始めていた。

だが…そこには、やはり蒼しか映ってはいない…

やがて泉の奥底から…夕闇が迫る森の中へと、魅力的であると共に絶望を放つ妖気が噴き上がるうとしていた。

「…ちよつと、危険だね」

いつもは幼い漆黒の瞳が、不意に鋭く細められる。刹那、その面からは全ての感情までもが失せてしまっていた。

素早くポケットの中の薄いケースから、鉛色をしたカードを一枚取り出す。

意識を満たす静寂に従い、小柄なその姿からは陽炎のように黄金色の光が溢れ出していた。揺らめく光の焰は、やがて鈍い輝きを放

つカードへと流れ込み…瞬間、その表面には小さな金文字が浮かび、消える。

「いつまで防げるかは、分からないけどね…」

そう呟くと腕を滑らせ、玲はカードを夢鏡ノ泉へと投げ入れた。

「……！」

水面が木々を飲み込もうとするかのように大きく蠢き、音にならない悲鳴が薄闇に広がる。

…次には、泉は再び鏡のように滑らかなその面に、ただ静かに天の蒼を写していた。

怒りの声も、それを忌み嫌う風の精によってすぐに払われ、静寂が戻り始める。

改めて深い沈黙が辺りを支配したことを見届けると、玲は軽く地面を蹴り、空中に舞い上がった。

(あゝあ…また、遅れちゃった)

ちよつとだけ、立ち寄るつもりだったのに…

玲は溜息を吐くと、急いで家に向かって飛び始めていた。

………

新しい学校へと通い始めた曖は、玲との出会いによってその性格が僅かに開かれたものになったとは言え、やはりとても内気で恥ずかしがり屋の少女だった。

初めて教室に入り、黒板の前に立って自己紹介をする時など…あまりの恥ずかしさに真っ赤に頬を染めると、担任の先生の後ろに隠れてしまった程なのだ。

そんな彼女の仕草に皆が笑った時、曖はもうこの学校では友達は出来ないだろうと、覚悟してしまった。

…だが、その覚悟は間違っていたのだ。

新しい席の周りの女の子達は、色々と曖の心配をしてくれた。意

地悪な男の子がからかいに来て、すぐに追い払ってくれる。

曖自身は、ただ静かに、じっと俯くだけだった。

曖が少しずつ学校に慣れてくると、皆もまた少しずつ、曖の素敵なところを理解するようになっていった。

最初は曖のことを疎ましく思っていた者でさえも、曖の素直で控え目な態度には何も言わなくなった。

誰もが… どれほど了見の狭い子どもですら、心の底では曖の素敵なところを認めていたのだ。

そんな変化に気付いていないのは、当の本人だけだったのかも知れない…

事実、曖は皆の親切に驚き、戸惑っていた。

… どうして、皆、こんなにも私を助けてくれるのかしら…

曖は滅多に、自分からは誰にも話しかけなかった。どうしても必要になった時だけ、仕方無く、消え入りそうな細い声で漸く伝えることが出来るのだ。

それは、曖が話しかけられた時も同じだった。相手が女の子であれば、まだ小さな声でも、何とか目を見ながら答えられるのだが… 男の子に話しかけられると、もう駄目だった。真っ赤になって、机の表面をじっと見ながら、ただ首を振ることしか出来ない。どうしても声を出さなければならぬ時になって、やっと曖は微かな声で囁くのだ。

そんな調子でも、時はその弛まぬ流れを歩み続ける。

いつしか、曖の周りには必ず誰かが集まるようになっていた。

別に、曖が何かを話すわけではない。ただ、皆が曖の傍で話をするだけなのだ。

勿論、曖もその話の聞き手にはなっている。そして、時折、同意を求められるのだ。

皆は、曖の反応を貴重なものと認めていた。そこには、偽りなど

全く無いのだから…

こうして、曖も次第に新しい生活を始めていった……

先程まで雨が降り注いでいたのだが、それも雲が運ばれていくと共にすぐに上がってしまった。

曖が歩いている舗道の微かな湿りも、雲間から覗く太陽の光で、少しずつその色を取り戻し始めている。

雨に依って洗われた白く輝く大気の中を、曖は買い物袋を腕に掛け、その背にランドセルを負いながら家に向かっていった。彼女はいつも、学校からの帰りに買い物を済ませることにしていたのだ。勿論、担任の先生も事情を知らされていて、認めている。

もつとも、それも明日の水曜日だけは別だった。

折角、玲君が来てくれるのに…

買い物で時間を費やすなど、少し勿体無い気がするのだ。

そこで今日も、明日の水曜日の分まで纏めて買ってきていた。

…やっと、明日、玲君に会える……

一週間って、どうしてこんなにも長いのかしら……

水曜日のことを考えただけで…ただそれだけで、心から嬉しくなってしまう。あのことも、このことも、話をしたい…

そんな幸せに満ちた曖の髪を、少し強い風が乱してしまう。だが、曖は嫌がりもせず、素直にその風が去っていった天蓋を見上げていた。

曖には、残念ながら精霊の姿は見えない。

…玲君は、見える、って言ったの…少し、羨ましいな…

玲が知る限りでは、この世界のあらゆる存在に精霊は宿っているらしい。だが、その玲ですらも、精霊達を見ることは出来ても、話しかけたり何かを頼んだりすることは出来ないのだそうだ。精霊達の声は聞こえるのだが…玲の言葉を使えば、それは「一方通行」なのだ。

また、玲はこうも言っていた。

…まるで、僕と精霊の間に、透明な硝子があるみたいなんだ…こ
っちからは、何も向こう側に送れないんだよ…

玲との会話を思い出しながら歩む曖の周りには、もう暫くすれば
夕暮れ時になるんだということを教えてくれる…そんな何か特別な
雰囲気漂っていた。

陽光が少しだけ強くなり、辺りの全てが昼間よりも白く眩しく感
じられる。

まるで…お日さまが夜になる前に頑張って、何もかもを綺麗に磨
いてくれるみたい…

思わず、笑みが零れる。

このような美しい時間に包まれている時には、曖も恥ずかしさな
どまるで忘れてしまっていた。

やがて、煉瓦色のマンションが見えてくる。

曖は軽くスキップしながら、その駐車場にあるゴミ集積場の横を
通り過ぎようとした。

だが、その瞬間、視界に何かが飛び込んでくる。

…もう一度よく見ようと、曖は積み上げられたゴミ袋の上を覗き
込み……

「いやああ！」

曖はその場に蹲ると、小さな両手で顔を覆ってしまった。

そこには、細く青白い「腕」が、無造作に捨てられていたのだ。

人形のものなどではない…肘から上は無く、鋭利な刃物で切り裂か
れたであろう、その切り口からは…赤い血の糸が、ただ一筋、地面
へと滴り落ちていた。

曖の悲鳴を聞きつけ、すぐに人々が集まってくる。

父親から曖のことを頼まれている隣人や、他の親しい人達もすぐ
に声を掛けてくれる。

だが…どんなに親しい声がしても、最早曖の耳は受け入れようと

はしなかった。

ナニモ、ミタクナイ…ナニモ、キキタクナイ……

何もかも、自分の周りからは消えて欲しかった。

…ドウシテ、…ドウシテ……

通報を受け、警察はすぐにやって来たが、第一発見者である曖からは何も聞き出せなかった。曖に向かって話しかけても、全く応えが返ってこないのだ。

曖は、泣いてすらいらないようだった。少なくとも、涙は一筋も、その白暫な頬に流れてはいなかった…

曖は、ただ周りの世界を一瞬にして拒絶してしまったただけなのだ。『自分』と言う名の『障壁』を瞬く間に創り出し、自らその中に閉じ籠もってしまったのだ…

その『自分』と外界とを辛うじて繋ぎとめていた、細く微かな絹糸は……唯一つ。

…それは、玲への呼びかけだけだった……

身じろぎ一つしなくなった曖を、何人もの人達が大事そうに抱え込み、家までゆっくりと運ぶ。

警察も曖の父親に連絡しようとしたのだが、残念ながら携帯電話も繋がらなかった。

五階まで上がった時、漸く曖は俯きながらも自分の足で立ち、少しずつ歩こうとした。

その幼い視線は、家の扉の前に辿り着いても、未だ下を向いたまま動こうとはしない。豊かな黒髪も、曖の心を察するかのように、その表情を覆い隠してしまっていた。

「本当に、一人で大丈夫？」

隣人の優しい言葉にも何も言わず、ただ微かに首が震えたのがその答えだった。

…曖は足を引き摺るようにして、開けられた扉を抜け、そのまま家の中へと入っていった。

震える手が、玄関の鍵をかけてしまう。

…高い、施錠の音が響き渡る……

その音が消えてしまった一瞬後、暖は自分の部屋へと走り込んでいた。

ベッドに倒れ伏し、力一杯、しがみつく……

…そこで初めて、美妙的流れがその閉じられた瞳から溢れ出していた……

唇からは零れる音も無く、ただ悲痛な思いだけが部屋中に満ちていく。暖の部屋にある全ての存在が、その悲しみに身を振り、共に和して叫んでいた。

…玲君…玲君……お願い…今、ここにきて……

玲君……

…だが、明日になるまで玲がここに来ないことは…誰よりも、暖が一番よく分かっていた……

「今日は、何をしようか」

授業が終わると、玲は龍真達と一緒に運動場へと駆け出していた。家に帰るのは、遊び終わってからだ。当然、学校の宿題など、その後になる。

夕暮れ時の爽やかな風に包まれ、玲は皆と共に楽しい笑い声を上げていた。

…明日は、暖ちゃんとの約束があるからね。今日は、思い切り遊ぼう…

玲は、暖との約束を苦痛だなどとは思っていない。それは、今や彼にとって一番大切な時間になっているのだ。

だが、やはり、まだまだ小学生なのだ。今の玲には、暖との逢瀬だけでは、少し物足りなかったのかも知れない。

一人がサッカーボールを取りに行くと、玲は他の友達と一緒にゴールを動かしたり、コートの子線を爪先で描いたりしていた。

運動場を囲む大きな木々の葉陰では、ヒヨドリが幾羽も留まって喧しくヒューヒューと騒いでいる。この青味がかった灰色の衣を

纏う鳥達は、その声や体の大きさには似合わず、とても臆病だ。玲が振り向いただけでも彼等の間には恐怖が走り、慌てて幾つもの影が飛び去っていた。

凄まじいばかりの喧騒と、くいつくいつと下に凸な弧を描いて飛びヒヨドリ達に囲まれ、サッカーの準備をしていた玲は、突然、その動きを止めてしまった。

不意に深い心配と不安に顔を歪めた玲は、誰にも何も言わず、一人運動場の端まで駆け寄ると、遠く香笹町の方を眺めた。

…おかしいね…さっき、曖ちゃんの声が聞こえた気がしたんだけど…

町境の山並へと目を向ける玲の心に、途轍もない悲しみの波が押し寄せてくる。辛く、苦しい…そのあまりの激しさに玲は胸元を押さえると、その場にしゃがみ込んでしまった。

曖ちゃん…

間違いない。自分と呼んでいるのだ。

玲はすぐに立ち上がると、一度皆の所まで戻り声を掛けた。

「御免ね！ ちょっと用事があったんだ」

龍真や綾子にそう叫ぶと、返ってくる言葉など気にもせずに、玲は人気の無い校舎の裏手へと走り、意識を集中させた。

すぐさま、全身を鮮やかに澄んだ黄金色の光が舐め始める。

曖の家を思い浮かべる事もどかしく、玲は最低限の『力』を集めると、すぐにその場から『飛んで』いた。

.....

…どうして、…どうして、あんな酷いことを…

曖は、今自分が生きているこの世界の全てを、心の底から嫌悪していた。

その思いは、同時に曖に果ての無い孤独を押し付けてくる。

…自分は、たった一人なのだ。
誰も…誰も……

その声に対し、すぐに別の曖が囁き返してくる。

…玲君なら…玲君なら……

玲君…ここに来て…明日なんて…私…待ってられないの……

…明日…？ 明日なんて、来なくてもいい。

もう、このまま消えてしまいたい……

涙は止まることなく、曖の優しい頬を伝い続けていた……

「うわっ！」

玲は慌てて目の前の手摺りにしがみついていた。

遙か下に見える地上からは、冷たい風が吹き上がってくる。

「びつくりした…やっぱり、どんなに急いでても、きちんと行き先は決めないと危ないんだね…」

ベランダの外にぶら下がりながら、そんなことを呟いている。

次には、玲は腕の力だけで軽々と手摺りを乗り越え、ベランダに立っていた。

玲は、いつも曖の家にはベランダから入ることにしていた。曖の部屋にだけ、ベランダがあるのだ。ここなら、出入りは簡単なうえ、誰にも『飛ぶ』ところを見られずに済む。

部屋の中に振り返ると、不意にベッドで泣いている曖の姿が目に見え、飛び込んでくる。

再び、玲の胸中には凄まじい悲しみが流れ込んできた。

…曖ちゃん…！

急いで靴を脱ぎ捨てると、ガラス窓を開けて中へ飛び込む……

恐怖に身を震わせた。

嫌だ…そんなこと……！

(……?)

不意に、『何か』を感じ、玲はその目を細めていた。

屋外からこの部屋を覗き込み、自分達二人を面白げに眺めている、

不快な『視線』がある…

曖を庇うように支えながら、漆黒の瞳が鋭く窓面を探る。

…そこには、何者も存在していないようだ。

だが、『視線』は二人を眺め続けている。『それ』は抑えようとせず、強烈な邪気を二人の頭上に降り注いでいた。

その『視線』が突如、対象を曖一人に定めたことに気付くと、玲は彼女の黒髪に深く顔を埋めながら『力』を集中させた。

直後、玲の体からは見えない『力』の塊が迸り、家の四方へと走る。マンション全体を包みこむ結界が刻まれ、そこに新たな空間が創造された。

不快な『視線』は、その気配を消している…

(…でも、いつまでも保てないね…)

こんなにも悲しんでいる曖を、更に苦しめるつもりか…

絶対に、そんなことはさせない……僕が、曖ちゃんを護るんだ…
再び意識を曖に戻すと、玲は当然のようにそう決心していた。

曖はあらゆる悲しみと苦しみを玲に向かって吐き出してしまうと、その泣き声もやがて時の経過と共に小さくなっていった。

…不思議なの…何だが、とても落ち着いてくる…

玲が居てくれるのなら、この世界もそれ程悪いものではないかも知れない。

…私だけだったら…とても耐えられなかったのに……でも…玲君が一緒なら…

曖はその額を玲の胸に押し付けたまま、小さく掠れた声で囁いていた。

「…ありがとう…今、ここに居てくれて…」

「…ありがとう…傍に居てくれて…」

「…うん」

沈黙が、部屋に満ちる。

だが、二人にとつてそれは重く押し潰すようなものではなく、温かく包み込んでくれる黄金色の波に変わっていた。

「…話して、くれる？」

優しくそつと、玲は曖の耳元で囁いた。

その言葉に、曖は微かに頷くと、静かに言葉を押し出し始める…
「買い物を済ませた帰り道に、『あれ』を見つけてしまったこと…
それから、ずっと玲の名前を呼び続けていたこと…」

「…僕、曖ちゃんの声がちゃんと聞こえたんだよ。…とても、胸が苦しくなつて、哀しくなつて…だから、急いでここに來たんだ」

「…良かった…本当に…玲君が氣付いてくれて…」

曖は、そんな氣持ちをどうしても伝えなかつた。だが、どう頑張つても、きちんとした言葉には出來そうにない…

「…ありがとう…」

結局、それだけしか言えなかつた。

その時、玲の腕の力が強くなる。

「…分かつてくれたんだ…」

曖にとつてこれ程嬉しいことが、他にあるだろうか…

突然、玄関の扉が激しく叩かれる。同時に、曖の父親の心配そうな声が響いた。

「曖、曖！ 大丈夫なのか？」

その声に、曖はくすつと笑い、玲の顔を見上げていた。

「…曖ちゃんて…なんて、可愛いんだろっ！」

玲は心からの笑みを返していた。

「…もう、大丈夫だね。」

「パパ、鍵を持つてるのに…」

「僕、今日は帰るよ。でも…」

曖の表情から願いを読み取り、玲は大きく頷いていた。

「明日も来るからね！」

「嬉しい」

……曖は、朗らかな笑い声を上げていた……

玲はベランダに出ると、脱ぎ捨ててあった靴を履いた。

ガラス戸を開けて立っていた曖は、そんな玲を見ながら、まだ自分の中の想いを全部伝え切れていないような気がして……

「玲君……」

小さな声で、知らず呼びかけていた。

「何？」

履き終えて振り向く玲に、曖は突然抱き着いていた。

……ありがとう……本当に……

声には出さない。……そんな必要など、無いように思うのだ。

二人はにつこりと笑い合うと、玲は空へ、曖は部屋の中へと向き直った。

「パパ！ 鍵を持ってるでしょう？」

玄関に向かって走りながら、おどけて叱る曖の明るい声が、夕映えの空へと広がっていく……

玲はその愛らしい声に笑みを深めると、ベランダの手摺りを飛び越えていた。

不意に、幼い顔から表情が消える。

軽く瞳を閉じて大きな溜息を吐くと、そのまま屋上に向かって上昇した。

同時に、結界を解いてしまう。

やがて、屋上の縁を取り巻く立ち上がりから姿を現すと、玲はそこに居た存在に向かって静かに口を開いていた。

「あんなに、曖ちゃんは苦しんでるのに……もっと傷付けるつもりなの？ 緋夕羅^{ひゆいら}」

深く冷たい……まるで抑揚の無い言葉が紡ぎ出される。その様子は、とても小学四年生とは思えなかった。

ゆつくりと、玲の瞳が開かれていく…

その双眸は、抑えようとしてもしていない邪気を放つ源を、鋭く見据えていた。

普通の人間には見えていない。だが、彼の瞳はそこに一人の魔物の姿を映していたのだ。

四つん這いになってマンシヨンの屋上に這い蹲っているその巨体は、全身が黒い鱗で覆われている。手足には大きな爪が生え、防水用のアスファルトに鋭く突き立っていた。

玲の言葉に驚いて振り返ったその面は、黒く大きな瞳で占められている。獅子に似た面構えの中のその瞳は、だが夕陽を返しもせず、ただ深い穴が開いているかのように、見る者の視線を吸い込んでいた。

「俺が、見えるのか？ 貴様」

小さな泡粒を吐き出すような音と共に、唸れた声が零れる。一瞬、妖しげな銀光が口から飛び出し、宙に浮かぶ少年の目の前で弾けた。だが、玲は何の反応も示しはしない。腕を組み、浮かんだまま、ただそこから魔物を見下ろすだけだった。

…暫くの後、玲は口を開いていた。

「見えるさ。勿論だよ。」

お前が、その爪で誰かを引き裂いたりしたから、曖ちゃんはあるなにも悲しんだんだ…

…どうする？ 自分から、あの世界に帰るかい？

それとも、消滅させてあげようか。

僕、今はとっても怒ってるからね…そんなには、優しくなれないんだよ」

「くふア、くふア、くふア。貴様のような奴が、俺を消滅させるだど？」

緋夕羅は笑いながら、その大きな躯体を持ち上げていた。優に、玲の背丈の数倍はある。

今度は見下ろされる側になっても、玲はその身を少しも動かさな

かった。変わらず、その面にも表情など映されない。

「そうだよ。お前にも、分かってるんじゃないかな？ お前は、絶対に僕には勝てないよ。」

これ、何処かで見掛けなかったかい？」

胸ポケットの中のケースから、鉛色のカードを一枚取り出す。緋夕羅は、それを見ると醜怪な顔を僅かに歪ませた。

「夢鏡ノ泉に封印がしてたよね。」

春分の日に出て来たのがお前だと分かってたら、曖ちゃんが悲しむ前に対処出来ただけど……」

全身の鱗が、不快に軋む。

だが、やがて緋夕羅は大きく頭を仰け反らせて笑っていた。

「ふアツ、ふアツ、ふアツ。封印だと？ 笑わせる。」

あの泉はな、昼と夜の長さが等しくなる時しか開かれんのだ！
蠢きはしても、開かれることは無い。それが掟だ」

「そうだったんだ」

慌てもせず、続ける。

「あの泉：妖夢界ようむかいに繋がってるよね。」

お前もまた、人間の望みや夢が生み出した魔物：夢魔なんだ」

「そうだ。だからこそ、創り手たる人間になど、倒せる訳が無い」
見下ろす緋夕羅から聞き出すことなど、もう残っていない。あの泉の性質だけが分かればいいのだ。

玲はカードを人差し指と中指で挟み込むと、真っ直ぐ、底無しの黒い穴を見詰めた。

「そうだね。確かに、殺人というゲームを望む人間には、お前は倒せないだろうね」

不意に、玲の全身から黄金色の眩い光が迸る。

「でも、そんな人間ばかりじゃないんだよ」

身を貫くその『力』の大きさに緋夕羅が身構えた時、玲は夢魔に向かつて鉛色のカードを滑らせていた。

『力』を封入したカードは、だが容易に緋夕羅に避けられている。

そして、続けて二枚目のカードを抜き出す少年を見て、緋夕羅は嘲笑っていた。

「所詮、子どもよ」

静寂の奥深く…微かに黄金の揺らめきを湛える黒い瞳は、そんな緋夕羅をただ見上げるだけだった。

「…教えてあげるよ。」

僕のお父さんはね…ちょっとした研究所の開発部で働いてるんだ。このカードはね、そこで作られたんだけど…」

一枚目のカードが、緩やかな弧を描いて緋夕羅の背後に戻ってくる。

「これには、『気』を封じること、殆どのものを切り裂くことが出来るようになるんだ。

もつとも、僕の『力』は『気』だけじゃないそうだよ…」

それに対して、玲は名前など与えるつもりはなかった。

「そして…」

緋夕羅が戻ってきたカードを躲そうと身を捻った瞬間、そのカードに向かって玲は二枚目を投げつけていた。

「カードの面に、少しでも衝撃が与えられたら…」

二枚目のカードが、一枚目の面を切り裂く。

不意に凄まじい爆音が生じ、まるで炭酸が抜けるような緋夕羅の悲鳴が響き渡った。

「…『気』が解放されて、爆発するようにもなってるんだ」

迫ってくる炎と熱風の渦の前に、玲は平然としたまま片手でそれを弾き返している。朱と黄が絡み合う無数の舌は黄金色の輝きを前に身を振り、大きな曲線を描きながら虚空へと広がり散っていった。煙が収まるに連れて、緑色のどろりとした粘液を流す巨大な黒い腕が、屋上に転がっているのが見えてくる。そのすぐ脇に、失った腕の切り口を押さえながら、緋夕羅が凄まじい形相で立っていた。

「貴様ア！」

「腕を引き千切られることが、どんなことか分かったかい？ お前

に喰われた人達は、皆、それ以上の痛みと苦しみ、恐怖と絶望を味わったんだからね。

それに、お前が傷付けたのはその人達だけじゃない。曖ちゃんのような、何の関係も無い人まで苦しめたんだよ」

玲は、先程と同じ場所に浮かんだまま、ただ静かに、まるで変わらぬ調子で告げていた。

緋夕羅は、今や玲の言葉を聞こうとしなかった。

カッと大きく口を開け、もう一方の残った腕を振り翳しながら迫ってくる妖夢界の住民に対し、玲は冷たく続けた。

「…そろそろ、これも終わらせないといけないんだ。人が来るかも知れないからね」

その言葉が宙に投げ出された瞬間、玲を包む光が夕陽を遥かに凌ぐ明るさで輝いた。

緋夕羅は音の無いその光の波に飲み込まれ：次には、恐ろしい咆哮が、誰にも聞かれることなく辺りの空間に広がっていた。

：夕陽がその彩を取り戻す頃、屋上のアスファルトの上には、最早何も残ってはいなかった。

素早く辺りを見渡すと、玲の体が空中を滑る。カードの爆発で欠けた箇所を見つけると、彼はそこに小さな手を添えた。

刹那、金色の閃光が散る。

次には、建物は元通りに修復されていた。

痕跡を全て消すと、やがて玲は大きく溜息を吐き、再び空高く舞い上がっていた。

：曖ちゃんの為だったんだけど…あまり、気持ちの良いもんじゃないね…

少しだけ寂しそうな顔で、玲は家に向かって飛び始めた。

：曖ちゃん、明日はもう大丈夫かな…

輝かしい太陽は大地へと沈み、黄昏もその時を終えようとしている。

東方からは青白い闇が沈黙と共に天を隠そうと伸びていく中、未だ茜の残る空では鋭利な刃の如き三日月が、まるで何かを断つかのように黄金色に煌いている。

…明日、鶯の声と共に目覚めた時には、曖も悲しみを忘れてしまっていることだろう……

2 逢魔時 おわり

3 倫匹

「あれ？　なんだ、これだけしかなかったんだ…」

深い失望に顔を曇らせながら、玲は机の上に散らした硬貨を見つめていた。

明日、七月三日は曖の誕生日なのだ。金曜日になるのだが、玲は逢いに行くことを約束していた。

しかし、これだけのお金で、一体、何を買えるというのだろうか。今迄、一生懸命頑張って、貯めてきたのに…これじゃ、あのリボンだって買えないよ…

そう、もう既にプレゼントは決めていたのだ。

それなのに…

玲は全く無計画だった自分に嫌気が差し、お金を乱暴に机の隅へと手で払ってしまった。

天井を見上げて大きな溜息を吐く…

すると、不意に、背後から面白そうに震える声が聞こえてきた。

「珍しいじゃない。玲が、そんなにふて腐れるなんて」

「お姉ちゃん…」

今年から中学校に通っている、姉の恵菜だ。

実は、玲はこの豊かな黒髪を背に流す唯一の姉弟を、何でも知っている素晴らしい女性だとばかり思っていた。いや、それは決して間違いではないのだろ…しかし、曖と出逢ってから、その考えも少しずつ変わってきている。

どう控え目に見ても、曖に敵わないところが、恵菜にはやっぱり沢山あるのだ。

…料理なんて出来ないし…部屋だって、曖ちゃんみたいに綺麗じゃないもんね…

そんな目で弟から見られているとは露知らず、恵菜は振り向いた玲に偉そうな格好をしようとした。

腰に手を掛け、ふんぞり返ろうとして…だが、次にはその顔からはおどけた調子が消えてしまい、その口許からは本気で心配している声が零れ出した。

「玲、大丈夫なの？ 随分、顔色が悪いじゃない」

「え？ そうかな…」

思ってもみなかった言葉に、玲は面食らってしまった。

よく外で遊んでいるので、腕や顔は既に日に焼けてしまっている。そんな自分が病気になるなど、全く考えられなかった。

「疲れてはいないの？」

それなのに、目の前の恵菜は真剣そのものだ。

玲はその言葉に暫く考え込んだ後、僅かに首を傾げながら答えていた。

「うーん、ちょっとだけ、体がだるいくらいかなあ。でも、それは勉強のし過ぎだと思うよ」

「勉強！ …玲が？」

思ってもいなかった言葉に、今度は恵菜が驚いてしまった。

玲の成績は、それ程悪くはない。だから、今迄は特別に勉強などしていなかったはずだ。いつだって、玲は授業中に見聞きした知識だけでテストを解いてきた。

恵菜に言わせれば、玲は要領がいいのだ。外で力一杯遊ぶことを好む玲にとって、勉強は教室だけで十分なものだった。

それが…恵菜は不思議そうに弟を見つめていた。

一体、玲はどうしたのかしら…何かあったのかな…？

「そうだよ。明日、テストがあるからね。一杯、勉強しないといけないんだ」

玲は、本当に勉強を頑張ろうとしていた。その頑張りは、曖との逢瀬が重なる毎に、更に大きな決意へと変わっていく。

曖の所に行くと、いつも自分ばかりが教えて貰っているように感じるのだ。

…僕も頑張つて、曖ちゃんの知らないことを一杯勉強するんだ。

そして、僕も曖ちゃんに色々と教えてあげるんだ…

勿論、遊ぶことも忘れてはいない。だが、確実に玲の成績は上がってきていた。昨日のテストでなど、クラスの中で上位五人の中に入っているのだ。昨日、逢ってそのことを話すと、曖は自分のことのように喜んでくれた。その様子を見て、玲も心から嬉しくなったのだ。

だから…絶対、明日はクラスで一番になるんだ。その結果もプレゼントしたら、きっと曖ちゃんは喜んでくれる…

玲にとって、この曖の笑顔こそが一番の褒美だった。

…だが、勿論、プレゼントがそれだけでは物足りない。

再び溜息を吐き始めた玲を見て、恵菜は励ますようにその背中を叩いていた。

「ほら！　じゃあ、頑張りなさい。でも、やり過ぎは体に悪いわよ」

「…うん。分かってるよ、お姉ちゃん」

「そうね。じゃあ、お休み」

恵菜は玲の栗色の髪を優しく撫でると、そのまま部屋を出ていった。

そんな姉を見送った後、玲は気を取り直して机に向かうと、参考書を手に広げ始める。

曖の為…その想いだけが、玲を動かしていた。いや…そう信じて疑わなかったのだ。

その気持ちの為に、彼の瞳には幾重もの霞がかかり、見えるはずのものも見えていなかった。

彼には気付くことが出来なかったのだ。その時、部屋の隅から眺めている、一對の赤い獣の瞳に。

普段の玲であれば、簡単にその気配を感じられるのだが…

次第に、窓の外では夜が深くなっていく。

…多くの『夢』を、その壮大な懷に抱き込みながら……

夜のマントの上で、瞬く星は時を描いて流れていく。その清らかな美しい光の波は、大地にたゆたう多くの『望み』にそつと触れると、優しく照らし続けていた。

.....

教室の窓は全て開けられ、香笹町との境の山々から吹いてくる涼しい風が、絶え間無く中に吹き込んでいる。山々の上には蒼穹を背にして純白の峰々が立ち並び、その輝きには既に夏の気配が醸し出されていた。

心地好い風と、そんな夏の『空気』に触れようと、窓辺にある玲の席の周りには、いつもの顔ぶれが集まってきていた。

「玲、お前、少し顔色が悪いぞ？ 勉強のし過ぎじゃないのか？」

呆れたような龍真の言葉に、玲は明るい笑い声を上げた。

「お姉ちゃんにも、昨日そう言われたんだよ。そんなにひどいのかなあ」

屈託の無い玲の言葉に皆は笑ってしまったが、彼の隣に座っている綾子は、すぐに心配そうな顔に戻ると言った。

「でも、玲君よりも、和輝君の方が酷いわよ」

綾子の視線に応え、和輝は机に腰掛けたままにこりと微笑んでいた。

「有り難う。なにしろ、今日のテストで玲に負けると大変だからね。随分と、頑張ったんだよ」

和輝の落ち着いた言葉には、だが玲に対する優しさが満ちている。理由はよく知らないものの、玲が変わりつつあることを認めているのだ。

「委員長で、しかもクラスで二番の和輝君がそう言ってくれるんだから、僕も今日は頑張らないといけないね」

楽しそうな笑い声に、綾子は断言した。

「和輝君なら大丈夫よ。絶対、玲君になんか負けないんだから！」

「僕もそう言えたらいいんだけど。でも、どうしても不安になって勉強してしまうんだよ。不安になる理由なんて、無いんだけどね」

綾子の力強い言葉に、感謝の目を向けながら和輝は言った。

「勉強もいいけど、ちゃんと体には気を付けてよ？ 今にも倒れそうじゃない」

綾子は、本気で和輝の様子に心配していた。決して、冗談ではないのだ。どうも、本人は気が付いていないようなのだが……

綾子には、和輝が立っているだけでやっとなのように見えていたのだ。

「僕もそうなんだけど……」

玲が横から笑いながらそう言っていると、綾子は言下に言っただけだ。

「玲君なんて、どうでもいいの！」

「そりゃそうだよな。綾子が好きなのは、玲じゃなくて和輝なんだもん」

龍真がそう言った途端、綾子は真っ赤になって彼に掴み掛かっている。

玲と和輝は、そんな二人を見ながら愉しそうに笑っていた。

綾子が幼なじみを追いかけている最中に、一人の少女が和輝の方へと近付いてくる。そして、微かな笑みと共に声を掛けてきた。

「和輝君。もうすぐ、テストが始まるわよ」

静かで落ち着いたその声に、和輝は慌てて机から腰を浮かすと振り返って言った。

「御免なさい、井村さん。僕達、うるさかったんじゃないかな」

「うっん。そんなこと、無いわ」

龍真と綾子は、その少女の出現で急にふざけることを止めてしまった。

そして、玲もまた、この那瑠美の顔を、少しだけ困惑したように見つめていた。

彼女は、このクラスで一番成績がいいのだ。だからと言う訳では

ないのだが、どうしても玲はこの那瑠美のことを近寄り難く感じてしまっていた。綺麗だし、人並みには運動も出来るし、性格もしっかりとしている。別に他人と付き合うことが苦手な訳でもないし、傲慢な態度を示す訳でもない。だから、クラスの多くの男の子には人気があるのだが…

玲には、何故か時々、この那瑠美の生気がまるで感じられなくなることがあるのだ。

儚く揺らめき、今にも消え入りそうに瞬く淡い灯火…それが、玲が普段感じている那瑠美の『気』だった。

…曖ちゃんとは、全然違う『弱さ』なんだけどね…

いや、弱いどころか…玲は、那瑠美が母親一人の手で育てられてきたことも知っていた。その為もあるのだろう、とても小学四年生とは思えないほど大人びており、その性格の確かさと落着きからクラスの副委員長や多くのリーダーに選ばれているのだ。

そう、彼女の行動からは、とても『弱さ』など感じられない。だが…どこかが『死んで』いるのだ。

ただ、玲にはそれが何なのか、よく分かってはいなかった。

「那瑠美ちゃん、どうしてもそんなに元気なの？ クラスで一番良い点数を取るのに、全然疲れてないみたい」

和輝の様子を横目で見ながら、複雑な表情で綾子は尋ねていた。

「私は、早い時間から勉強しているの。だから、テスト前でも睡眠時間は他の日と同じなのよ」

「それが、一番良い方法なんだろうね」

和輝が同意するように大きく頷いた時、始業のベルが鳴った。

急いで、皆が席に戻る。

玲も座り直しながら、ふと隣の綾子を見ると、彼女は悲しそうに小さく溜息を吐いていた。

…そうよ…どうせ、あたしみたいな女の子より…きつと…和輝君も…

そんなことを思いかけた時、隣の席から囁き声が聞こえてきた。

「綾子ちゃんらしくないね。もっと、自信を持っていいたいと思うよ」

玲の言葉に、不意に綾子は真っ赤になってしまった。

だが…確かに、玲の言う通りなのだ。

…そうね。…あやふやなことで悩むなんて、あたしらしくもないわ…

「…ありがとう」

綾子の感謝の囁きに、彼はただにこりと笑い返すだけだった。

テストの用紙が配られる。

そして、開始の合図と同時に、玲は鉛筆を手にしていた。

(…あれ?)

…おかしいなあ…これ、昨日、確かに解いたんだけど…

鉛筆が少しも進まない。思い出そうとするのだが、その途端、凄まじいばかりの倦怠感が襲ってくる。

…これじゃ、曖ちゃんに喜んでもらえないよ…

頭が少しずつ、下ってきてしまう。

そして…

…気が付けば、既にテストの時間は終わってしまっていた…

「玲君…これ…」

答えを合わせるために、隣の玲と答案用紙を交換した綾子は、その内容を見て啞然としてしまった。

「…そうなんだ。どうしても、書けなくて…」

玲の、これ程まで弱々しい笑みを見るのは初めてだった。

だが、何も書けずに終わったのは、玲だけではないらしい。和輝も、答案用紙に一字も書くことが出来無かったのだ。しかも、彼の場合は玲よりも更に酷く、用紙が回収されてからも、なお暫くは椅子から立ち上がれないほどだった。

「和輝君…」

いつもは明るい綾子でさえ、ここまで打ちのめされた和輝には、一言も声を掛けることが出来無かった。

ただ一人、龍真だけが笑いながらこう言った。

「勉強をし過ぎるから、こんな風になるんだぞ」

だが、その言葉も、無理をしているのがよく分かるのだ…

玲は、龍真の言葉の通りだとは思ってもいなかった。だが、今は何も言わない…いや、言えないのだ。口を開いて意見を述べる気力すら、体の中に見出せなかった。

まだまだ、今日は沢山する事があるのに…

今度は、玲が大きな溜息を吐く番だった。

学校からの帰り道、玲は考えていたよりもずっと小さなりボンと、綺麗な包装紙を買いに立ち寄った。

さてと…次は、プレゼントを集めないといけないね…

家に戻って荷物を部屋に投げ込むと、重い足を無理に動かして、玲は宮木町と香笹町の境の森の中へと入っていった。

曖は急いで学校から戻ると、早速ケーキを焼き始めた。

父親と一緒に食べる分と、玲と一緒に食べる分…サイズは小さいものの、二つも作らなくてはならないのだ。

だが、曖は別に辛いなどと思ってもいなかった。それどころか、嬉しくて仕方が無いのだ。

…今迄生きてきた中で、…きつと、今日が一番嬉しい日なの…
どうしても、笑みが零れてしまう。

玲のことを考えるだけで、曖は普段の臆病な衣を脱ぎ捨ててしま
い、その顔は生き生きと輝き出すのだ…

手際よく、ケーキ作りは進んでいく。

…早く、玲君と約束した十時が来てくれないかしら。

今日は特別に、夜になってから逢うことにしていたのだ。

…パパが起きてるかも知れないけど…玲君は、大丈夫って言っ
たもの…だったら、きつと、大丈夫なの…

上下に切り分けられたスポンジの間に、冷やしておいたクリーム
を塗っていく。薄くスライスした苺をその間に挟んで…

その手付きは、とても小学二年生の女の子のそれには見えなかつ

た。随分と、手馴れたものだ。

ただ、手際が良過ぎると、困ってしまうこともある。

出来上がってからの時間が、とても長く感じられてしまうのだ。

すっかり準備を終えてしまうと、曖は部屋の中で座り込んでいた。

…いつも、玲君が来てくれる時だけ、どうして時計さんはのんびりしてるのかしら…もっと、早く進んでくれたらいいのに…

部屋から見えている太陽も、今日はいつもより遅くなってから沈むつもりらしい。

本当に、困ったものだ。

…セミさんも、もうそろそろ、おやすみしてくれてもいいのに…夕暮れ時になっても未だ厳しく照りつける陽光の中で、曖は大きなぬいぐるみを抱きながら、じっと時計だけを見つめて座り続けていた。

復習も予習も終えてしまうと、那瑠美は引き出しの奥から一冊の日記帳を取り出していた。

いつものことだが、母親は仕事の為に、夜遅くまで家には帰ってこない。その夜食も含めて、全てを那瑠美が用意しておくのだ。

毎日が同じように繰り返される。今のうちに、日記帳を手にすることもまた、いつもと同じ繰り返しだ。

だが、日記帳を手にした瞬間、彼女の中にだけ変化が生じる。生気の薄れてしまった鳶色の瞳が、微かに息を吹き返したかのように見えるのだ。

教室の中では絶対に見られない、『愛情』らしきものがその双眸に映される…だが、そこには黒く冷たい…感情の無い一点もまた、秘められていた。

赤い表紙をした日記帳の左下の隅には、白いインクで一匹の狐のようなものが描かれている。小さな絵だ。小学生になったばかりの那瑠美が、心を込めて描いたもの…

…その狐の尾は、故意にか、偶然にか…二つに裂けていた。

「ピツピ、少しやり過ぎなんじゃない？」

そつと、その小さな白狐の絵を叱っている。そんな那瑠美の声を若しも聞いたなら、玲や教室の皆はひどく驚いたことだろう。それは、優しく、温かく…甘い声だった。

それでもなお、その声に平板さが付き纏うように感じられるのは、気のせいだろうか…

表紙を開くと、今日の日付を指で押さえる。

純白の何も無い空間に、彼女は今日も物語を書き始めていた。

那瑠美の意に従い、ピツピと名付けられた白狐の主人公が闇夜を駆ける。

那瑠美が望む…そして、望まされる物事を、全て解決へと導く為に……

まるで、水が川の道を違えず流れていくかのように、文章は留まることなく白い隙間を埋め尽くしていく。ただただ書き進めていくだけの彼女の背後を、闇がゆっくりと…無音のまま覆い尽くそうとしていた。

…その闇は、一点の明かりすらも含まない…冷たく、深い「もの」だった……

（パパ、もう眠ったのかしら…）

そつと耳を澄ませてみるが、隣室からは何も聞こえてこない。

もうすぐ十時になる。どれ程、この時刻を待ちわびていたことが…残念ながら、父親からの贈り物さえ、曖の逸る心を鎮めはしなかったのだ。

時計が示してくれた好意に嬉しそうに一人微笑むと、曖は机の上のケーキや紅茶の入ったポットを確かめるように眺めていた。本当は玲が来てから取りに行きたかったのだが、父親に見つかってしまったかも知れないので諦めたのだ。

別に、玲のことを隠す必要は無いのかも知れない…そうも思うのだが、何故か曖は誰にも玲のことを知られたくはなかった。

玲のことは、曖だけが知っているのだ。

その事實は曖の心を嬉しくさせると同時に、少しだけ不安な気持ちにもさせていた。

…もし、玲君のことが全て《夢》だったら…

そんなはずもないのだが…それでも、『何か』が不安だったのだ。私…こんなにも幸せな時間を持ったことが無いの…

…だから、なのかも知れない。

ぼんやりとそんなことを考えていると、不意に聞こえてきた物音に思わず曖は悲鳴を上げそうになった。

そつと、ガラス戸を叩く音…あんなにも長い間、待ち望んでいた音だ…

急いで立ち上がると、ベランダの方へと駆け出す。そして、想いのままに勢いよく、音など気にもせず、ガラス戸を開いていた。

「誕生日おめでとう、曖ちゃん！」

両手を後ろに回したまま、目の前で玲が笑ってくれている。

大きな声を出しているのだが、既に玲は『力』の壁で音を遮断してしまっていた。

喜びのあまり微笑んだまま何も言えずにいる曖に、玲は少し掠れた声で続けた。

「あの、これ…」

そのまま両手を差し出す。

…そこには、大きな素晴らしい花束が広がっていた。

「わ…ああ…」

こんなにも嬉しい贈り物…

曖には、このプレゼントほど嬉しかった贈り物は一つも思い出せなかった。

白地に黄の線が走る山百合を中心に、紅紫の蛍袋や鮮やかな橙の薺萱草、青紫の草蓐など、色とりどりの草花が一枚の薄い包装紙に巻かれている。その桃色の紙には、細い水色のリボンが軽く結ばれていた。

「あの…本当は、別の物をあげるつもりだったんだけど…僕、お金がそんなに無かったんだ。だから…学校から帰ってから、一生懸命に摘んだんだよ…御免ね、こんなもので…」

「うっん！…私、こんなに素敵なもの…もらえるなんて、思っ
てなかったの…」

殆ど泣きそうな声で、曖は玲に笑い掛けていた。

「…今日、玲君が来てくれるだけで…私、とっても嬉しかったのに…
本当に、ありがとう…」

「あはは…。実を言うとな、これに百点のテストも付けてくるつもり
だったんだけど…でも、無理だったんだ」

苦笑しながら、小さく呟いている。あの時の状況を思い出すだけ
で、何故か疲れが酷くなる…

そんな玲の声の中に澱みを感じ、曖は驚いて叫んでしまった。

「玲君…！大丈夫…？」

一昨日逢いに来てくれた時には、テストの成績が良かったんだと、
玲は元気に笑いながら言っていたのだ。

だが、今、目の前にいる玲は、まるで元気が無い。

…もしかして…この花束の為に…？…私の為に…？

「うん。ちょっと張り切って勉強し過ぎたみたいなんだ。でも、大
丈夫だよ」

明るく言っではくれるのだが、どうしても曖にはその声が掠れて
聞こえてしまう。

今にも倒れそうに見えてきて…今度は心配から泣きそうな顔にな
り、曖はすぐに玲を部屋の中へと招き入れた。

「そんなに疲れてるのに…ごめんなさい、私が我儘だから…」

「うっん！絶対、そんなこと無いよ。僕が来たかったんだから
ね」

玲はそう言ってくれる。そう言ってくれるのだが…

曖はそっと、物音を立てないようにガラス戸を閉め始めた。微か
な軋みさえも、今の玲を傷付けてしまいそうに思ふのだ。

ガラス戸を閉め終えた瞬間、ベランダのすぐ外の空間から、白い『何か』がじつとこちらを見ている気がして、曖はびくつと身を震わせてしまった。

だが、すぐにその奇妙な感覚は消えてしまう…

「どうかしたの？」

部屋の中で、玲が不思議そうな声を上げている。

曖は急に冷たくなった夜気を遮るように、もう一度きちんと戸締りを確認してから、少しだけ首を傾げて玲を振り返っていた。

「『何か』が外にいた気がしたの…ネズミさんくらいの大きさで、白くって…」

目の錯覚だろうか。どうも、曖にははっきりとした確信が無かった。

「そうなの？」

そう言われてから、玲はすぐに『力』の網を広げてみる。だが、その中には、最早何ものも捉えることは出来無かった。

…いや…今の玲の状態では、その網にも大きな綻びがあちこちに穴を開けていたのだ。

「…でも、気のせいだと思う…」

これ以上、変な事を言って玲に気苦労をかけさせてはいけない。

曖はにっこりと笑いながら、玲を床に座らせていた。

玲の向かいにきちんと正座をすると、慣れた手つきで紅茶を注ぐ。温かな香り漂う小さなカップを、曖はそつと差し出していた。

「これで、温まる…？」

「うん！　ありがとう」

玲はにっこりと笑いながらカップを受け取ると、目の前にあるケーキを見て驚いたように言った。

「これも、曖ちゃんが作ったの？」

「うん…」

とても尊敬しているような眼差しを向けてきてくれる…少しだけ、恥ずかしい。

…でも、…失敗してたらどうしよう…

「僕ね…本当に、思うんだ。曖ちゃんからは、いっぱい教えてもらってるのに、僕は何も教えてあげられないんだな、って。」

だから、一生懸命勉強もして、曖ちゃんが知らないことを、もっと沢山知ろうとしてもしてるんだけど…」

「うっん！ 私…そんなに…」

「うっん。それがそうなんだよ」

真面目な顔付きで、玲は頷いてみせた。

「例えば、どうしたらそんなに簡単に正座が出来るのか、とか。どうしたら、ポットから紅茶を零さずに注ぐことが出来るのか、とか。他にも、色々教えてもらわなくちゃいけないことが、沢山あるんだよ」

「そんな…」

愛らしく頬を上気させると、くすくすと笑い出す。そんな曖に玲もにつこりと笑うと、口を開きかけた。

「曖ちゃんみたいに…」

だが、ふと真剣な顔になると、慌てて言葉を止めてしまう。

そんな玲に、曖は小首を傾げていた。

「…？ どうしたの…？」

「うっん！ その…こんなこと、尋ねたら…きっと、曖ちゃんが悲しむから…ね」

「うっん…」

言い淀む小さな言葉に、そつと曖は首を横に振っていた。

「どんなことでも、私…玲君なら許せるもの…」

だって、玲君、絶対に傷付けようとして、何かを言うんじゃないもの…」

「でも、やめとくよ」

「うっん。話して…」

静かに見つめてくる曖の視線に、玲は仕方無く言葉を選び始めた。
「その…曖ちゃんみたいに、お母さんやお父さんが、…あの、一人

しか、いないと…みんな、曖ちゃんみたいにしっかり出来るのかな…？」

ふと、曖の様子を見て、思い出したのだ。

同じクラス的那瑠美のことを…

「そうね…」

曖は、玲の言葉に優しく微笑むと暫く考えていた。

玲が決して自分から姉のことや両親のことを話さないのは、もうずっと前から気付いていた。

母親のいない自分に対するそんな玲の心遣いは嬉しかったのだが、曖にとって、母親とは、生まれた時から既に自分のものではなかったものなのだ。

他の人の母親を見て、羨むことも無いわけではないし、寂しくなることもある。

だが…玲には、そんな思いさえも話せるのだ…そんな彼の言葉に、曖が傷付くはずもない。

「私には…よく分からないの。でも、…きっと、そのことは関係無いと思う。」

多分、…その人自身で決まると思うの…ママがいなくても、私みために、いつも失敗してる子もいるし…」

「曖ちゃんは、絶対、そんなことないよ！」

玲は、決して曖がすっかりしていないとは認めなかった。今迄、どれだけ曖が言っても、これだけはいつも絶対に玲は譲らなかったのだ。

そして、勿論、今も…

「…ありがとう」

だから、いつも、こんな時には曖は微笑んでそう応えることにしていた。

玲の気持ちは、本心であるだけにとっても嬉しいものだったのだ。

…なんて、私…幸せなのかしら…

本当に、曖はいつもそう思うのだ。

玲は、自分が口にしてしまったこの話題を、もうこれ以上続けるつもりはなかった。どれだけ優しく曖が笑ってくれていても、玲の方が心苦しくなってしまうのだ。

ケーキの横に赤い口ウソクを見つけると、玲はすぐに取り上げ、ケーキの真ん中に差し込んでいた。

8の字形をしたその口ウソクの先に、軽く指を鳴らすだけで火を点じる。

「さあ、曖ちゃん！」

玲の言葉に微笑んで頷くと、曖は揺れる炎にそつと顔を近付けた。フウ…

八歳になったばかりの少女の息吹で、朱と橙に瞬く炎は、柔らかくその目を閉じてしまう。

「おめでとう！」

嬉しそうな笑みが、可愛い顔に広がっていく。

僅かに頬を染め、恥ずかしげに俯きながら、曖はそのケーキを切り分けていった。

その一切れを取り、口に運ぶ。

そんな玲の様子を、ときどきしながら曖は見守っていた。

「…うん！ とってもおいしいね」

本当に、曖ちゃんって凄い！

安心したように笑う曖を前にして、そんな彼女と一緒に自分がここで笑い合っていること…

そのことが、玲にはとても嬉しかったのだ。

話題が弾むに従い、小さなケーキは次第に小さくなっていく。

楽しい時間は黄金色の豊かな流れとなり、二人の周りを素早く通り過ぎていつてしまった。

ふと気付けば、壁に掛かった時計は、既に真夜中を示している。

「もう…」

もっと一緒に居たいのに…どうして、時計さんはもっとゆっくり進んでくれないのかしら…

自分の都合だけでこんなことを思うのも、相手が玲だからこそだった。

だが、勿論、暖は玲が酷く疲れていることも忘れてはいなかった。体に無理をして、それでも玲は来てくれたのだ…

「玲君：大丈夫？」

帰ろうと立ち上がる玲に、細い手を差し伸べる。

「うん！ 平気だよ」

逆に励ますように微笑んでいた玲は、ふと思い付いて暖に尋ねていた。

「暖ちゃん。もう少し、起きていられる？」

「え？ …うん」

不思議そうに小首を傾げる暖に、玲はにやっと笑ってみせた。

「じゃあ、これから散歩に行こうよ」

「…？」

玲はそう言つて窓を開けると、靴を履き始めている。戸惑いながらもついてくる暖に、玲は上から何かを羽織るように言った。

「少し、寒いからね」

その言葉に黙って素直に従うと、玲は暖をベランダに連れ出していた。

今夜は月が出ていない。見上げる空は、とても黒く…底の無い穴のようにも思える。だが、その暗さは、見ている者に恐怖を与えるものではないのだ。その穴の底には、無数の星辰が散り、様々な宝珠でその身を飾っているのだから…

暖はまだ、その煌きの名は知らない。だが、知りたいと思う。…知らなくてはならないのだ。

暖にとって、《自然》は…それが星であれ、あまりにも身近に感じってしまう存在なのだから…

ぼんやりと空を見上げている暖の背で、静かに窓を閉める。次には、玲は不意に暖の体を抱き上げていた。

「きやつ…」

驚いた拍子に、首に手を回してしまう。

「しつかり掴まってね」

玲がそう言った瞬間、暖は二人が空中に浮かんでいることに気が付いた。

つい先程まで居た地上が、今では随分と下の方に見えている。

「大丈夫？」

少しだけ心配している玲の声に、暖は視線を上げるとにつこりと微笑んで応えていた。

恐くはないのだ。玲が、こんなにもしつかりと自分を抱いていてくれるのだから。

「ちよつと、目を閉じててね」

素直に、玲の言葉に従う。

刹那、とても温かな流れを感じて…暖は知らず笑みを深めていた。細い腕でしがみついている首や、自分を支えてくれて腕から、『何か』が暖の中に伝わってくるのだ。その緩やかで心地好い流れに、暖はただ身を任せていた。

気付けば、周りに風を感じる。だが、すぐ傍にある玲の温もりは、その寒さからも暖を守ってくれていた。

「もういいよ」

どれだけの時間が流れたのだろう…耳元でそつと囁く声がする。その言葉に従ってゆっくりと目を開けると、暖の漆黒の瞳はその眼下に豊かな森の広がり認めていた。

玲が降ろしてくれたのは、その森を見渡せる、高い崖の中腹だった。

岩棚の端に立ち、暖は瞳を上に向ける。そこには、町中よりも更に美しい光を放つ、優しい星達の輝きがすぐそこに見えていた。

「…ああ…」

なんて素敵なのかしら…

天蓋に広げられた闇の敷布に、無数の宝石が鑲められている…暖は何も言えずに立ち尽くしていた。

玲はすぐ傍で満足そうな笑みを浮かべると、そつと、曖の気持ち
を断ち切らないように言葉を紡いだ。

「ここ、宮木町と香笹町の境にある森を、南に来た所なんだ」

「玲君。…私、…ありがとう…」

曖は心から感謝して…ただ、それだけを呟いていた。

だが、その言葉だけで、玲には十分だった。

美しい…本当に、美しい…いつかは、その名を知る時が来るだ
ろう。だが…今は、ただ美しい…それだけでよかった…

玲も曖も、岩棚に腰を下ろすと、ただ静かに…一言も話さずにた
だ見詰め続けていた。

全てが素晴らしかった。温かな微風も、手に触れているこの大地
の柔らかさも…全てが二人には優しい存在だった。

この星空に、飽きるということはない。だがやがて、玲はその余
韻を曖の中に残したまま、そつと立ち上がると手を差し出していた。

「曖ちゃん…」

黙ってその手を握ると、そのまま額を玲の胸に押し付ける…

「…いいね？」

こくん、と小さな頭が頷く。それを確かめ、玲は『力』を集めて
いた。

すぐに、黄金色の揺らめきが二人を包む。

…次には、幼い二人の姿はその岩棚から消えてしまっていた。

直後、二人はいつものベランダに戻っていた。

足が着くと同時に、もう一度、曖は玲に抱きつき囁く。

「素敵な誕生日を…本当に、ありがとう…」

何故、「ありがとう」という言葉しか出てこないのだろう。もっ
ともつと、伝えたいことはあるのに…

「僕も、とつても楽しかったからね。」

おめでとう、曖ちゃん」

二人は顔を見合わせると、共ににこりと微笑んでいた。

「…じゃあね！」

ベランダから飛び出しながら、同時に部屋を囲んでいた『力』を解放する。

そのまま遠ざかっていく玲の姿を見送りながら… 暖は小さく呟いていた。

「きつと… そうなの。 …… 本当に、沢山… 玲君からプレゼントを貰ったけど…」

… 今日、玲君がここに来てくれたことが… きつと、一番、素敵なプレゼントだったの…」

他に、一体、何が欲しいというのだろう。こうして玲と逢うこと… それが今の暖にとって、一番の幸せなのだから…

見えない地下では太陽が天に戻ろうと急ぎ歩を進めており、暫くすれば東方からその金色の曙光を夜の裾をもたげて広げ始めることだろう。白む空には金紅色に輝く薄雲が重なり現れ、愛らしい鳥の讃歌にその身を飾りながら、新たな一日が始まるのだ…

それまでにまだ少し、暖には幸せなまどろみを味わう時間が与えられているだろう。

3 倫匹 おわり

4 倫常

曖の誕生日も過ぎ、新しい週が始まる。

あの日以来、玲を襲っていた疲労から、体力も意識も目に見えて回復してきている。

心配に満ちた視線でそつと見守り続けていた恵菜も、もう今では安心していた。

ちよつと顔色は悪いけど…こんなに元気が有り余ってるんだもの、大丈夫だわ。

曖が玲を招き入れた際に『何か』を見て以来、玲は自分自身の周りに常に気を配っていた。文字通り、『気』の網を広げていたのだ。確かに、その『何か』は玲の後を追ってきていたらしい。何度か微かな気配が網のすぐ傍まで近付いてきたのだ。だが…疲労と倦怠の影響はまだまだ深く、未だに彼はその邪気の源を捕えることは出来ずにいた。

それでも、その『何か』は最早玲に近付けずにいる。

あの『何か』に、ずつと意思や心、力を吸い取られていたんだらうね…

今更ながらそのことに気付き、玲は一人苦笑していた。

以前の玲なら、もっと早くに対処出来ていたのだろう。だが、今の彼には他に意を向ける素晴らしい存在がいるのだ。

曖の為…その為なら、どんなことになっても後悔などしない。

…これから、頑張ればいいんだからね。

月曜日の今日、玲は珍しく朝早くから学校に向かっていた。

まだ誰も来ていない教室に入ると、そのまま席に座って待ち始める。

…彼は、いつも、必ず一番に教室に入っているはずだ。だが…時間が過ぎていくにつれ、玲の額は曇り始めた。

何故、彼…和輝は来ないのだろう……

和輝も又、玲と同じ症状に襲われていたのだ。彼は普通の少年だ。特別な『何か』の存在になど、気が付くはずもない。

ましてや、今ではその『何か』は玲から力を吸い取れずにいる。その分までも、和輝一人から補おうとしているのではないか…

「あれ？ 玲君、珍しく早いじゃない」

教室に、人が少しずつ増えてきている。その中に、綾子の姿もあった。

響き渡る澄んだ声の横から、龍真も安心したような口調で声を掛けてきてくれた。

「顔色も随分と良くなったじゃないか」

「本当ね。和輝君も、そうだといいいけど…」

玲の横で荷物を下ろしながら、空いている席に視線を投げかける。未だに席の主が現れていないことを知り、その眼差しは瞬く間に不安に覆われてしまった。

「もう…とつくに、来ててもいい頃よ」

意識の一部をあちこちに飛ばしていた玲には、その時既に彼女以上のことが分かっていた。

もうすぐ、正門が閉じられるのだ。だが、駆け寄ってくる集団の中にさえ、和輝の気配は認められなかった。

少なくとも、この学校の周辺に、和輝は存在していない。

「…今日は、休んだみたいだね」

和輝の家は知っているのだが…このままの状態で探るには距離がありすぎる。何処かに隠れて集中してもいいのだが…

迷っている間に、授業が始まってしまう。

結局、和輝はその優しい姿を見せることはなかった。

授業中、ふと、誰かが和輝の席に視線を滑らせる。そこに重みを感じ取り、玲は視線の源を探った。

…そこには、那瑠美が座っていた。

あまり感情を見せないその瞳に、僅かながら不安が漂っている気

がしたのだが…更にその奥には、淡い喜びも秘められている気がして、玲は少し驚いていた。

でも…そうかも知れないね。和輝君がいなくなったら、このクラスで一番になるんだもんね。

最も重い視線を投げかけているのは、隣の綾子だ。

ずつと授業中も空席を見つめたまま、時折、その両手を心配そうに力一杯握り締めている。

…綾子ちゃん……

その様子に、玲はそつと優しく笑みを浮かべていた。

小さく、一人頷く。

…そうだね。一緒に連れて行こう。

学校の帰りに、和輝の家に寄ってみよう。そう、決めたのだ。

自分にとっても、綾子にとっても、手遅れとならないように……

一時間目が終わる。

その休み時間に三人が集まると、そこで龍真がふと思い出したように言った。

「そう言えば、去年も和輝みたいになった奴がいたよな」

「そうだったかな？」

玲と同じく、横にいた綾子も不思議そうな顔をしている。

「そうさ。ほら、去年は二組だった雄次なんて、三ヶ月も入院したじゃないか。四年生になったら急に元気になったけど、勉強が遅れてしまって、今じゃ隣のクラスで泣いてるんだもんね」

「…そう言えば、そんなこともあったね」

玲は少し考え込むように言った。

「それなら、その前の年にも、恵子ちゃんが急に身体を悪くしたわよ」

薄気味悪そうに眉を顰める綾子に、龍真は大きく頷いた。

「ほら、皆、頭がいい奴ばっかりだろう？ まあ、玲は例外になるけどな」

「あははは」

…でも、若しそうなら、和輝君は当分学校に来れないね…」

「そんな…和輝君が可哀想よ。…ねえ、この学校、何かが祟ってるんじゃない？」

「昔、頭が悪くて死んだから、その腹癒せに成績がいい奴ばかりを襲う幽霊か？」

龍真はそう言つと、大きな声で笑い出した。

「そんなのがいたら、今度は井村さんが危ないね」

玲も、龍真と一緒に笑つていた。

勿論、そんな危険な存在など、この学校にはいない。危険でないものなら、少しだけ彷徨つてはいるが…

「そんなに笑わなくてもいいじゃない！ あたし、本気で心配してるんだから」

綾子が脹れて横を向くと、龍真がすかさず言つた。

「そつだよな。なんだつて、和輝は綾子の一番大切な…」

だが、その言葉は真つ赤になつて怒る綾子の手で、不意に終わらされてしまった。

本当に、綾子にとって和輝が一番大切な人なのだが…残念ながら、彼女には敵が多過ぎた。周りにいる女の子の殆どがそつだと言つてもいいだろう。

この気持ちにしても、冗談にすることでは表せないのだ…

勿論、玲と龍真について言えば、二人ともその気持ちはよく分かつていた。だが…和輝はどうだろう？

玲は笑つてそんな二人を見ながら、以前龍真が言つた言葉を思い出していた。

「和輝は勉強のことならともかく、女の子のことについては、ちょっと間が抜けてるからなあ」

…どちらかと言えば、玲もこの言葉に賛成だった。

休み時間が終わり、皆が席に戻り始める。その時、玲はそつと何事かを紙に書くと、隣に座っている綾子に渡した。

「…？」

不思議そうな面持ちで紙を開くと、中の言葉に不意に頬を赤く染め、綾子はそつと玲に囁いた。

「…ありがとう。勿論、あたしも行くわ…でも…」

だが、残りの言葉は、玲が向けてくる笑顔を見れば、必要の無いことが分かる。

綾子はその笑顔に、もう一度、感謝の笑みで応えていた。

…これで、和輝君の家に行くことが出来るわ。

実を言えば、綾子は一人でも行こうと決意をしかけていたのだ。

龍真は家の用事で早く帰らなくてはいけないらしく、彼女は自分から玲を誘う気ですらいたのだが…

玲のお陰で、少しだけ気が軽くなる。

…玲君って、本当に不思議。何でも分かるんだから…

その彼は、視線の先で既に授業に没頭し始めていた。

天上から降り注ぐ光の矢は、七月の今が一年中で一番厳しいもののように思える。

額に伝う汗を拭いながら、玲は少し後ろに下がって付いてくる綾子を振り返っていた。

「こつちだよ」

綾子は、実は今日が初めてなのだ。今迄、とてもではないが和輝の家に一人で行く勇氣など持てなかった。

安心させるように玲は何度も笑ってくれるのだが…

本当に、自分が行ってもいいのだろうか。

綾子は、普段ならあまり迷うことは無いのだが…今は、不安と心配で心が揺れてしまう。

やっぱり、迷惑かしら…でも、和輝君の様子も知りたいし…

どうしても、誰かからでもいい、安心が欲しいのだ。自分が正しいと、誰かが言ってくれたら…

いや、それは玲に失礼だろう。だが…安心仕切れないのも本当なのだ。

真っ赤になったまま、いつもの多弁さがみられない彼女に対して、玲は直接には何も話しかけなかった。

…話しかけても、返ってくるのはきつと、全然意味の無い返事だらうしね。

やがて、切妻の古い日本家屋が見えてくる。立派な門構えの前に立つと、玲はそのまま中へと入っていきこうとした。

「ちょ、ちよつと！ 玲君…」

慌てている綾子に、彼は笑いながら振り返ると言った。

「それ、音が小さくてあまり聞こえないらしいんだ」

清らかな…そんな言葉が似合う前庭を過ぎると、玲はいきなり玄関の戸を引き、中に向かって大声で叫んでいた。

「おばさん、居ますか？」

「玲君？」

奥から、幽かな足音が小走りに近付いてくる。

暗がりから現れた和服姿の女性の様子を見て、不意に玲は顔を引き締めると静かに尋ねていた。

「…和輝君、そんなに具合が悪いんですか？」

白皙な顔が、一層青白く沈んで見える。

全身から疲労と不安を滲み出しているその母親の姿に、綾子は恐怖心から両手を握り締めると胸元に強く押し付けた。

「…そうなの。」

今からでも、入院させた方がいいのかどうか…お医者様と相談しようとしていたところなの…」

「和輝君には会えますか？」

「玲君…でも、眠っているから…」

どうしたらいいのか迷っている母親に、思わず綾子は叫んでいた。
「お願いします！ 静かにしていますから、少しだけでも、和輝君に会わせて下さい！」

縋り付くような瞳で、必死になって…

「お願いします！ このままじゃ、あたし…」

困った表情で、母親は綾子の顔を見つめていた。彼女に会うのは初めてなのだ。

そつと、視線を玲に移す。

その視線に、彼は大きく頷いていた。

和輝の母親は小さく溜息を吐くと、その少女に向かって言った。

「…じゃあ、少しだけなら構いません。お願いだから、和輝を起こさないでね」

「大丈夫ですよ、おばさん」

その静かで力強い言葉には、最早何も言えなかった。

玲は綾子の手を取ると、滑るような足取りで、素早く奥の和輝の部屋まで彼女を案内した。

洋室の扉がきちんと閉められている。

実際にここまで来てしまうと、先程の勢いは何処に消えてしまったのか、綾子は知らずに少しだけ身を引いてしまった。

…和輝君の様子は知りたいけど…でも、若し嫌われたら…

その時、不意に繋がれていた手に、優しく確かな力が加わる。

見上げた先では、励ますような揺るぎない微笑みが彼女を見下ろしていた。

純粋なその笑みには、迷いすらも許されない…

…綾子は瞳を閉じて深呼吸すると、そつと囁いた。

「ありがとう。もう、いいわ」

「じゃあ…」

玲が静かに扉を開ける。

少しずつ、ベッドの上の和輝の姿が見えてくる…綾子は視野に入った彼の様子に、声も無く…思わず座り込んでしまっていた。

あれが…あれが、先週迄学校に来ていた和輝なのだろうか？

何故、あんな風に…骨と皮だけに見えるのだろう。

何故、横顔には…まるで生気が感じられないのだろう。

あれでは、まるで、まるで…

…死んでいるみたいではないか…！

「…嘘よ…あんなに青白い人が、…和輝君だなんて…」

茫然としながら微かに首を振る綾子に、玲は冷たく感じる程に落ち着いた声で言った…いや、命令をした。

「入るんだよ、綾子ちゃん」

半ば引き摺るようにして、玲は彼女を和輝のベッドのすぐ傍まで連れて行った。

…本当に…本当に…生きてるの？

どうしても、そんな恐ろしい考えが心の中に浮かんでしまう。

だが、すぐ隣で、玲は静かに否定した。

「大丈夫。和輝君は、死んだりしないよ」

その言葉に、疑問など入り込む余地は無い。

そこで初めて綾子は彼から手を放すと、和輝の眠るベッドに縋り付き、声も出さずに泣き出していた…

目の前の震える肩は、教室で見えるよりもずっと小さく見える。

玲は唇を噛むと、思わずその肩に手を置いて強く握り締めていた。玲自身、和輝の変容ぶりを見て、かなりの衝撃を受けていたのだ。これ程まで和輝を苦しめた元凶を、玲は決して許すつもりはなかった。

例え、相手がどんな存在であろうと…

綾子の震えを指先に感じながら、彼は意識を広げ、邪気を探る。

だが…今は、何も感じられない。

その時、不意に綾子が顔を上げた。涙に濡れた瞳が、真っ直ぐ玲を見つめてくる。

「ねえ、玲君！ 何とか、ならないの…？」

腕に縋りながら、訴えてくる…だが、すぐに綾子は手を放すと、そのまま顔を覆ってしまった。

「ごめんね…玲君に言っても、困っちゃうよね…あたしが、何も出来ないから…」

…ごめんね…」

そうなのだ。玲にだって、何が出来るといふのだろう。

当然ながら、綾子はそう思っていた。

だが、その言葉は玲の中に凄まじい程の葛藤を生み出していた。

まだ…綾子や龍真の前では『力』を見せたことがない。見せるつもりも無い。

だが…

綾子は、ただただ泣き続けている。

その打ちのめされた姿を黙って見ていることなど、玲にはとても出来ないことだった。

「綾子ちゃん…」

「え…？」

呼ばれて顔を上げた綾子の瞳を覆うように、そっと玲は右手を翳した。

一瞬、黄金色の光が掌に走る。

次には、綾子は床に頼れていた。涙に濡れた瞳は閉じられ、心配も不安も恐怖も忍び込まない深い眠りの中へと身を屈めてしまう…

「ごめんね、綾子ちゃん」

間も無く、和輝の母親も覗きに来るだろう。

玲はすぐに両手を和輝の胸元に揃えると、自分の中に滑り込んでいった。

友達に『力』を使ったことで動揺している心を、別の心が鎮めていく。静かな意識が胸中を支配すると共に純白に染め上げ、やがてその面を黄金色に煌く漣が覆っていく。

その波の広がりに呼応するかのように、玲の掌からは光が溢れ、その『力』の奔流は和輝の身体の中へと飛び込んでいった。

残念ながら、この『力』の効果も一時的なものでしかない。まだ十分に回復していない玲自身の『力』を僅かに与え、和輝の身体の活性を狙っているだけなのだ。

今は、これが精一杯だった。だが、それでも十分なはずだ。

玲は、今夜にでも、全てをはっきりとさせるつもりだったのだから

ら。

和輝の寝顔が、随分と穏やかになっている…

それを確かめると、玲は今度は掌を綾子の額に持っていた。黄金色の閃光と共に、彼女の意識が浮かび上がってくる。

「あ…」

ゆつくりと、唇が開く。

「…あれ？」

不意に瞳が見開き、慌てて辺りを見回している。

その先には、少し心配そうに見守っている玲のいつもの顔が見えていた。

同時に、視界には和輝の寝顔が…

「……！」

その寝顔の変化に気付き、再び、綾子は黙って尋ねるように玲を見上げる。

だが、彼が僅かに迷いながら口を開く前に、心配になった和輝の母親が顔を覗かせ声を掛けてきた。

「玲君…」

その言葉は、しかし途中で途切れてしまった。ベッドの様子を見て、すぐに何も言わずに医者を呼び戻しに向かう。

「僕達も、もう帰ろうよ」

優しくそつと玲が囁くと、綾子は小さく頷いて立ち上がった。部屋を出る前に、もう一度、和輝の顔を振り返る。変わらず、穏やかな寝顔を見せる彼に、少しだけ安心した微笑みを浮かべ綾子は玲の後に付いて出ていった。

その帰り道。

玲と別れる時になって、綾子は久し振りに明るい笑みを頬に浮かべると言った。

「今日は、ありがとう。」

やっぱり、玲君って凄いわ。きっと、あたしが知ってる以上のことが、玲君には出来ると思うの。

でも、それは聞かないわ。

だって、玲君は玲君だもんね」

「僕は、確かに僕だよ。いつも通りのね！」

笑いながらそう言っていると、玲は先に背を向けて歩き始めた。その後ろから、元気になった綾子の声が追いかけてくる。

「ありがとう！」

玲は一度だけ振り返ると、にっこりと笑って再び歩き去っていった。

…玲君は、やっぱり、玲君なのよ。

本当に…ありがとう。

この胸の眩きすら、玲には伝わっている気がする。

夏の日差しが、頭上から圧力を伴って押し寄せてくる。その波にも負けず、今、綾子はしっかりと自分の足で立っていた。

素敵な友達に囲まれた自分を、とても誇りに思いながら…

.....

月の失せた闇天井に、白鳥と鷺がその巨大な翼を広げて白銀の川面を滑っている。微光が散るその豊かな流れの下流では、蠍がその上体を反らし、舞い降りようとする二羽に鋏を振り上げ威嚇していた。

地表を彷徨う緩やかな風が、辺りの沈黙を不快に乱しながら、その腕の中の白光に導かれ進み始める。

やがて、白い帯は和輝の部屋の外に流れ着くと、不意に、その様相の一つを現していた。

…狐だ。

だが、漂い浮かぶその大きさは雀や鼠程度のものだ。短く全身を

包む体毛は、美しいまでの白い輝きを放っている。…あまりにも、白いのだ。柔らかく風に靡いているのだが、堅く冷たく感じられる程に…それは、《死》を映す鏡だった。

赤く揺らめく双眸が、鋭く部屋の中を窺っている。

和輝の眠りを確かめると、その白狐は尾を大きく広げ、愉しげに振り翳した。その先が、二つに裂けている。

今にも部屋の中へと躍り込もうとした瞬間、冷たい…深い言葉の波が、この狐を捕えていた。

「そこまでだよ。やっと、現れてくれたね」

玲だ。その、決して少年のそれとは思えない声で、彼は静かに続けた。

「何処の狐使いが、和輝君を怨んでるんだい？
それとも…」

狐から漂い出る邪気の中に、ある動きを認めて玲は言葉を止めた。その瞳が細められる。

突如、狐は身を翻し、逃げ出そうとした。

流れるような動きで玲はカードを抜き出すと、素早く投げつける。鈍色の軌跡が今にも白狐の体を切り裂こうとした寸前、不意に闇から少女の悲鳴が広がった。

「止めて！」

途端に、狐の姿は消え失せてしまう。

カードはそのまま空を滑ると、再び玲の手元まで戻ってきていた。
「……」

玲はその瞳に悲しみを映すと、カードから『力』を解放し、黙ったままケースに仕舞う。

黄金色に揺れる衣を身に纏うと、彼はすぐにその場から消えてしまった…

「井村さん…」

…微かな呟きが、闇夜に散る……

那瑠美はベッドの上で身を起こすと、目の前に浮かんでいた白い狐を抱き締めた。

…ううん、これは夢よ。だって、ピッピは私が創り出した『友達』なんだから…

周りを囲む家具類は、青く漂う薄闇に包まれているものの、普段使っているものとまるで同じに見える。だが、何より、ピッピがいるではないか…これ以上に、夢であることを示す存在は無いだろう。「ピッピ…大丈夫だった？」

おかしいものだ。

…どうして、川瀬君は、夢の中の夢の中で、ピッピを傷付けようとしたのかしら…

確かに、自分の日記帳の中で、玲はピッピに苦しめられている。だが、勿論、それは『物語』の中でのことだ。夢の中だから、『物語』が本当であるかのような夢を見たのだろうか…

なら、この玲の復讐も、那瑠美自身が考え出したのだろうか。ピッピが傷付くようなことを…

那瑠美はベッドの中で、思わず震えてしまった。

「…でも、もう大丈夫よ。もう、夢から覚めたからね」

そう言えば…川瀬君は、夢の中でピッピに変なカードを投げたわ。でも、学校にいる時の川瀬君は、そんなものを持っていないはず…夢の中の夢の中だったから、何かを作り出せたのかしら…

なら…夢の中の私にも、何かを作り出せる…？

那瑠美は心の中に願う存在を作り出そうとして…だが、その願いに夢は応えてはくれなかった。

小さく、溜息が零れ落ちる。

その時、腕の中で赤い瞳が不意に輝きを強め、虚空を振り仰ぐ。那瑠美もつられて視線を上げると、そこには黄金色の揺らめく光を身に纏った玲の姿が浮かび上がっていた。

「川瀬君…？」

部屋の中で…空中に浮かんで…？

……変な夢。夢の中の夢の中だけのことだったのに……

「井村さん…。君が、その狐の…」

夢是那瑠美が願う存在を作り出してくれずに、何故、玲を作り出したのだろう。

悲しみに染まるその漆黒の瞳に向かって、那瑠美は少し語気を強めて答えていた。

「狐だなんて！ この子は、ピッピって言うのよ」

今は、夢の中。あからさまに敵意を剥き出しにしても、現実の玲には関係が無いはずだ。

学校とは違い、今の那瑠美は生気を感じてしまう程に『生きていた。』

「…井村さん。…どうして、ピッピを飼ってるの？」

これは、おかしい質問だ。何故なら、夢を見ている那瑠美自身が、その答えを知っているのだから。

…でも、夢ってそんなものね。

「ピッピは飼われてなんていないわ。私の日記の中に、いつもいてくれるの。いつも、その『物語』の中では、ピッピが主人公なのよ」
「…そのピッピなんだけど、…井村さん。僕や和輝君に悪さをするように書いてるよね？」

どうして、悲しそうなのかしら…

深い悲しみが、呟きと共に流れ出している。

「そうね…だって、日記の中だもの。」

ピッピは、いつも私が良い成績を取れるように、とても頑張ってくれるの。『物語』の中で、川瀬君に憑いて気を狂わせたり、和輝君を殺してしまったり…でも、勿論、現実にはそんなことを願ったりしないわ」

那瑠美は、自分が言い訳をしていることにも気付かず、宙に浮かぶ玲に向かってそう言った。

目の前の玲は、その静かな口調に幾分かの優しさを込めて尋ねてくる。

「…どうして、井村さんはそんなことをピッピにさせるの？」

変な夢…

「だって…邪魔なんだもの。」

ママは、いつも私がクラスで一番だと思っているの。でも…一番になり続けることって、とっても辛いことなのよ…分かる？

だから、せめて、『物語』の中だけでも、私の邪魔になりそうな人を苦しめたかったのよ」

そんなこと、私自身は分かっているのに…

「…だから、今迄にも雄次君や恵子ちゃんを、同じように苦しめてきたんだね」

「ええ…」

ピッピを抱き寄せながら、その柔らかい毛並みに那瑠美は頬を摺り寄せていた。

黙り込んでしまった那瑠美を、心配そうに赤い瞳が見詰めている…

「…どうして、そんなに一番になりたいの？」

声が移動している。視線を上げると、玲はすぐ横に立っていた。もう、空中にも浮かんでいない。

その彼をゆるやかに包み込む黄金色の煌きは、まるで那瑠美の言葉を誘い出すかのようにちろちろと時折瞬いている…

「…どうして、って…だって、ママがそう願っているもの」

…私、どうして、こんなこと……

「…ママね、パパと別れてから、とても一生懸命、働いてくれたの…全部、それは私の為…」

…そのママが、いつも私は一番でいて欲しい、って思っているのよ？ だから、私はそれに応えなくてはいけないでしょう…？」

どうして…私は、尋ねているの…？ 確かめているの…？

「…そうだね」

玲が一瞬、ピッピに視線を向ける。頬の下で、刹那、純白の毛並みに緊張が走る。

だが、彼はすぐに瞳を那瑠美のそれに戻していた。

「でも、それだけの為に…『物語』で邪魔になる人達を苦しめる為だけに…井村さんは、このピッピを呼び出したの？」

呼び出す…？

さっきまでの声とは違う。何だか、急に酷く冷たくなった気がする。とても、普段の玲からは考えられないくらいに、静かで重く、近寄り難い程に冷徹な言葉…

まるで、その内には、何か深く力強い流れが秘められているように…

その流れから身を守るように、那瑠美は身を縮めていた。

「…本当に、変な夢……」

そう呟きながらも…那瑠美は玲の問いには答えなかった。

何も答えてはこない那瑠美から視線を逸らさず、玲は更に言葉を紡いだ。

「…井村さん。」

井村さんは、ピッピに…『甘え』たかったんだよね」

那瑠美はその言葉に逆らおうと口を開きかけていた。

だが…玲は、それを許さなかった。

「井村さんは、おばさんが帰ってくるまで、たった一人で夕御飯を作って、独りでそれを食べて…独りでテレビを見たり、独りで本を読んだり…そして、『日記』を書かないといけなかったんだ。

勿論、勉強もしてるんだけどね。でもね、井村さん。それは、おばさんの為の勉強であって、井村さん自身の為じゃなかったんだ…何もかも一人でして、何もかも自分一人で決めないといけない…でも、やっぱり、他の人と分け合わなくちゃいけないものもあるんだよ。

それを、井村さんは『日記』に書いてたんだ。

でも…ただ書くだけじゃ、物足りなかったんだ。誰も、そこからは応えてくれなかったから…『日記』の中には、『自分』しか出てこないからね。そこに出てくる『他人』は、せいぜい現実を真似るだけ…それは、言ってみれば記憶でしかなかったんだよ。

だから、井村さんは『日記』そのものを…その現実中存在するものや行為を、『物語』にしてみました。まるで、その『物語』こそが現実であつたかのように…ね。『物語』だからこそ、普段、学校で会っている『他人』が様々なことを話したり、動いたりしてくれる。それに、勿論、現実には出来ないことを…『日記』には出てこないようなことも、『物語』でなら簡単に出来てしまうんだ。『物語』で動き始めた人達になら、色々なことを分かち合えるかも知れない…

でも、駄目だったんだ。井村さんが書いた『物語』の登場人物は、現実中存在する人ばかりだったからね。だから、どうしても現実による制限が出てくる…あの人は、絶対にこんなことはしないだろう。つて。例え『物語』の中でも、出来ないことはあるんだ。だから、結局、誰も井村さんのものにはならなかった…その登場人物には、『甘え』ることが出来無かつたんだ。

おばさんとおなじように…ね。

だから、井村さんは『本当』に自分一人だけのものを…そんな存在を欲しくなつたんだ。今迄、きつと、こんなに欲しいと思つたものはなかつたんだろうね。今迄は、井村さんはおばさんの為だけに一生懸命になつて生きてきたから、自分が欲しいと思つてたことも、辿れば全ておばさんが欲しがつていたものだったんだ。

『本当』に、自分だけの存在が欲しい……

…だから、井村さんはピッピを『創り出した』んだよ。

ピッピは、『日記』という『物語』の中で、『本当』に生きてるように活躍するんだ。それは、ぬいぐるみとは違つて、自分で動いてくれるし、話してくれる…そう、書いてる井村さんが思つてもいなかったことまで、勝手に『物語』の中で始めてしまうんだ。

それは、井村さんが『甘え』られるような、…『生きた存在』だったんだよ。

…おばさんの為に勉強することが、喜びだったのか、苦痛だったのか…『本当』には僕には分からない。でも、そんなことよりも、

…仕事もやめて、もつと自分の傍にいて欲しい…出来ないことは分かっているけど…でも、もつと『甘え』させて欲しい…こんなことを話したい、あのことも聞いて欲しい…そして、きちんと心から応えて欲しい…そう思ってたんだ。

でも、それは決して『現実』にはならないと思ってた。だから、その望みの先を、全てピツピに替えてしまったんだ」

玲は、静かに…小さな声で話し続けている。

那瑠美からの反応は無い。聞いていないのかも知れない…

だが、それでも、心の襞に入り込まなくてはいけないのだ。乱暴でも、無思慮でも構わない。

…玲には、それが分かっていた。

「…井村さん。でもね…このピツピは…『物語』じゃないんだよ。それは、現実に、井村さんの意志で『呼び出された』んだ。

ピツピはね、その憑いた人の望む通りに動いてくれる。井村さんが誰かに恨みを覚えれば、必ずピツピはその相手のところまで行って、苦しめるんだ。

『日記』という『物語』には、井村さんの心が一番正直に書かれている…そして、ピツピはその中に登場してるんだ。これくらい、憑いている人の望みが分かりやすい環境も無いだろうね。井村さんが望んでることは、その『物語』の内容そのものなんだから。

邪魔になる人をピツピに苦しめさせて…最後には、殺してしまう。

井村さんは、それが『物語』だと思ってたし、実際にはそこまで酷いことは書けないと思ってただろうけど…でも、ピツピは動くんだ。それが、願いだから。そして…それは、紙に書かれ、紛れも無い『現実』になってしまったんだよ…」

「そんなこと…」

掠れた声が、微かに…本当に微かに流れ出す。

「そう、そんなことがあるんだよ。

それに…僕がここにいても、夢なんかじゃないんだ」

「そんな…！」

眩きと共に驚きで身を硬くする那瑠美に、玲は素直に悲しみを映して頷いていた。

「ピッピは、井村さんが『甘え』たくて呼び出した《現実》なんだ。日記の中の『物語』も《現実》だし、僕がここにいることも《現実》なんだ。」

そして……」

流石の玲も、一度、言葉を止めてしまった。

分かっているのだ…分かって……

「…そして、もう、井村さんが死んでいることも、《現実》なんだ」
「……！」

刹那、完全な沈黙が横たわる。

それは、あまりにも深く、重く…恐怖や絶望すら弾いてしまう程に何ものでも無いもの……

あまりにも虚ろな《無》だった。

玲は沈んだ声で続けた。

「井村さんは、狐使いじゃないからね…」

ピッピは、その憑いた人に良いこともするんだけど、同時に悪いこともするんだ。

知識のある狐使いなら、依代を身代わりにしたりして、悪いことを防いだりするんだけど…でも、井村さんはそんなこと、知らないからね。

ピッピはね…僕達を苦しめる代償に、井村さんの生気を吸い尽くしてしまったんだよ…

ただね、ピッピにしてみれば、井村さんは次々と襲う相手を教えてくれる…そうだね、餌をくれる飼育係みたいな人だったから…

だから、ピッピの方から、少しだけ、生気を戻して…井村さんを、生かしておいたんだ…」

少しずつ…少しずつ、流れ出していく……

…最早、骸に納めておくことが出来無いのだ…

「…井村さん。」

「ごめんね……もう、…僕にも出来無いんだ…」

井村さん…例え『物語』のことだと思ってもね、やっぱり、誰かを怨んだり、呪ったりしたら駄目なんだよ。人を怨んだりしたら、その《業》が跳ね返ってくるのは当たり前なんだ。

だから、狐使いを始め、何かの『術』を行う人は、皆、呪いを禁忌にしてるんだよ…」

遣る瀬無さが募る……

…その時、半ば以上、生気を失った欠片が顔を上げた。

綻るような目付きに…残った心で描くその瞳の色に…だが、玲は真っ直ぐに向き合い、黙って頷き返していた。

力を失った首が、下を向く。

だが次には、その顔を再び擡げ、微笑みのような痙攣が彼に向けられた。

「…そうなのね。」

もう…私は、死んでいるのね……」

声帯を震わせるのは、今やほんの微かな風でしかない。隙間から漏れる風音の中から、かつての言葉が僅かに聞き取れる…

「ごめんなさい…『物語』だと…思っていたから…」

…でも…許してくれないわよね……」

細く切れてしまいそうな言葉の糸を、玲は指先に絡め、引き寄せた。

「ううん。僕は、許してあげるよ」

玲の頬に、笑みが浮かぶ。

それは、声を理解することも難くなったものにとって、何よりも分かりやすい言葉だった。

「ありがとう……」

中の空気が大量に溢れ出し、溜息のような音を闇に広げる。

「…さようなら、井村さん」

これ以上は、身を起しておくことも無理だろう…

玲は、纏っていた黄金色の光を僅かに強めた。

その目映い光の波は那瑠美とピッピを優しくそつと包み込み……
…ゆつくりと漣が引いた後には、最早何ものも残ってはいなかった。

いや…少女の肉体だけは、ベッドへと静かに倒れこんでいく…
玲は何も言わずに、その骸に布団を被せていた。

涙が、頬を伝い落ちていく……

…その煌きの幾つかが枕元に届く頃、玲は宙に溶け込むように、
その姿を消していた……

翌日、井村那瑠美の訃報が、学校に伝えられた。

.....

その日の午後、玲は一人、校舎の屋上に出ていた。

初夏の日差しに、その身を預ける……

涼風は、彼を励ますように、そつと触れては通り過ぎていく。だが、それでも、玲は溢れる涙を止めることは出来なかった。

…どうして、…どうして、僕の『力』で、助けられなかったんだろっ……

どうして…僕は、死んでいく友達を生き返らせることが出来無いのかな……

勿論、不可能なことだとは分かっている。

だが、思わずにいられないのだ。

目の前で…一人の命が消えたのだから……

階段室の前で、膝を抱えて座り込む。唇を強く噛み締め……

「玲。一人の人間の死も、大きな目から見れば、必要なことがある。その死の基準は、神々にも、運命の女神達にも決められない。それよりも更に大きな…《唯一の本質》（ヘルジュトリア）だけが、

『夢』に見ることが出来るんだよ…」

辺りの喧騒が、不意に遙か遠くへと消え去ってしまふ。

全てを内に抱き寄せ、大きな優しさと静けさで包み込んでくれる、
理知的な声……

だが、その声は、玲の小さな体を無意識に震わせていた。

…声の源へと、目だけが向けられる。

そこには、二十歳前後にしか見えない一人の若者が佇んでいた。
真っ直ぐに見詰めてくる、その若者の漆黒の瞳には、深い沈黙と
厳しさが温もりを伴ってたゆたっている。

だが…その更に奥では、『時間』のみが持つ黄金色の流れが隠顕
していた。

一瞥をくれただけで、玲はその若者が持つ『力』に圧倒されていた。

こんなにも巨きな『力』が本当に存在するのだろうか…その果て
を感じさせないほどの、茫洋たる《静》の空……玲に感じられるの
は、そのごく一部でしかない。玲が持つ『力』とは、まるで位階が
異なるのだ。

あまりにも強く…いや、底知れない静けさの向こうには、その強
さすら感じ取れない、穏やかな『力』が秘められているはず…

「あなたは…？」

畏怖の念に押し潰されそうになりながら…玲は、震える声で、や
っとそれだけを呟いていた。

「志水だよ」

若者の顔に、優しい笑顔が浮かぶ。その瞬間、今迄感じていた《
無限》が霧散し、漸く玲も身震いを止めると救われたように微笑ん
でいた。

「…志水、さん？」

その…志水さんでも、井村さんは助けられなかったの…？」

志水は、ただ黙って頷いている。

それを見て、玲は力無く俯くと呟いた。

「じゃあ…仕方が無かったんだね…本当に…」

命に、仕方が無いものがあるのかどうか…まだ幼い心には理解し切れていない。

だが…この『力』でも無理なのなら……

不意に、小さな肩に手が触れる。

志水は、その小さな…本当に小さな肩をそつと抱き寄せていた。

「誰が必要で、誰が必要で無いのか…」

そもそも、必要な命や、必要ではない命があるのか…

そんなことは、人間には決められないんだ。

勿論、俺にも決めることは出来無い。

だから、玲。今はまだ、自分で決められないことに悩むくらいなら、寧ろ自分の『力』を思うがままに使えばいい。学ぶべきことは、これから、まだ幾らでもある。

その『力』がどんな結果を生むことになったとしても、それが『時間』の流れを見晴るかす存在の意に従っているのであれば、それは『正しい』ままでいられるだろう。それは、今、玲が思う『正義』とは違う形になるかも知れない…だが、それもまた『正しい』形なんだ。

玲。自分の『力』を卑下する必要は無いんだ。これからも、その『力』で、出来ることを精一杯していけばいい。

それは、何かを消失させるだけでなく、誰かを守るものにもなる。

勿論…曖も、な……」

志水には、何が起るか分かっていて。そう…分かっていてのだ

……

…分かっていて…分かっていてのだが……

……そう言わずにいられたのだ…

玲は暫くの間、何も言わずに俯いていた。

だが、やがて、一言ずつ、押し出すように呟き始める。

「…そうだね。」

井村さんを助けることは出来無かったけど…他にも、僕が出来る

ことはあるんだもんね。

みんなを、少しでも、助けてあげられる『力』があるのに…それを否定して、助けようとしなかったら……

きつと…僕自身が僕を許せないようなことだって、あるかも知れないね…」

小さく、溜息を吐く。

ゆっくりと腰を上げると、玲は頬の涙を拭い、微かな笑みを浮かべた。

「ありがとう、志水さん」

それ以上は、志水も何も言わなかった。水は…『時間』は再び流れ始めたのだ。

その行く末は、彼の意志ではない。

志水は励ますように笑顔で頷くと、次にはその場から消えてしまっていた。

胸中に、温かな黄金色のうねりが広がっていく。志水が残してくれたその『力』を感じながら、玲はもう一度呟いていた。

「ありがとう…」

志水と言う若者が、一体何者なのか…そんな疑問は不要に思える。そのように問い掛けることが出来無いほど、彼の『力』は自分を超越しているのだ…

玲にとつて、『志水』は『志水』であり、それ以外のものではない。それは、理解を超えた超自然的な存在を神と呼び、その存在を逆に何かと問い掛けるようなものだ。

玲は、自分の中の『力』の躍動に心を傾け、新たな想いと親しみを覚えながら、『言葉』にしていた。

「…僕は、きつと、強くなるよ。」

大切な人を守るように…『大好き』な曖ちゃんを守るように…

降り注ぐ陽光の下、軽く目を閉じる…

「玲！ 何処だ？」

不意に、階下から龍真の声が響き渡る。

「屋上だよ！」

我に返ると、玲は元気に叫び返ししながら、急いで階段を下りていった。

階段室の暗闇の中へと玲の姿が見えなくなると共に、屋上では静かな声が広がっていた。

「……一粒の種が、再び大いなる『時間』の中へと投げ込まれてしまった……」

銀の煌きを呈しているとは言え……『唯一の本質』も厳しいものだ……」

天空を背に、志水は僅かな哀れみを含め、呟いていた。

見ていること……ただ、それだけしか出来無いものもある……

これが『運命』なのだが……

志水自身も、また、その『本質』から生じた『様相』達によって選ばれたのだ。その流れを目指すことは出来ても、流れを清め、整えることは出来無い。それは、彼の為のものではなく、別の存在の為の意義であり、理由だ。

彼自身も、玲と同じなのだ。

何故、自分には助けたい存在を助けられないのか……

流れの過程における援助は出来ても、その結末までは変えられない……

ならば、結末など、分からない方がいい……

だが、志水はもう一つのことも知っているのだ。

恐らくは、この宇宙や世界の創始者たるヘルジュトリアとて、同じ思いを抱くのであろう……と。

それが正しい答えかどうかは、決してどんな『様相』にも分からないのだが……

それでも、知っているのだ。知ることと分かることは違う。

……若者の黒髪を、風の乙女が愛撫して通り過ぎていく。

優しいその腕に抱かれながら……彼の姿は青い大気の中へと掻き消

されていった…

後には、いつもと変わらない日差しが、地上を遍く照らし出している。

…一人の少女の死など、まるで創めから無かったかのように……

4 倫常 おわり

5 荒肆

九月も末になり、夕暮れ間近の清爽な大気の上では、涼風が輝く軌跡を描き出している。

足下に広がる藪の中からは、その風の腕に選んでもらおうと、虫達が競って美しい言葉を奏で上げていた。

その日、龍真はいつもと同じように幼なじみの綾子と橋の袂で別れていた。

石橋の下には澄んだ小川の流れに沿って白い川原が伸びており、そこからジュツジュツと軽やかな啼き声が龍真と共に彼女を見送ってくれる。姿は見えないが、恐らくその長く黒い尾を打ち振りながら、丸い石の上で忙しく歩き回っている小鳥だろう。

何度か振り返って手を振っていた綾子の姿も、やがて森の陰へと隠れてしまう。

そこまで見届けてから、龍真は石橋のすぐ先から緑葉の中へと消えていく、長い石段を駆け上り始めた。

一年中、緑を色濃く残す大木が、古い石段の左右に並ぶ。

揺れ動く光の泡に包まれながら、すっかり磨耗して縁が丸くなっている石段を登ると、やがて枝葉の先に、これも石造りの大きな鳥居が見えてくる。

荒削りのその鳥居の下を潜り、『力』の壁を難無く抜けると、そこは山中でありながらも大きく開けた境内になっていた。

ここは、宮木町の中でも、かなり南の端の方になる。香笹町との境を成している山並も、この宮木神社を中腹に抱いている辺りでは、随分と大きく聳えた山へと変容している。

この目の前の神社こそ、龍真の家になるのだ。

「ただいま！」

かつての勢いは無いものの、木々で隠された各所には、まだ幾つかの宮が点在している。

今もまた、巨木の陰から穏やかな詞が漂い出してくる…禰宜や祝も僅かとはいえ、居てくれるのだ。常に神事を執り行ってくれてい
る彼等は、皆、龍真の親しい友人だった。

龍真の父親は、ここで神主として長を務めている。

「お帰りなさい、龍真」

奥から聞こえてきた母親の声と共に、まだ幼い妹が喜ぶ声もする。龍真は僅かに足を早めると境内の奥にある家の中へと入り、台所に立つ母親を見つけて声を掛けていた。

「母さん。また翳月山から、あの遣いの子が来たんだね」

母親の傍で遊んでいた珠璃が、大好きな兄を見つけて急いで駆け寄ってくる。

幼稚園に通い始めたその愛らしい妹を両手でしっかりと受け止めると、龍真は優しく抱き上げてやった。

心からの喜びの声が、辺りの空気を満たしていく。珠璃の嬉しそうな笑い声に頬を緩めながら、母親は龍真に頷いていた。

「そうよ。」

あの眩耀寺の方々にとって、ここ宮木の森の木はとても大切なもの
のですからね」

そのことは、以前に龍真も教えられていた。

宮木神社の裏手に広がる常緑の森の木々には、邪な存在を萎縮させる力があると言う。その『力』を用いたものだろう、この宮木神社の中にも、幾つかの邪を封じたとされる木棺が残されていた。

もともと、龍真自身は、少なくとも神社の中の木棺については、その伝承を信じていなかった。幼い頃から、その木棺が並ぶ蔵の中で、平気で遊んでいたのだ。もともと、棺の蓋はしっかりと固定されてお
り、とても子どもの力では開けることなど不可能であったが…

ただ、その木の力の為に、随分と遠い翳月山から定期的に使者が来ていることは事実だった。

怪しい言い伝えにしか思えないのだが…龍真は、少しだけ、その事実を馬鹿げたことだと思っていた。

あまり表沙汰にされないとは言え、ある程度大きな派の総本山が、こんな古くて小さい神社と関わりを持つているなんて…

…龍真には、まだその事実から、真実を導き出すことは出来無かったのだ。

「でね、でね…やっぱり、お兄ちゃんくらいの男の子なの…」

兄の大きな手で頭を撫でてもらったことが嬉しく、琉璃はそう言いながら、お返しに龍真の首を力一杯抱き締めていた。

「…あの、聖^{せい}つて子が来たんだね。

じゃあ、あの子、今日も男の子の格好をしてたんだな」

「ええ、そうよ。翳月山の方々は、皆、男の方ばかりですからね。

私達には、分からないこともあるのでしょうか」

「ねえ、ねえ…遊ば…？」

小さく首を傾げて覗き込んでくる愛らしい琉璃の言葉に、龍真は破顔して言った。

「よし。じゃあ、琉璃も綾子や和輝達と一緒に遊びに行こうか」

「うん、うん！」

喜びのままに大きく頷くと、そこで再び琉璃は楽しそうに笑い声を上げていた。

ランドセルを部屋の中に投げ込み、そのまますぐに、龍真は可愛い妹と共に家を飛び出していく。

陽光が、完全に地平に沈んでしまうには、未だ少し時間がある。

…どんなに短くたって、精一杯遊ばないと損だもんな…

兄の優しい手に導かれながら、幼い琉璃は満足そうな笑顔を茜色に染め上げていた。

無垢な心の煌きは、白銀の乙女達の腕に依って周囲の存在に分け与えられていく…

それは、《真》に澄み切った…銀色の輝きを呈した光の波だった…

輝かしい日の光も、今や西方では大地の下へと隠れてしまい、そ

の残り火を追いかけるように、東の地平からは青白い闇が天へと登り始めている。

静寂と果ての無い不安が、辺りに顕現しようとしている……

今日は、龍真の幼い妹も一緒にいるのだ。まだ少し早いかも知れないが、解散しよう。

玲の提案に、勿論、皆は賛成した。

誰も、珠璃のことを悪く思ったりはしない。

そう、一体、誰が珠璃のような少女を悪く思ったりするだろうか。龍真についてきても、別に何するわけでもない。ただ、大好きな兄の傍に居る……それだけで幸せな笑みを浮かべているのだ。そんな珠璃を見ていることは、玲達にとっても楽しいことだった。

「じゃあね、珠璃ちゃん」

玲がそんな珠璃の嬉しそうな頬をつつくと、嬉しい笑い声が広がる。

その声を背に、綾子や和輝とも別れて、玲はすぐに家路についていた。

ただ一人になってしまうと、急に辺りの暗闇がずっと濃くなった気がする。

そんな、すっかりと暗くなってしまった路地を急いで駆け抜けている最中、不意に玲の胸を鋭い痛みが刺し貫いた。

「うわっ！」

その痛烈な痛みには耐えられず、思わず道端に座り込んでしまう。

苦しい息遣いの下、胸元を掴みながら玲は強く唇を噛み締め、遠く、行く手の山々を見上げていた。

香笹町をその向こう側に隠している山並は、残照を背にして漆黒に塗り潰されている。均質に塗り籠められた一枚の壁を見詰めながら、玲は漸く落ち着いてきた呼吸の下で、微かに苦笑を浮かべていた。

「そつだったね……すっかり忘れてたよ」

そう。今日は、昼と夜の長さが等しくなる、秋分の日だったのだ。

玲の脳裏に、魅惑的な香りを放つ笹の群生と、深い沈黙に浸る蒼い泉の様子が浮かび上がってくる。

(…あゝあ、やっぱり、破られたんだね…)

あの夢鏡ノ泉に施した封印が、たった今、何かに因って破られてしまったのだ。

急いで、『力』の網を広げてみるが…何も捕捉することが出来ない。

だが、間違い無く、封印は解かれたのだ。妖夢界からは、必ず、何かが…恐らくは新たな夢魔が、この世界へと入り込んでいるだろう。

「今度は、何が起こってしまうのかな…」

それを未然に防ぐことが出来ればいいのだが…

その上、今回は玲自身が施した封印を破られているのだ。一時的にかも知れないが…だが、それでも、その何かは玲の『力』を上回ることが出来たのだ。

そんな玲に、何かを防ぐことは出来るのだろうか…

「…どうにかなるかな」

出来るか出来ないかは、問題ではない。

出来ることを、精一杯するしかないのだ。

溜息を吐きながらも、玲はにっこりと笑みを浮かべながら立ち上がり、再び家に向かって歩き始めていた。

『力』の網は、広げ続けている。

何かが起こったら、きつと分かるからね…

…その時になってから、『何か』をすればいいんだ。

道の両脇に並ぶ街灯が、淡い光を大地に投げ掛けている。

その下を急いで駆け抜けている玲の背後で、次第に闇はその色合いを濃くしていき、青い静寂をその身に纏いながら次々と地面に舞い降りていた。

あの日が、近付いてくる。

曖は、徐々に近付いてきていたその日を前に、急いで贈り物の仕上げをしていた。

幸運にも水曜日になってくれたのだ。

そう…次の水曜日は、玲の誕生日。

大事な日なのに…

曖はカレンダーを見るたびに、いつも自分の至らなさに大きな溜息を吐いていた。

…どうして、『時間』さんって、こんなにも急ぐのかしら…

今の儘では、到底、大事な日までに完成しそうにない。

それが曖にもよく分かっていたので、近頃は学校へ行く前の僅かな時間さえ利用して、贈り物の膝掛けを仕上げようとしていた。

そう、贈り物は膝掛けなのだ。

…玲君…私の為に、お勉強を頑張ってくれてるんだもの…

何が一番いいのか…随分と迷ったあげく、これから寒くなる夜の為に、曖は温かな膝掛けに決めたのだ。

時間を気にしながら忙しく指先を動かしてはいても、その漆黒の瞳には喜びの光が煌いていた。

どんなに辛いことでも、どんなに苦しいことでも、それが玲の為になるのであれば…曖は、あらゆるものを喜びに変えてしまうことだろう。

静かに、『時間』は通り過ぎていく。

だが、曖が紡ぐ過ぎ去った流れの一つ一つは、銀糸へとその輝きを変え、互いに縋り合わされながら永久の敷布に太い流れを描き出していた……

水曜日、誕生日の当日になったのだが…仕上げの刺繍がまだ終わっていない。

これ程間際になっても何かを終えることが出来ないのは、曖には非常に珍しいことだった。

短い朝の時間を精一杯使って、何とか終わらせようと、曖は必死

になつて頑張つていた。

だが、無情にも時計の針は進んでいき…

…大変！ もう、学校に行かないと…

玲は、今夜十時に来てくれることになっている。

夕方には、ケーキも作らなくてはならないのだ。

残った時間で、全て終えることが出来るのだろうか…

…ううん、終わらせないといけないの…

玲は、疲れていても、曖の為にあんなにも素敵なプレゼントを用意してくれたのだ。

自分だつて、頑張らなくてはいけない…いや、頑張りたいのだ。胸の中で、決意が新たに強くなつていく。

曖は手を動かしながら、素早く頭の中で計算を始めていた。

…ケーキは、パパが帰るまでに作るから…

ぎりぎりになつて、どうやら仕上げられそうなことを確信すると、

曖は急いで膝掛けを机の中に隠してしまった。

そして、名残惜しそうにしながらも、用意していた荷物を手に、戸締りを確認してから学校に向かって走り出していた。

実は、走るまでもないのだ。曖は、どれだけ忙しいとしても、十分前に到着するように計算している。

間に合うことが分かっているのなら、走らないでゆっくりと行けばいいのだが…曖には、十分前よりも遅れて教室に入ることなど、全く考えられないことだった。

教室に入ると、普段と同じように、まだまだ来ていない者も多い。それでも、曖には特別早く学校に来たとは思えなかった。

…少し、遅れちゃった…

そう思っているくらいなのだ。

…どうして、私…もう少し、きちんと出来ないのかしら…

そんなことを思いながら、小さく溜息を吐き、席に座る。

持って来た荷物を机の中に仕舞い込んだ頃になつて、少しずつ、教室の中に友達が増えてくる。

皆からの挨拶に、相変わらず俯いて真っ赤になりながら応えていた暖は、ふと近くの席に美亜が座っていることに気付いて驚いてしまった。

彼女は、いつもこれ程早く学校には出てこない。

それに…

(…?)

いつもは、帽子なんて被ってこないのに…

暖は少しだけ、首を傾げていた。

他にも、何処かいつもと雰囲気が変わっているのだ。

美亜は、暖の目から見て随分と大人びた少女だった。つい三日前、彼女は中学生と付き合い始めたのだと言っていたが、確かに、制服を着ていない彼女は中学生と言っても疑われずに済むだろう。

そんな容姿や雰囲気からか、暖にとって彼女は少し話し難い少女だった。嫌いではないのだが…やはり、近寄り難いものがあるのだ。その美亜は、普段ならもっと堂々としているのだが…どうしたのか、今日は座り込んだまま席から離れようとせず、身動き一つしてない。

…いつもなら、美亜ちゃんの長い髪って、教室のあちこちで揺れているのに…

そう思った瞬間、いつも、あれだけ自慢していた黒髪が、今日は帽子の中に隠されている事に気付いて、暖はひどく驚いてしまった。若しかして…切ったのかしら…

だが、あれ程まで大事にしていたのだ。暖には、美亜が髪を切るなど、とても考えられなかった。

やはり、帽子の中に隠しているのだろうか。でも、何故？

教室の中に人が増えてくると、当然ながら同じことに気付く者が出てくる。

その中で、一人、朋也は真っ直ぐ美亜の傍に近寄ると、暖と同じ疑問を躊躇いもせず口に出していた。

「どうしたんだよ、その帽子は。髪でも切ったのか？」

「いいでしょう！」

激しい言葉にも朋也はまるで動じず、勿論、引き下がるつもりも無かった。

唇を歪めると、素早く帽子に手をかける。

抗う美亜から、彼は力任せに帽子を取り上げてしまった。

「……！」

彼女を庇おうと集まってきた少女達も、その瞬間、動きを止めてしまう。

帽子を取り上げた当の朋也でさえ、掠れた声で呟くだけだった。

「…どうしたんだよ、…それ」

美亜は、机に伏して激しく泣き出している。

…彼女の頭部からは、あの見事な黒髪が全て剃り落とされていた。地肌が見える頭部を両手で隠そうとしながら、美亜は大声で泣き続けている。

その周りで、暫くは誰も何も言えずにいた。

だが、朋也はいち早く気を取り直すと、からかうような調子で声を上げる。

「おいおい、何だよ、その格好は！」

「止めなさいよ！」

だが、その言葉はすぐに反発を招いてしまう。

周囲からの抗議の声に、場の雰囲気を変えようとしただけのつもりが、朋也も引けなくなってしまった。

更に大きな声で彼女のことを笑いにしようとした時、曖は我慢出来ずに美亜の傍まで走っていくと、涙に濡れた瞳で朋也を睨んでいた。

そして、次には、慟哭している美亜を小さな体で抱き締めながら、彼女自身も啜り泣きを始めてしまう…

「どうするのよ！ 曖ちゃんまで泣かしちゃったじゃない」

すぐに朋也は声を抑えると、不安げに曖を見守っていた。

もともと、彼もこんな美亜を本心からからかいたわけではない。

ただ、何となく、そう演じなければならぬような状況になったと……そう思っただけなのだ。

なのに、そんなことで曖に見放されてしまったのは……

それは、朋也にとつて、致命的なことだった。

彼女に嫌われてしまつては、もう、この教室では何も出来なくなつてしまう……

皆が黙り込んでしまつ中で、曖は机に伏しながら美亜と共に涙を流し続けていた。

曖は、美亜の心を思つて泣いていたのではない。美亜の悲しみそのものが、曖の悲しみだったのだ。

思うことでも、感じることもなく……曖は、美亜そのものとなつて泣いていた……

……やがて、沈黙を縫つて、スピーカーから音色が響く。

普段よりも大きく響いているように思える、その音色が鳴り止む頃、曖は頬に伝う滴を無理に押し止め、身を起こし……

そして、朋也のことも、赦してあげていた。

その日の昼休み、美亜は心配している皆に話してくれた。

前の日曜日、彼女が付き合い始めた中学生の男の子と並んで歩いているところを、同じ中学校の女の子が見ていたらしいのだ。

その女の子と、他の数人から昨日、美亜は呼び出され……

「たつた、それだけで……」

話を聞いている子ども達には、何故、その程度のこととてこんなにも酷いことをするのか、全く理解が出来無かった。

「ひよつとしたら……美亜を、ただ、苛めたかつただけじゃないの？」

話の後の沈黙の中で、ふと、一人の女の子が言葉を漏らす。

苛めること……それ自体が、目的で……

曖は、絶対に、そんなことは信じたくなかつた。

……まさか……まさか……

「じゃあ、別に、その人は美亜の彼を好きじゃなかつたつてこと？」

「そうよ。だからきつと、こんな酷いことをしたのよ。」

だって、片思いの子が自分とは違う女の子と歩いていたら、ここまですると思う？　こんなことが分かったら、嫌われるのはその人の方なんだよ？

きつと、誰でもいいから、苛めたかったのよ。彼のことは、ただの言い訳だったんじゃない？」

傍で聞いている曖は、その言葉に微かに身を震わせてしまった。

…そんなこと…あるのかしら…

例え、嫉妬が動機だったとしても、曖には信じられなかっただろう。

…いや、どんな理由であれ、曖は信じたくなかったのだ。誰かを苛めて楽しみたい…一人の女の子を、殴ったり、大切な髪の毛を切ったり…

こんなに、誰かを悲しませるなんて…

全ての授業が終わり、家に帰る途中においても、曖の心は　悲しみと恐怖で塞いでしまっていた。

…折角、玲君が来てくれるのに…今日は、とっても楽しいはずだったのに…

どうも、曖には玲を笑顔で迎える自信が無くなっていた。

もう暫くすれば、陽も落ちる。

日毎に、夕焼け色に染まり流れる風は涼しさを増しており、木々の衣もその白銀の乙女達の手に急かされるように、次第に華やかなものへと変わっていくのだろう。

その先に待つものを感じながら…何処かに悲しみを潜める、多彩で優美な衣へと…

ベランダのガラス戸が、そつと叩かれている。

玲が来てくれたのだ。

その微かな音に、曖は大きく深呼吸をすると、笑顔をその頬に映そうとした。

…絶対に、玲君に氣遣わせたらいけないの…今日は、玲君の誕生日なんだもの…

小さく白い指先で、静かに戸を引いていく。

広がっていく隙間から、曖がにこりと笑って玲に「おめでとつ…」
と言いつけた時…

「…！ 曖ちゃん、どうかしたの？」

花束を抱えていた玲は、笑顔を急に引き締めると心配そうに曖の顔を覗き込んできた。

思わず、正直に俯いてしまう。

…不思議…やっぱり、玲君には分かっちゃうの…

玲は急いで部屋の中に入ると、ガラス戸を閉め、その場に座り込んでしまった曖の隣に膝を折っていた。

「…学校で、何かあったの？ それとも…僕のことかな…」

その言葉に驚いて、曖は急いで顔を上げると大きく首を横に振っていた。

…玲君のせいだなんて…！

絶対に、そんなことはないのだ。

曖の必死の仕草に、玲は一瞬、安堵の表情を浮かべた。
だが、すぐに真剣な光を瞳に宿すと、彼は囁いていた。

「…話して、くれる？」

「…うん」

話すつもりはなかったのだが…結局、曖は美亜のことを全て話してしまっていた。

目の前の小さな白いテーブルの上には、可愛いケーキが置かれている。

窓の傍の机の上には、きちんと仕上げられた膝掛けも隠されている。

だが、玲にはそれらが殆ど見えていなかった。彼にとって大切なのは、自分の誕生日よりも、曖の悲しみと恐れの方なのだ。

曖は微かな囁き声で語り続けていたが、いつしかその白皙な頬に

は柔らかな真珠の光が流れ落ちていた。

自分の豊かで見事な髪の毛を切られてしまふ…その悲しみを、曖はその場で語りながら体験していたのだ。

玲は黙って、そんな曖の顔を時折覗き込んで、そつと頬の煌きを指先で拭ってあげていた。

「私…信じられないの。…若し、ただ…苦しめるためだけに…あんなことをしたのなら…」

そう呟く曖の言葉を、玲は否定することが出来なかった…

声にならないその応えを聞いて、曖は僅かな間を置いて更に話続けた。

「…人間って、…酷い…何日か前にだって、…その山の中で…あの…」

怖くて、その先はどうしても口に出来ない。別の事件とは言え、曖自身、同じような遺留品を目にしてしまったことがあるのだから…

玲には、曖が何を言っているのか分かっていった。

強く唇を噛みながら、目の前の曖の肩を力一杯抱き締める。

こんなにも小さな曖を、あれほどまで悲しませた緋夕羅の事件と同じような出来事が、再び起こったのだ。

つい先日、ここからそれ程遠くない山中で、女性の死体がバラバラにされて放棄されていたのだ。切断された胴や腕…その事件を曖が知った時、どんな風に感じたことだろう。

…折角、忘れかけてたのに…

この事件を聞いた時、玲も一番に緋夕羅のことを思い出していたのだ。夢鏡ノ泉の封印が破られた直後だったので、今度も同じような夢魔が出てきたのかと思ったのだが…

その仮説は、玲自身によってすぐに否定されてしまった。

死体をバラバラにして…例えば人を喰らわない夢魔だったとしても、わざわざ山中に魔物が棄てに行くだろうか。

玲は悲しみながらも、これが人間によるものだと確信していた。どうしたらいいのか分からず、ただ、玲は泣き続ける曖を抱き締

めていた。曖の悲しみが深まってくのが、玲にもよく分かるのだ。その悲しみを和らげることが出来ずにいる自分の至らなさに、玲はひどく打ちのめされていた。

「私、…ね。…もう、『人間』が嫌になる、の……生きていたくない……」

曖の呟きに、玲はすぐに応えていた。

「駄目だよ、曖ちゃん。…確かに、そんな酷いことをする人もいるけど…それを『酷い』と思っている曖ちゃんだって、やっぱり、『人間』なんだよ…？」

「曖ちゃん…僕だって、人間が嫌いになることはあるんだ…利己的だし、我儘だし、…同じ人間を『物』としてしか見ないから…犯人はあんな風にバラバラに出来るんだよ…」

そんな『人間』に、絶望したって、当然だと思う…」

「……」

「…でも…でもね？ 曖ちゃん…僕は、だからって、絶対に死にたなんて思わないよ。…だって、きっと、そんなことになったら、曖ちゃんが悲しむからね…僕は、絶対に、曖ちゃんを悲しませたくないからね…」

曖ちゃん…もう、…生きていたくないなんて、言わないで…僕を、悲しませないでね……」

「玲君…！」

思いもしなかった言葉に、曖は顔を上げると、正面から玲を見つめていた。

「…そうだったのだ。」

どれだけ、自分の言葉は、玲を苦しめたことだろう…

「ごめんなさい…ごめんなさい…」

曖は玲の胸にしがみつくと、そう呟きながら再び泣き出していた。

「…なんて…私…酷い子なんだろう……」

曖がそう思った瞬間、優しい声が聞こえてきた。

「…駄目だよ、曖ちゃん。自分を責めたりしないで…」

…僕の為にも…

玲の心の呟きは、だが、しっかりと曖には聞こえていた。

…そう、これ以上玲を悲しませてはいけないのだ…

曖は最後に強く玲を抱き締めると、顔を上げて微笑んでみせた。

「ごめんなさい…玲君。」

…ありがとう」

「曖ちゃん…酷い、と思える心は大切だと思うよ。でも、そこで逃げたら駄目なんだ…きつとね」

「…うん」

玲君がいれば…そう、玲君がいれば…

ずっと、…このまま、ずっと…

目の前の玲の笑顔は、曖の心からの願いに約束を与えてくれた。た。

そんな玲にもう一度にこりと笑いかけると、曖は急いで涙を拭き取ってしまった。

そして、か細い指先で彼の手を導くと、ケーキの前にきちんと座らせる。

「お誕生日、おめでとう…」

「ありがとう！」

ケーキの上の蝋燭に、微かなオレンジ色の火が燈される。

その揺れる炎を越えて顔を見合わせると、二人はこれ以上無いくらいに幸せな笑みを零していた。

…さっきまでのことが…全部、嘘みたい…

こんなにも温かな黄金色の気持ちを、いつまでも胸中に感じられるのは…そう、曖が生きているからこそなのだ。

曖は、先程の言葉を少し恥じ入っていた。

…こんなに素敵な想いを…私…捨てようとしてたの…

玲は、豪快に蝋燭の火を吹き消している。その大袈裟な仕草に微笑むと、次には自然と楽しげな笑い声が溢れ出してきた。

もう、大丈夫だね…

自分も一緒になって笑い出しながら、玲は優しく曖を見詰めていた。

全てを忘れることがいいのかどうか…玲には、よく分からなかった。

…でも、忘れてしまふから、生きていけることだってあるんだよね…

喜ぶ玲の視線に気付き、曖が顔を赤らめている。

その様子に、玲は自分の考え方が間違っているとはとても思えなかった。

「今日は、本当にありがとう」

玲が立ち上がってそう言くと、曖はくすくすと笑い始めた。

「…？」

不思議そうな面持ちで首を傾げる彼に、曖は少しだけ悪戯っぽい口調で尋ねていた。

「玲君…忘れ物、してない…？」

「え？」

今日は、曖の為に摘んできた野の花の花束以外に、何も持ってきていないはずだ…

ガラス戸に手をかけながら、玲は真剣に考え込んでしまった。

「うーん、何か忘れてるかな？」

その様子に、曖は更に笑い声を大きくすると、そのまま玲の腕を取って机まで連れて行った。

「はい！…おめでとう」

清楚な白いリボンが結ばれた、膝掛けを受け取りながら、玲も大きく笑い出して言った。

「そうだったね！すっかりプレゼントを貰うのを忘れてたよ。ありがとう！」

縁や隅には、綺麗な刺繍まで施されている。その仕上がりの素晴らしいさに目を瞠りながら、玲は驚きを隠しもせず、恥ずかしがって

いる曖に感嘆の言葉をかけていた。

「曖ちゃん、僕、本当に思うんだ。曖ちゃんって、本当に素敵だな、って…僕なんかより、ずっとずっと、凄いなだもんね」

「そんな…」

俯いたまま、曖は頬を紅潮させていた。

あれだけ苦労したのだが…曖には、今の玲の言葉は、お礼の貰い過ぎだと思えるのだ。

二人は一緒にベランダに出ると、最後にもう一度、微笑みを交わした。

「じゃあね！」

「うん…」

いつも、どうしても寂しくなってしまう。

…でも、…そう想えることは、きつと…素敵なことなのね…

玲がプレゼントを抱えながら、片手で軽々と手摺りを飛び越えようとしている。

だが、その寸前で、彼は不意に曖を振り返ると言った。

「そうだ、曖ちゃん…」

「…？」

突然腕を伸ばすと、不思議そうな曖の双眸を掌で覆い隠してしまふ。

刹那、柔らかな黄金色の光が弾ける。

「お休みなさい、曖ちゃん」

そう呟きながら、玲は静かに手を外していた。

彼の優しい言葉に、半ば瞳を閉じてしまった曖がゆっくりと頷く。もう、玲の姿が目に入っていないらしい。手摺りを乗り越えて、宙に浮かんでいる玲をそれ以上見送りもせず、部屋の中へと戻ろうとしている。その幼い頬には、幸せそうな笑みが浮かんでいた。

「きつと、いい夢が見られるよ」

そのままテーブルの上を片付けもせず、服を着たままベッドに入り込んでしまった曖を見て、玲もにこりと笑みを浮かべていた。

幸せな気分のまま、眠りに就いて欲しかった…辛いことを、思い出さないままで…

玲自身、その安心が欲しかったのだ。

部屋の中の灯りを窓の外から消すと、曖の安全を確認した後、玲は空高く舞い上がっていた。

すっかり寒くなったように感じる大気の中を、家に向かって飛び始める。

眼下に広がる、漆黒の木の葉のうねりには、確かに夢鏡ノ泉から来た夢魔が潜んでいるのだろう…だが、そんな魔物よりも…『人間』の中にこそ、本当は『力』を使う相手がいるのかも知れない…

…今は、夢魔が人を操っているのかも知れないけどね…

だが、若しもそうだとしても、もともと夢魔達は、『人間』の欲望や夢が具現したもの…

結局、曖を苦しませる…悲しませる存在は、『人間』なのかも知れない…

玲には、そのことがとても哀しかった。

薄闇は沈黙を伴い、風に従いながら大気の中を流れていく。その欠片に時折隠されながら、月は青い光を放ち、少年の背をそっと照らし出していた。

…一人の少女に、喜びを与えることが出来る、『人間』の小さな背中を……

6 荒神

「…これを見たら、又、曖ちゃん悲しむだろうね…」
小さく溜め息を吐きながら、玲は読んでいた新聞を畳んでしまった。

香笹町とは反対の方角になるもう一つの隣町、田所町でまた事件が起きたのだ。

奇しくも曖と同じ年齢の少女が行方不明になって二日後、遺体となつて見付かったそうなのだ。

…どうして、こんなことが続くのかな……

今日はまだ土曜日なのだが…玲は、少し、曖の様子を見に行こうと決めかけていた。

立ち上がり、部屋に戻ろうとした瞬間、彼が広げる網に、凄まじいばかりの邪気が接触する。

その強さに怯みもせず、すぐさま玲は居間から『飛んで』しまっていた。

「玲？」

恵菜が、目覚めたばかりで整えてもない黒髪を覗かせる。

だが、その時にはもう、ソファの前には金色の淡い光が揺れているだけだった。

「…変ねえ。さっき、声がしたように思っただけけど…」

肩を竦めると、恵菜は洗面所に向かい、扉を閉めた。

「…？」

玲が姿を現したのは、駅に近い公園の上だった。

秋の草花が花壇に咲き乱れる広い公園の敷地を見下ろしながら、

玲は注意深く辺りに『力』を広げていた。

だが…すぐに、その細められていた漆黒の瞳に、当惑の色が浮かぶ。

ついさっきまで感じられていた邪な気配が、今は何処にも見つからないのだ。

まだ朝早い時間で、人間の微かな『気』ですら、それ程多くはない。網の中には気になる存在もいるが、あの途轍もない力の源ではない……

「……おかしいなあ」

小学生の顔に戻りながら、玲は人に見られないように気を付けながら地面へと降りていた。

そのまま、駅前のビルが立ち並ぶ方角へと向かって歩き出す。

……絶対、あの辺りに感じたんだけど……

緑豊かな公園を囲む、煉瓦を敷いた小道に出る。

その上を歩き始めた時、すぐ目の前の曲がり角の奥から、幾人もの足音とどさつと何かが道とぶつかる音がする。

玲は滑るような足取りで、その角に向かって駆け出していた。

「おい、爺さん。金、持ってるだろ」

突き飛ばした少年の言葉に、左右の連れも嘲りを含み低く笑う。

「……い、いや、私は」

「持っていないなんてことはないよな？」

「ほらほら、早く逃げてみなよ」

「そのまま動かないんじゃ、面白くないだろ！」

倒れ込んだまま恐怖で動けない老人を囲んでいるのは、どう見ても中学生以上には見えない。

逃げも逆らいもしない老人に、その内の一人が舌打ちと共に蹴りを加える。

「ぐう……」

苦しがる老人を見ても顔色一つ変えず、その少年は仲間に声を掛けていた。

「なっ、もういいだろ？ 俺、一度、肋骨を折ってみたいんだよ。本当に、その折れる音が聞こえるんだよな？」

「ああ、こんなカスカスの骨でも、ちゃんと聞こえるだろうぜ」

その答えに満足げに笑みを浮かべると、少年は老人の襟首を掴んで半身を立たせた。

「ほら、立てよ！」

「や、やめ……」

だが、その懇願は顔面に入った拳で停まってしまった。

「じゃ、やらせてもらうぜ」

愉快そうに笑いながら、少年が老人の胸元を蹴り上げようとした瞬間、彼の体は大きく宙に弧を描いて弾き飛ばされていた。

不意の衝撃に呼吸が止まり、呻くこともなく、少年は昏倒してしまふ。

「随分、酷いことをするんだね」

老人の前に滑り込みながら、深い静寂を漂わせる漆黒の双眸で玲は残る二人を見上げていた。

「な、なんだよ、こいつ！」

「……操られていたとしても……こんなことを楽しむ気持ちの『源』は、あなた達自身のものなんだよ」

「訳分かんないことを言ってるんじゃないっ！」

傍に転がしていた短い鉄の得物を手にすると、玲に振り上げてくる。その棒を左腕で軽く受け流すと、目で認識出来ないほどに素早く背後へと回りこむ。

軽く飛び上がり、首筋に音も無く手刀を打ち込む。

少年が倒れる音を聞いて、初めて最後の一人は玲の移動に気が付いていた。

「くそっ」

無謀にも、大きな動きで殴りかかってくる。

玲は表情を消したまま、その腕を避けると少年の腹部に弾くような一撃を加えていた。

道に倒れた三人を呆然と見ている老人に、玲は安心させるような笑顔を向けると言った。

「もう、大丈夫だよ。警察も来たみたいだしね」
誰かが通報したのだろう。

老人が近づくサイレンの音を確認してから向き直った時には…最早、そこに小学生の姿を見つけることは出来無かった。

老人の前から素早く姿を消すと、玲はすぐ近くのビルの隙間で足を止めていた。

薄暗い路地に顔を向けることもなく、静かに言葉を押し出す。

「…どうして、助けなかったの？ 僕より先に気付いてたよね…」
その低い声に、暗がりから一人の女性が現れ出ていた。

「私には関係の無いことだもの。」

私が興味を持っているのは、あなたの方よ。川瀬 玲君」

二十代も半ばだろうか。栗色の豊かな髪が、ビルから吹き下りてくる涼風に靡いている。

腕を組むその美しい女性を、だが玲は無表情のまま、振り向きもしなかった。

「どうして…！ あいつが…」

女性と玲を見下ろすビルの屋上で、短髪の少女が小さく驚きの声を発していた。

もう十八歳になるが小柄な体格の為に幼く見えてしまうその少女は、スクープのモニターに視線を向けたまま、すぐに無線を叩き始める。

「04より00（ラヴ・オール）」

「…こちら00。どうかしましたか？」

「班長を呼んで！ すぐに！」

少女の声は急を告げているが、特殊安全調査室の調査本部の声は落ち着いたものだ。

それもそうだろう。衛星からのモニタリングだけでは、喫緊の事態が進行しているとは分からない。

彼女自身にしても、声は乱暴になっているが、僅かに呼吸が乱れた程度にしかデータは送信されていないだろう。

特殊な訓練とは、結局、殆どの責任を自分自身で負わされる為のものだ。

本部からの通信を待つ間も、少女はモニターと音声の保存を進めている。

「どうした、綺羅^{きりら}」

冷やかで重い声が聞こえてくる。左右から同時に違う音声を聞き取りながら、少女は会話を始めていた。

「対魔委員会の委員が接触しているわ！ 『能力者』の調査は私達の管轄のはずよ。」

直接接触は双方の保護の為に禁じられているはずなのに…まさか…」

「判断はこちらです。そのまま、監視を続けるんだ」

「でも…」

「通信は終わりだ」

「…10・0（テン・ラヴ）」

不満気に唇を尖らせてはいても、冷静に監視を続けている。

眼下では、未だに会話が続けられていた。

「それに、彼等は斬肆^{ざんし}に操られていた訳ではないわ。」

相手を人間とも思わず、弱者の逃げ惑う姿を見て喜び、面白半分に殴っていたのは『彼等自身』よ」

「……」

玲は、ただ黙っているだけだった。

「あなたにも、分かっているんじゃないかしら、玲君。斬肆は、ただ、彼等の心を表に引き出しただけ。」

あれは、そうね、『事故』だったのよ。

斬肆という夢魔は、『人間』が最も興味を感じるもの…『殺人』を実行してみたいと思う心を自らの『力』にしているわ。だから、

斬肆がそんな『人間』の願いを素直に表現させようとしても、それを否定することは出来ないんじゃないかしら。

奥に秘めていても、表面に現れても、それが『人間』の欲求や望み、願いであることに変わりはないのよ。

そうであれば、あれは、何処にでも起こり得る『事故』の一つでしかなくなるわ。斬肆の存在は『きつかけ』でしかないのだから。

それなら、私が出て行く必要は無いわ」

「…そんな願いなんて、本当じゃないよ」

「そうかしら。『人間』の願いだからこそ、妖夢界で夢魔として生まれたのよ」

「…『一部』の夢だよ。

でも、僕はそんな夢を絶対に認めない。だから、例え借り物であったとしても、『力』があれば僕ならあのお爺さんを助けるよ」

初めて、視線を女性に向ける。その冷たく光る瞳にも、だが彼女はまるで動じず、薄く微笑みを浮かべていた。

「それは、私がすることでは無いわ。警察の仕事よ」

「違うよ。僕達がすべきことだよ」

…怒りを抑える事が出来なくなってきた。感情に導かれ、黄金色の光を身に帯び始めている玲を見ながら、彼女は突然くすくすと笑い出していた。

「特調の報告も、見ておくべきね。全く、報告通りだわ。

…でも、そんな考え方じゃ、この世界では生きていけないわよ」

そう言つと、不意に鋭く目を細め、彼女は玲の冷酷な視線を正面から受け止めていた。

「今は、『力』を抑えておきなさい。確かに、私が持つ護符ではあなたの『力』は防ぎきれないけど…別のことに、あなたの『力』は必要になるわよ」

その言葉が終わる寸前、玲は驚愕の表情を浮かべ天空を見上げていた。

途轍もなく強い邪気が、すぐ近くで放たれたのだ。

四方に広がるその波の中で、別の力が応えて…共鳴、している…？
「あれが…」

「そう、斬肆よ。『人間』の『願い』を更に吸収して、随分と成長しているわ」

「倒さないんだね…」

女性は僅かに唇の端を歪めると言った。

「当然よ。」

私の仕事は、あなたの『力』を手に入れること…まだまだ、先のことよ」

「…僕は、絶対に、あなたを認めないよ」

玲は静かにそう言つと、凄まじい勢いで広がり続ける邪気の源へと向かつて、飛び上がっていた。

朝まだ早い蒼穹の中へと消えていく小さな姿を目で追いながら、女性には微かな嘲りと共に呟いていた。

「どちらでもいいことよ。敵になるのなら、あなたを殺せばいいだけだから…」

.....

「琉璃、遠くに行つては駄目ですよ」

「うん、うん！」

母親の声に答えながら、小さな琉璃は神社の裏手にある古い倉へと歩いていった。

まだ少し、大好きな龍真が帰ってくるには時間がある。

それまでの僅かな時間を、幼い琉璃は倉の中で過ごすことに決めていた。

「あのね、あのね…お兄ちゃん、先に遊びに行つちゃったんだよ」
誰に向かつてでもなく、ちょこちょこ駆けながら愛らしい声で呟く。

「でもね、でもね。それはね、珠璃がお寝坊しちゃったからなの」
大きな倉の前まで来ると、精一杯腕を伸ばし、背も伸ばす。

あまりに古い鍵は、最早その役目を担わなくなってから随分と久しい。

倉の入り口は、幼稚園児の小さく丸い指先でも、簡単に開ける事が出来るようになっていた。

中にあるもう一つの扉を開けることも、珠璃にとっては一仕事だ。だが、その困難が楽しいのだ。

それに、倉の中まで入ってしまえば、そこにはいつも静かで気持ちの好い空気が満ちている。

龍真に教えてもらってから、この場所は珠璃にとって一番のお気に入りになっていた。

いや、それは龍真にとってもそうだ。そして、龍真の両親にとっても、そのまた両親にとっても…

…だから、誰もここが危険な場所だとはまるで認識していなかった。

もう少しで、扉が開く…

お気に入りの場所に入る為なら、少しぐらいの苦勞を厭ったりはしない。

漸くのことで、自分だけはいれる隙間が出来る。

珠璃はにつこり笑うと、中へと身を滑り込ませていた。

「うん、うん…大きなのが、いっぱいあるの」

それは、ずっとそこにある。大きな木製の箱だ。

宮木の板で作られたその木棺を、珠璃は触りもしなかった。

今日の目的は、この木棺に乗って遊ぶことではないのだ。

珠璃は家から持ってきた白いチョークを取り出すと、倉の真ん中に向かった。

深い沈黙の中、幾つも並べられている棺の間を一人で縫っていく。この場所についての知識を持たない珠璃にとって、ここはただの面白い場所ではない。

だが、この倉の中こそ、邪を封じていると伝えられている場所なのだ。

もつとも、知っていたとしても同じことだろう。

それは、ぼんやりとした暗がりの奥に消えかかる過去からの声にしか過ぎない。

掻き乱す必要は無いが、過度に怯える必要も無い。

今の宮木神社にとつて、ここはそんな場所になっていた。

朝の光が、小さな高窓から天井に向かって射している。その光の下まで来ると、珠璃は床に腹這いになっていた。

大きく、力一杯、線を描き始める。

残念ながら、何を描いているのかは珠璃本人にしか分からないが、幼女は大好きな兄に見せて喜んでもらおうと、ただ必死に絵を描き続けていた。

怒られる心配は無い。ここでは、何をしてもいいことになっている。珠璃はそう思っていた。

「ね、ね……お兄ちゃん、そう言ったんだよ」

時折、小さく愛らしい呟きが、沈黙を裂いて広がっていた。

時間の矢は、瞬く間に頭上を過ぎていく。

巨大な絵もそろそろ完成しようかという頃、珠璃はふとすぐ傍の木棺が震えていることに気が付いた。

「……？」

今迄に無い、初めての出来事だ。

小さな体は好奇心の儘に立ち上がり、その棺へと歩み寄ろうとした瞬間……

「珠璃、何処だ？」

外から戻ってきた龍真が、入り口から呼んでいる。

待ちに待っていた、大好きな声だ。

「お兄ちゃん！」

珠璃は木棺のことなど忘れ、振り返るとすぐさま入り口に向かって駆け出していた。

「あのね、あのね……」

暗がりから走り寄ってくる愛らしい姿を龍真が認めた時、彼はそのすぐ後ろから滑ってくる別の黒い影に気付き、口を開きかけた。

「琉璃……」

不意に沸き起こる不安と恐怖に、龍真が走り出す。

その、龍真の目の前で、『何か』は琉璃の背後に追い付き……

……龍真には、一瞬、琉璃の小さな体が床から飛び上がったように思えた。

「しゅ……琉璃……」

動けない……

……あれは、……何だろう……

……琉璃の腹部から飛び出している……あの、……赤く、濡れたものは……

……動けない……

幼い体を貫く……血塗れの腕を見ても……

……涙など、……出てこない……

信じられない……嘘、だ……

愛らしい幼女の体が、軽く投げ捨てられる。

無邪気な絵が、広がる赤黒い液体に消されていく……

光の中へと現れ出てきた者がいる……だが、龍真は微動だにしなかった。

……自分も……危ない……？

……まさか……『嘘』なんだ……危ないはずがない……

そんなはずがないんだ……！

「……嘘だ！　嘘だ！　……信じるもんか！」

「じゃ、死ねばいいわ」

冷めた声が流れる。

だが、最早龍真にはそんな声など聞こえていなかった。

軽やかに床を蹴ると、女が龍真目がけて襲いかかってくる。

振り翳す手が、動かない少年の頭部を削ぎ落とそうとした瞬間……

「…又アクサンダザラダンカン！」

少年にしては高く、まだ幼さが残る声が入り口から飛び込んでくる。

ぶつかってくる声の波を両手で防ぎながら、女は床に降りると真言の源に目を向けた。

龍真の背後で、一人の少年が胸元に剣印を結んでいる。その小さな唇は微かに震え、口中では小呪が生まれ始めていた。

「チッ！」

周囲に編み出される『力』の大きさを知ると、女は悔しそうに美しい顔を歪ませる。

不意に身を翻すと、女は天井に向かって飛び上がり、そこを破って逃れようとした。

「臨・兵・闘・者……」

追いかけるように、九字が切られる。

人差し指と中指を伸ばした刀印が、宙を切ることに白光の軌跡を闇に描く。

「クッ……」

振り返り、諸手に集めた静電気の壁で『力』を防ぎながら、女はそのまま屋根を突き抜け、そのまま飛び去ってしまった。

「くそっ！」

不満気に、その後を見送る。

「神社の結界が無かったら、逃がしたりしないのにな」

少年は今になっても動かない龍真の前に回り込み、その顔を覗きながら声を掛けていた。

「おい！ 大丈夫かよ」

だが…龍真は大きく目を見開いた儘、何も言わない…

涙すら出てこない瞳は、自分の肩を持ち、大きく揺さぶる少年の姿さえ捉えてはいなかった。

少年の鳶色の瞳が、微かに揺れる。

龍真の心が既に破片となって砕け散っていることを知ると、脇に

転がる珠璃の死体に目を流し、少年は舌打ちをした。

「…火界呪にでもすればよかったかな」

普段は強気な声も、流石に僅かな湿り気を帯びている。

その時になって、漸く、神主である龍真の父親が異変を察して駆け寄ってくる姿が見えた。

「^{せい}聖殿！」

少年…いや、少女である^{おつるぎ}隠剣 聖は、哀しい笑みを浮かべながら、倉を出て彼を迎えた。

「…逃がしちゃったよ。欲界の第二天…煩惱魔だったんだ」

そう呟くと、集まってくる人々を背に聖は歩み去っていく。

悲しみの声が大氣中に広がっていく…

「くそっ！」

聖は遣り切れぬ思いの儘、足下の小石を何度も何度も蹴り飛ばしでは、その軌跡を目で追っていた…

.....

「やっと見つけたよ…斬肆」

力を放ち、合図を送り続けていた若者は、不意に聞こえてきた静かな声に驚き振り返っていた。

だが、目の前で浮かんでいるのは、ただの若い少年一人だ。

若者は薄く笑みを浮かべると、銀色の短髪の下から嘲るような目を覗かせて言った。

「貴様か…俺の行動を探っていたのは」

「そうだよ。封印を破られてから、ずっとお前を探していたんだ。やっと、見つける事が出来たよ」

玲の体を、黄金色の揺らめきが覆い始める。

鋭い漆黒の瞳に曝されても、だが、斬肆は落ち着き払った声で肩を竦めていた。

「…成程な。あの封印からは想像出来ないほどの『力』が、貴様にはありそうだ」

探している『対』を…^し撕戸をここに呼び寄せるつもりだったが…この少年が、危険であることは間違いない。

…なら、先に始末した方がいいだろう。

何の前触れも無く斬肆は右手を突き出すと、その指先から青白い光を放った。

その細く鋭い光の矢を、玲は片手で軽く払ってしまう。

「…凄い静電気だね」

何気なく呟くが…

掌で受けた衝撃に、玲は無表情だった頬に微かな緊張を走らせていた。

…若しかすると……

そう…僕には、倒せないかも知れないね…

……自分の『力』の限界は知っているつもりだった。

でも……やってみよう。

…井村さんの時のように、悔やんだりしたくないからね…

玲は胸ポケットのケースからカードを4枚取り出すと、斬肆に向かって次々と投げつけた。

次には、その場から姿を消してしまう。

斬肆は青白い壁をめぐるせ鉛色の光跡を防ぐと、直後、凄まじい爆発に巻き込まれる。

「クッ…」

端正な顔を歪め、斬肆は全身を貫く痛みに耐えながら周囲を警戒する。

炎と煙の汚れた大気を、風の乙女が払い清める。

その瞬間、高めていた『力』の塊を振り翳し、玲は背後から斬肆に向かってぶつけようとした。

だが、目の前で、銀髪の若者の姿が消えてしまう。

それでも慌てることなく、表情を消した少年はそのまま『力』を

奔流に変え、頭上に放っていた。

「何！」

回り込んでいた斬肆は、急いで静電気の壁を描き出していた。間を空けずに玲が再びカードを投げようとした時、不意に彼は真横から雷光を受け吹き飛ばされてしまった。

(……！)

「情けないじゃないか、斬肆」

美しい女が、呆れた声で近付いてくる。

その言葉に、斬肆は乱れた呼吸を整えながら、舌打ちをして言った。

「お前の為に、わざわざこんな世界に来たんだぞ、撕戸。お前こそ今まで何処に封じられていたんだ」

「随分と汚い倉の中だよ。」

それより、先にあの子を始末しようじゃないか」

幾分薄れた黄金色の光を纏う少年を見ながら、撕戸が嬉しそうに笑う。

斬肆も微かに笑うと、二人は素早く散り、玲を上下から挟み込んでいた。

(……！)

軽く唇を噛み、玲はその場で移動を止めた。

斬肆と撕戸が互いに向かつて手を伸ばす。

「……………！」

(………？)

すぐさま『力』を高める。

「遅い！」

青白く細い光が玲を囲み、上下に走る。

嘲りの声が響く中、斬肆の掌から生じた太い光の円柱は玲を飲み込み、撕戸の掌へと向かって落ちていた。

「う……うわああ……………！」

玲の小さな体を、無数の光の槍が突き抜けていく……

(…曖ちゃん……)

焼け付くような痛みが全身を貫く。

眩い青の光の中、少年の姿は薄れ…やがて、消え入ってしまった。

朝の支度を手伝って、無事に父親を送り出す。

廊下で見送った後、玄関を閉めて鍵をかける。

靴を脱ぎ、廊下に立って家の中を振り返った途端…

「…！」

不意に、胸元に鋭い痛みを感じて蹲ってしまつ。

「…玲、君…？」

苦しい…

…知らず、強く閉じた瞳から涙が溢れ出している…

「玲君…玲君……」

玲君が…助けを呼んでいるの…

…だが、曖に一体、何が出来るのだろう。

廊下に倒れこみながら、押さえている胸元で両手を組み、力一杯握り締める。

そのまま、曖は『何か』に向かって必死に祈り始めていた。

…いや、言葉では無い。名前だ。ただ、玲の名前だけを…ずっと、曖は繰り返し祈り続けていた……

「…！ 04より00」

観察を続けていた綺羅は、青白い光に玲が飲み込まれた瞬間、僅かに乱れた声で本部を呼び出していた。

「こちら00。大きな現象は把握している」

「目標が殺されるわ。接触の許可を…！」

…あまりの『力』の発現を前に、綺羅の声にも動揺が走り、語気が強くなっている。

「駄目だ。接触はするな」

班長自身の声が割り込んでくる。自身でモニタリングしていたの

だろう。

…班長もまた、対魔委員会の動きを探り始めているのだ。
いや…既に知っていて、そのように振る舞っているだけかも知れない。

「まだ子どもなんですよ！ 例外を…！」

目の前で、幼い命が消えようとしているのだ。しかも、自分なら、それを止められるかも知れないのだ。

噛み付く綺羅に、班長の声は冷淡そのものだった。

「例外は無い。『力』の規模と種類、その成長過程の確認と記録がお前の任務だ」

「ですが…！」

声は怒りを帯びている。

だが、彼女自身は身動き一つせず、指先は冷静に画像と音声の記録を続けている…

…それが彼女の任務だ。

「動くんじゃない、綺羅」

聞き慣れた声が、突然会話に飛び込んでくる。

「鋭狼…」

今も、彼は見守ってくれているのだろうか…

七つ年上の彼の言葉は、綺羅の言葉から勢いを殺いでしまう。

「以上だ」

「10・0」

落ち着き払ったその言葉に、綺羅はただ小さく呟くだけだった…

「もういいんじゃない？ 斬肆」

撕戸の言葉に頷きながら、斬肆は諸手を引いた。

…収まっていく光の中には、最早何者の姿も残ってはいない。

満足そうな笑みを唇の端に浮かべると、銀髪を揺らしながら斬肆は美しい女性の姿をした撕戸に近寄った。

「少し、あっけなくはないか？」

「いいじゃない。いないんだから」

撕戸は興味無さそうに肩を竦めると、すぐ脇に浮かぶ斬肆の腕を取った。

「それより、折角なんだから、半年はこっちで遊ばない？ わざわざ、『力』を使って戻らなくてもいいでしょ。」

さつきも一つ壊したんだけど、邪魔が入って遊べなかったのよ」

「幾らでも、壊す物はあるじゃないか」

何も知らずに眼下を歩む人々を指差している。

撕戸も綺麗な笑みを零す…

「…ええ。でも、その前に、少しだけ手伝って欲しいこともあるのよ」

深い…何処までも深い蒼穹の中を、二人の夢魔の姿は消えていこうとしている。

…だが、あの夢魔の追跡は自分の任務ではない。

ただ…綺羅にはマーカーを付けて見送ることしか出来なかった。

「うっ…」

無惨に変わり果てた少年の姿…

その身体に、細い腕がそっと添えられる。

静寂を帯びる漆黒の瞳にも、今は哀れみを浮かべながら…若者は

自らの『力』をほんの僅か、少年の身体へと注ぎ込んでいた。

刹那、暖かな黄金色の光に、優しく少年が包み込まれる…

若者にとって、斬肆や撕戸の『力』など危険なものではない。だが、この少年にとっては…

…救い出されなければ、この少年の存在は塵と化していただろう。一瞬にして光は弾け、血痕や火傷の痕が消えていく…

『時間』を秘める輝きが消えた後には、少年はベッドの上で深い眠りに就き、安らかな寝息を立てていた。

「…可哀想に。まだ、辛いことを聞かされるだろう…」

声だけが部屋に広がる。

若者の姿が失せた部屋で、何事も無かったかのように、少年は穏やかに優しい眠りの世界を楽しんでいた…

「玲！ 玲！」

「…ん…？」

小さく伸びをすると、ベッドの上で半身を起こす。

「あれ？ ここ…」

だが、考える暇もなく、激しい勢いと共に扉が開かれ、恵菜の叫び声が飛び込んできた。

「寝てる場合じゃないわよ！ 龍真君の妹が…」

姉の言葉に、驚いて跳ね起きる。

「琉璃ちゃんが、どうかしたの？」

見ると、恵菜の後ろには息を切らしている和輝の姿がある。

恵菜は、玲を真っ直ぐ見つめると、臆することなく正直に伝えていた。

「琉璃ちゃんが、亡くなったそうよ」

「……！」

不意に、今朝の出来事の全てが脳裏に甦る。

撕戸は何処から現れた…？ あの方角は……？

まさか…

「いや……」

琉璃ちゃんは…殺されたんだ……

「……なのに…」

僕は…何も出来無かったんだ…あの妖魔達を倒せなかったんだ…いつも龍真の横にいて…それだけで、ただそれだけで幸せそうな笑みを満面に湛えていた、幼い琉璃の姿が浮かんでくる。

全身から力を失い、その場に座り込むと玲は涙を流し始めていた。

「玲！」

恵菜は駆け寄ると、そんな弟の肩を優しく抱き締めていた。

「…いい？ 聞くのよ！」

今は、泣いている時じゃないわ。玲よりも、悲しんでいる人がいるでしょう？　その子の傍にいてあげられるのは、玲達だけなのよ！」

力強い言葉は、だが、小学四年生の少年には厳しすぎるものかも知れない。

これ程も身近な『死』を、玲は初めて感じているのだから…

だが、恵菜は分かって欲しかったのだ。いや、分かるはずなのだ。亡くなった珠璃も大切だが、今、生きている人もまた、玲にとって大切なのだ…

今、辛いのは、玲だけではない。

その時、和輝は何も言わずに近付くと、玲の手を取っていた。

その手もまた、震えている…

玲は涙に濡れる顔を上げると、和輝を見、そして恵菜に視線を向けると言葉を押し出した。

「…行ってくるよ。」

きっと、龍真君には僕達が必要だからね…」

「そうよ」

大きく頷く。

そんな恵菜に精一杯の力と気持ちで笑い掛けると、玲は立ち上がった。

「ありがとう、和輝君」

「うん。さあ、行こう」

その言葉を合図に、二人は部屋を飛び出していた。

.....

…血だらけになって…動かない…

…もう…二度と…

いや……

…愛らしい声が、聞こえる…可愛い…いつも近くにいた…あの声、が…

あのね、あのね…お兄ちゃん…

どうして…

…あの、嬉しそうな笑顔が…

…どうして…無くなるなんて…

そんなことが…どうして…あるだろう…

…ほら…

…そこに…見えるじゃないか…

…お兄ちゃん…珠璃ね…

…龍真は、独り、自分の世界だけを見つめていた…

………

しめやかに、珠璃の葬儀は執り行われている。

眩耀寺からも、わざわざ僧正が遠路も辞さず訪れている。

外陣も含めた四方には強力な結界が張り巡らされ、特別な『力』を有するものも、翳月山を挙げて集められ宮木神社を守っていた。

宮木は邪力を萎縮する…その『力』は決して偽りではない。だが、あの煩惱魔はその宮木の木棺から逃れ得たのだ。

その『力』に多少なりとも依存している翳月山の者にとって、琉璃の死は他人事ではない。

様々な『力』が交錯する中、玲はずっと龍真の横に付き添っていた。

琉璃を目の前で殺されて以来…彼は、何も言わず、何も食べようとはしない…

まるで…人形のような。

和輝もまた、むせび泣く綾子を支えながら、隣で葬儀を見守っていた。

皆、黙り込んでしまっている。

『死』が、これ程も重いものだと…だが、龍真が負ってしまっただものの方が、自分たちが感じているものよりも遙かに重いのだ。

一体、玲達に何が言えるというのだろうか…

いつしか、葬儀も終わりに近付いている。

あの愛らしい幼女を送り出すには、短過ぎる気もする儀式の終焉

……

その時、不意に二つの強大な『力』の渦を感じ取り、玲は身を引き締めていた。

…間違いない。斬肆と撕戸だ。

玲は和輝の視線を捉えると、そのまま龍真に導いた。綾子の肩を抱いたまま、その理由は全く分からなかったものの、和輝は小さく頷き返す。

すぐに立ち上がると、玲は音も無く部屋から退いた。

同じ頃、宮木神社を囲むあちこちでも微かな動きが生じ始める。

だが、宮木神社の神主からは、一つの可能性を試みるまで、その行動を制限されていた。

その神主本人は、一人静かに、玲の後を追って抜け出していた。

「川瀬君…」

呼びかけてくる声に驚いて足を止めると、玲は振り向き、そこに龍真の父親の姿を認めていた。

「…おじさん…分かるんですか？」

「ああ。」

そして、私の『力』だけでは勿論のこと、君の『力』でも、あの魔物は倒せないことも分かっている…」

「…そうですね」

向き直ると、真剣な表情で玲は彼を迎えていた。

「でも、僕は絶対に赦しません。」

珠璃ちゃんや龍真君に、あんな酷いことをして…絶対に、赦せないんですよ…」

流れ出す言葉に従い、玲の体を黄金色の焰が嘗めていく。

宮木神社の神主は重く頷くと、先に立って少年に告げた。

「こちらに來なさい。あの者達の狙いも、おそらくはあれなのだろう…」

その言葉に逆らえず、玲は歩き出した神主の後を黙ってついていった。

幾つもの部屋を通り抜けていく。

今、自分が何処にいるのか…まだ、宮木神社の中なのか、或いは全く別の空間に入り込んでしまったのか、次第に分からなくなってしまう。

「…ここだ」

漸く歩みを止めると、神主は廊下の脇の小さな戸に手を掛けた。

音も無く引き、部屋の中へと入る。

そこは本当に小さな部屋だった。すぐ奥には、これも小さな祭壇がしつらえてある。

…何かあるのかは、薄暗く、よく見えていないが…そこに存在する『何か』から溢れ出す『力』は、凄まじく…そして、眩い…

「ここに、あの撕戸を封じる際に使われた神剣がある。」

…恐らく、あの者達もこれを奪うつもりなのだろう…」

奥へ進むと、祭壇の中に手を伸ばしている。

玲がすぐ後ろに立って黙って控えていると、突然、目の前に鞘に

納められた長剣が差し出された。

「これを、抜いてごらんなさい」

「え？」

「龍真は残念ながら、この剣を継承する『力』は持ち合わせていなかった。

だが、君であれば、もしや……」

戸惑いながら、長剣を受け取る。

何も言わずに柄に手を掛けると、ゆつくりと…鞘を引いた。

滑らせて生じた僅かな隙間から、強烈な『気』の渦が進る…

「うつ…」

その『気』の勢いに、思わず手が止まる。

「急ぎなさい！」

厳しい言葉に、玲は躊躇いを捨てると、一気に剣を抜き放つていった。

銀色の光が、小さな部屋に広がり、乱舞する。

その美しい『気』の奔流の中で、神主は静かに呟いていた。

「やはり…君には、抜くことが出来るのか…」

川瀬君。これから、この神剣…縛羅はくろは君のものになる。

君は…この神剣を手にする為に、この宮木に生を享けたのだよ…」

「え…？」

だが、玲の言葉はそれ以上続かなかった。

対の『力』が、すぐ頭上まで迫ってきているのだ。

「行きなさい」

その言葉が消えゆく前に、玲の姿は部屋から失せ…あとにはただ、僅かな黄金色の揺らめきだけが、暗闇を背に浮かび漂っていた。

秋の、澄み切った青い空が何処までも広がっている。

まるで…悲しみなど、存在していないかのよう。

その蒼天を背にして、斬肆と撕戸は薄く笑みを浮かべながら、宮木神社を遙かに見下ろしていた。

「ここか…」

幾つかの『力』が錯綜している。だが…関係無いことだ。

斬肆の言葉に無言で頷くと、撕戸は諸手に静電気を集め始めた。

彼も、すぐにそれに倣う。

高まっていく『力』を頭上に振り翳し、今にも神社の結界の中へと突入しようとした瞬間…

目の前に、小さな影が揺らめいた。

「…！」

僅かに左右に散り、身構える。

そんな二人の前で、幼い体に不釣り合いな長剣を手にした少年の姿が顕現した。

「なんだ、まだ生きていたのか」

浮かぶ玲の姿を見て、斬肆が軽く嘲笑う。だが、その横で、撕戸は恐怖に美しい顔を歪めると、少年の手にある抜き身を見ながら喘いでいた。

「それは…縛羅…！」

「これがだど？」

動揺する夢魔を前に、玲はただ黙り続けていた。

両手で軽々と縛羅を握り締めながら、静かに『力』を高めていく…身を覆う黄金色の凄烈な光は大気を焼き焦がし、その小さな体からは、今迄に発せられたことが無い程の『力』が波打ち、押し寄せてくる。

「グッ…」

「…絶対に……赦さない…」

不意に、微かな咳きが零れる。

だが、そこに最早憤怒の色彩は無く、冴え冴えと澄んだ…透明な《虚無》だけが響いている。

言葉が宙に溶け込むや否や、玲の姿はその場から消えていた。

次には、斬肆のすぐ後ろで音も無く長剣を振り上げている。

「…！」

だが、斬肆も集めていた『力』で青白い盾を描くと、素早く刃の下から移動した。

当てるつもりなど無いかのように、そのまま玲は青白く光る静電気の塊を切り裂いている。

長剣から迸った銀色の光の奔流は、斬肆の盾を無に帰してもなお力を衰えず、更にそのまま眼下の宮木神社へと伸びていく…

「……！」

我に返ると、玲はその光を止める為に先回りしようとした。

だが、夢魔はその意図に気づき、邪魔をする。

互いが対峙したその時、不意に両者は動きを完全に止めてしまった。

…辺りの景色の『表面』を切り裂いて…虚ろな『何か』が走ったのだ。

突然日が沈み、薄い青闇が広がった気がする。全ての事物が曖昧になり、霞む。

これは…何？

新たな敵を警戒し始めた一瞬の隙を縫って、縛羅の『力』は宮木神社に到達し、凄まじい爆音と共に全てを破壊していく。

「しまった！」

木材を引き裂く、轟音が空間へと満ちていく…

「…そんな！」

目の前で崩れていく屋根の下には、綾子や和輝達が居るはずだ。

更なる『死』を、…玲自身の手がもたらして…

「…大丈夫。ここは、俺の結界の中だからな」

恐怖に顔を引き攣らせている玲の頭上から、静かな…深みある声が零れ落ちる。

その声の抑揚を耳にした瞬間、玲は一瞬、志水のことを思い出していた。

だが、その沈黙と優しさを共に伴う言葉の連なりには、未だ僅かに幼さが感じられる…

更に、不思議なことにその言の葉を耳にした瞬間、玲は疑いもせず穏やかな安心を覚えてしまっていた。

「驚いたよ。新しい空間も創らずに、いきなり始めるんだからな」
続けられる言葉と共に、玲の目の前に少しだけ彼よりも年上であろう少年が姿を現していた。

やはり、志水と同じ黒髪をしており、その漆黒の瞳の奥には『時間』の秘めた力が豊かに満ち溢れている気がする…

…そう言えば……

自分を助け出してくれたのは、この少年なのだろうか……

「それは違うよ。いや…俺になるのかも知れないが、少なくとも『今』の俺じゃない。」

それと…終わったら、あの子のところに行くんだぞ？ 必死で祈り続けてるんだからな」

あの子…？

不意に、脳裏に曖昧の姿が浮かび上がる。

…そうだったのか……

「おい、ここは…」

世間話でもしているかのように無防備な少年を、斬肆と撕戸は警戒しながらその行動を窺っていた。恐らく、敵なのだろうが…

当の本人は身構えもせず、夢魔の低い呟きに軽く肩を竦めると向き直って答えていた。

「だから、単なる新しい結界の中さ。眩耀寺と宮木神社の結界じゃ、縛羅の『力』は防げなかったからな。」

結界の創造は、新しい空間と新しい時間をそこに創り出すことだ。この中なら、好きなだけ壊しても元の世界には影響は無いよ」

「でも…」

空間の創造は、玲にも出来る。だが…『時間』を含めた結界の創造など、簡単に出来るはずがない。

それに…絶対、何かに影響が…

玲の心配そうな視線には応えず、少年は何でもないかのように続

けていた。

「それよりも、早くこの夢魔達を倒した方がいいだろう。」

近頃、この辺りで暴れていたみたいだからな」

初めて、冷やかな視線で斬肆達を見る。

その視線を受け、素早く二人は全身に青白い静電気の煌きを纏い始めた。

玲も、再び剣を構え直す。そして、目の前の少年に静かに言った。

「手は出さないでね。…僕が、倒すんだ」

「……」

結界の中であることを知ると、最早純粋な怒りは留まることを知らず増大していく。

素直に吐き出されていく途轍もない『力』を真剣な表情で見ている少年は、すぐに片目を瞑ると脇に身を引いていた。

「分かった。俺は見学しておこう」

「…ありがとう」

縛羅からも、玲の『力』に呼応して銀色の波が走り出す。

斬肆と撕戸は、既に集めていた『力』を使い、少しでも先に動くとした。

「……！」

だが、不意に凄まじい『力』の塊が目の前から消え失せてしまう。纏う黄金色の光も、剣が発する銀光も、薄闇の中へと溶け込んでしまったようだ…

「馬鹿な…！」

移動したのなら、すぐに分かるはずだ。あれ程の『力』、隠せるはずがない…

驚く夢魔達を前に、黒髪の少年は愉快そうな笑みを浮かべると、顎で先程まで玲が居た場所を示していた。

改めて視線を向けた瞬間…だが、斬肆も撕戸もその身は既に、銀色の奔流に飲み込まれてしまっていた。

玲は動いてなどいない。ただ、全てをあまりに深く、重く、静か

に……まるで、深淵の奥を覗き込んだ時のように、限りなく虚ろな《無》へと、その様相を変えてしまっただけなのだ。

それは玲自身も、今迄に感じたことの無い新たな『力』の様相だった。

「……！ この力……？」

消えていく夢魔の悲鳴に、厳しく静かな声が応えていた。

「そう。龍の……『負』の『力』だよ。

お前達の上に立つ存在の『力』だ……」

だが恐らく、少年の言葉は夢魔の元へは届いていなかっただろう……縛羅が放つ猛烈な『力』の渦が、次第に収束していく。

自分の手の中から生まれたその光を、玲は脱力したように呆然と見つめていた。

そんな彼に、少年が滑るように音も無く近寄ってくる。

「あの斬肆と撕戸は消えた。

だけど、次の斬肆や撕戸がすぐに生まれるだろう。

同じ人間を弄んで殺したい……そんな望みや、遺体さえ単なる『物』としてしか見ない心が、人間から無くならない限りは……な」

落ち着き払ったその言葉に、玲は呟くように答えていた。

「……また現れたら……僕が倒すよ。

あんな夢魔を、僕は絶対に認めない……」

「……」

「例え、一部の人間の欲望だとしても……人間なんて、すぐには変わらないから……」

きつと、僕は、斬肆や撕戸を何度も倒さないといけないんだ……

……その為に、僕の『力』はあるんだ……きつと……」

小さな呟きに、少年は微かに笑みを頬に映す。

そして黙ったまま、指を鳴らした。

瞬時に、全ての存在が鮮やかな色を取り戻す。

破壊されていた風景も、以前と変わらない、元の姿に戻されていた。

「…今は、これでいい。」

「だけど、どれだけ辛くても、今回のように怒りのままに『力』を使ってしまうば、その全ての『業』は君に返ってくるぞ?」

「…構わないよ。…もう、琉璃ちゃんは戻ってこないんだ。…龍真君だって……」

諭すような言葉に低くそう答えると、玲は今は光を収めた縛羅に視線を向けた。

今はもう、ただの古びた長剣にしか見えない。この剣が生み出す『力』の『業』を、自分一人で受け止め続けることが出来るのかどうか…

だが、それでも、やはり、この長剣をこれからも使い続けるのだろう。

この縛羅は、玲を選んだのだから。

「…そうだな。それも『人間』なんだろうな」

少年は真剣な声でそう言ったかと思うと、次には片目を瞑ってみせた。

「まあ、今回の『業』については、君は特別に防御する必要は無いよ。」

あれは、俺が創った結界の中でのことだからな。あの中で起きた全ての出来事に関する『業』は、全部俺に返ってくることになる」

「じゃあ……」

「やっぱり…」

結界を創ったとしても、この世界に全く影響が無いわけではないのだ。

心配そうに目を上げる玲に、少年は屈託無く笑うと言った。

「大丈夫。また、何処かの神にでも肩代わりをさせるよ」

少年が地上へと降りていくのに合わせて、玲もゆっくり下降を始める。

沈んだ顔付きのままの玲を振り返りながら、少年は思い出したように言った。

「この宮木神社の跡取り…龍真君か、彼については心配しなくてもいいだろう」

「…」

心配しなくてもいいはずがない。

「彼は、君が思っているほど、弱くはないよ」

静かな口調でそう言いながら、少年は目を転じると続けた。

「今頃はもう、新たな『力』を身の内に見出しているだろう…そうですね？ 神主さん」

ゆつたりとした足取りで出迎えていた龍真の父親は、名も知らぬ少年の問いに応え、重く頷いていた。

直後、玲も龍真の『変化』を感じ取る。

あまりの驚きに目を睜り、彼はただ黙って二人を見ていた。

「…これからは、彼も能力者の一人になる。

今なら、その縛羅でさえ扱えるはずだ。もつとも…内に宿る存在に頼って…だけだな」

少年の目には…僅かに、哀れみの色が映っているかも知れない…

彼の言葉に、玲は神主に向かうと、手の中の剣を差し出そうとした。

「この剣、返しましょうか…」

だが、宮木神社の主は、そんな玲に強く頭を振った。

「いや、それは玲君のものだ。」

龍真には、新たな如意宝珠があるのだから…」

その言葉と共に、三人を重い…あまりにも重い静寂が包み込む。

…そう。

その『力』の源たる如意宝珠を…誰が、好んで与えたりするだろうか…

ふっ…と小さな溜息を吐くと、沈む気持ちを振り払うかのように短い黒髪を揺らし、少年は軽く地面を蹴った。

「あの泉…妖夢界への扉は俺が封印しておくよ」

宙に浮かびながら、二人を見下ろし、言葉が続ける。

「残念ながら、あそこはまだ閉じる《時》が来ていない。

だけど、例え僅かな間だとしても、影響は最小限に抑えないといけない……」

透明な微笑みが、親しげに頬に浮かぶ。

その笑顔に玲が応えようとした時には、もう既に、少年の姿は秋風に払われ消えてしまっていた。

「……」

また…会うことになるのだろう。

玲も小さく頭を振ると、縛羅を捧げ持ち、掌から空中へと浮かべた。

そこに、新しい空間を創造する。

玲はそのまま縛羅をその新しい結界の中へ封じると、この空間から消してしまった。

「…皆の所へ戻ろう」

龍真の父親の言葉に諾うと、玲はその背に従った。

……龍真君が…

喜ばはしないが…喜ばなくてはいけないのだろうか……

澄み渡った碧い空の下、戸惑いの表情を浮かべたまま玲は葬儀の場へと戻っていた。

……最早、送り出すべき存在など、失せてしまった儀式の場へと

……

……

……

…光？

……まさか……

…この世界に、…光なんて…

……？

……黄金色の、漣が…

……！

…声…？

暗闇が……消える…

…お兄ちゃん…

……琉璃…

二度と、聞こえない……あどけない言葉…

あのね、あのね…ずっと一緒になの…

…こんなにも…近くに…

ずっと…ずっと…ね？

…新しい…声…

………

「龍真？」

和輝の声に含まれた響きに驚き、綾子は涙に濡れた顔を思わず上げてしまった。

「…！」

彼女のすぐ目の前で…生気の失せていた龍真の瞳から、一筋の白銀の流れが伝い落ちていく…

ゆっくりと…

…ゆっくりと………

開かれています龍真の瞳が、焦点を探し始めている……

「龍真君…！」

綾子の叫び声に…

……龍真は、弱々しい笑みで応えていた……

勢いの衰えた森の木々の中を、白い風が駆け抜けていく。

広大な敷布の上には、とりどりの色紙が撒き散らされ、歩みは冬へと近付いていく。

明日にはもう、龍真は『死』という名の過去を外界に認め、『生』という名の思い出を、自らの内に発見するだろう。

…その思い出こそ、…珠璃の新たな『生』なのだ……

6 荒神 おわり

7 寥落

馥郁と、魅惑的な薫りが宙に立ち込めている。

その香りの源である、濃い緑を滴らせた笹藪を背に、泉は灰色の石に囲まれ枝葉を映していた。

だが、映る葉はそよとも動いていない。

何も動かず、何も音を紡がない…ただ、時間さえも止める静けさだけが、辺りにたゆたっていた。

その泉…夢鏡ノ泉の前で、今、一人の少年が佇んでいる。

黒髪の下、瞳を閉じ…諸手を泉の上に翳している…

不意に、更なる静寂がその場を支配した。

この香笹を纏う泉が放っていた今迄の沈黙など、少年から溢れ出す『虚無』に比べれば騒音にも等しい。

時間や空間、あらゆる思念や存在をも内に飲み込み秘めてしまうその『力』は、顕現の源たる少年をもその場から消してしまっていた。

人がいれば、目には見えるだろう…だが、それは一枚の『絵』にすぎない。

どれ程の時間が過ぎたのか…決して計ることが出来ない刹那の後に、やがて少年は瞳を開いていた。

黄金色の煌きを奥深くに潜めた漆黒の瞳…その双眸に見据えられ、一瞬、水面は抗おうと蠢く…

だが、次には再び沈黙に従っていた。

「…妖夢界、か…いずれ、秩序が必要だ」

小学五年生の子どもの口許から、静かな言の葉が零れ出す。心惹きつけるその響きは、周囲を支配する静寂と争いもせず、吸い込まれるように広がり、消えていった。

だが、それ以上は何も語らず、彼はゆっくりと視線を上げた。

そこには、森の木々の隙間を縫い、夢鏡ノ泉へと歩み寄る一人の

男が見えていた。

ふっ…と、微笑みが頬に浮かぶ。

ただ待っているだけの少年を見付けると、男は躊躇いがちに声を押し出していた。

「…君は…精霊なのか…」

その言葉に、香笹が不意にざわめき始める。

濃厚な薫りが空間を埋め尽くし、言葉を秘めた>無音くが秋風を伴い二人に襲い掛かってくる…

…だが、少年が周囲に視線を向けただけで、全ては沈黙を取り戻していた。

「いや。俺は精霊じゃない」

男を見ながら、優しい声音で少年はそれだけを告げた。

「…だが…かつては、そうだったんじゃないのか…？」

縋るように尋ねてくる男に、少年は憐れむような光を瞳に宿しながら首を振った。

「違うよ。」

確かに、この水には『力』があるけど、俺はそれを必要とはしてない」

「『力』…やはり、そうなのか…」

男の呟きに、少年は敢えて応えていた。

「そう…この特殊な泉の存在がもたらす、ある種の副作用だね。」

この水を精霊が飲めば、その精霊は…例えば人間としての姿を望めば、それを手に入れることが出来る。そして、そうして人間になった精霊は、再びこの泉の水を飲めば、元の姿を取り戻せるんだ」

「じゃあ…人間が飲めば…」

男の言葉に、少年は再び…はつきりと頭を振ってみせた。

「残念だけど、そうはならないんだ。」

精霊も、一度元の姿に戻ってしまえば…」

一瞬、さすがに憐憫の情から言葉が途切れてしまう。

「…二度と、人間と交流は持てなくなる」

「そうか…やはり、そうか…」

…だが…それなら、…何故…」

男は少年の言葉にうな垂れると、その場で膝を折ってしまった。

「あの人も…よく分かつてはいたんだ」

少年は優しく語り続けていた…

「だけど、この世界は、精霊界の存在が暮らしていくには、あまりにも穢れている…」

男は両手で顔を覆うと、少年の前であることを忘れたかのように声をあげて泣き出していた。

「…戻って欲しいんだ…」

娘の為にも…」

見下ろす少年の前で、男は涙と共に言葉を吐き出していた…

「曖の為にも……」

………

「……………」

七時に合わせた時計は、まだベルを鳴らしてはいない。

円らな瞳をゆっくりと開けながら、曖は今日のことを思って幸せそうに微笑んでいた。

今日は、クリスマスなのだ。

そして、一昨日に逢ったばかりなのだが、今日も玲は逢いに来ると約束してくれた。

…どんなに、素敵な一日になるのかしら…

白皙な腕を伸ばすと、不意に鳴り始めた目覚ましのベルを止める。

…もう少し…このまま……

本当は、玲とはイヴの夜に逢いたかったのだが、昨夜は曖の父親の出張の準備で忙しかったのだ。

だからこそ、今日は…そう、今日は、朝から来てくれることになっている。

ずっと…ずっと、一日中、一緒に居てくれるの…

暖はベッドの中で体を丸めると、どうしても溢れ出す微笑みを止めることが出来ずにいた。

…私…こんなに、幸せでいいのかしら…

これほど素敵なクリスマス・プレゼントがあるだろうか。暖は、去年までのクリスマスを楽しんでいた自分が少し信じられなかった。

…だって…去年まで、玲君はいなかったのに…

そう。『去年』という時間の中には、全く玲は存在していなかったのだ。

暖には、それがとても不思議なことに思えた。

…玲君がいないなんて…

そんな時間を過ごす自分を、暖はまるで想像出来ずにいた。

朝の清澄な光の絵筆が、カーテンを黄金色に優しく染めていく。

普段よりも明るいその光に気付き、暖は慌ててベッドから抜け出すと、カーテンを引いていた。

「わ…ああ…」

胸元で細い指先を絡め、大きく目を見開いている。

漆黒の瞳はベランダの手摺りの向こうに広がる銀世界を遠く見下ろしたまま、少しも動こうとはしなかった。

昨夜のうちに降ったのだろうか。

…パパが出かける時には、全然、降ってなかったのに…

暖は素早く着替えを済ますと、焼いたパンとミルクティーを用意した。そして、雪で覆われた美しい景色を眺めることが出来る窓の傍まで来ると、椅子に座ってゆっくりと朝食を楽しみ始める。

…今日は、全てが特別だ。

暖は、久し振りに本当の休日を過ごしているような気がしていた。冷たい風は、暖の素敵な日の為に、今日はその旅を休んでいる。薄く広がる灰色の雲の向こうでは、太陽さえ眩い軌跡を描きなが

らも、雪を溶かさないように気を配っているようだった。

壁に掛かる時計は、漸く九時を知らせてくれる。

曖が喜びで辛抱出来ずに身を動かそうとした途端…

「曖ちゃん！」

待ち望んでいた声が、…玄関の方から愉しげに響いてくる…？

…？…玲君、どうして玄関にいるのかしら…

不思議そうな面持ちのまま、鍵を回してドアを開けると…

「きゃっ…」

あまりの光景に驚いてしまい、曖は取っ手に手を掛けたまま、まるで動けなくなってしまうた。

目の前に、通路を塞ぐほどの大きな雪だるまが立っていたのだ。

彼女の背丈の2倍はあるだろうか…黒く塗られたピンポン球の目の下には、木の枝の口が面白そうに曲がっている。

更に、曖の方へと差し伸べられた両腕には、リボンをかけた小さな箱が載せられていた。

「どう？ 曖ちゃん」

既に毛糸の帽子の先にまで雪を付けている玲が、雪だるまの背後から顔を覗かせる。

「……」

曖は黙ったまま震える指先で小箱を手にとると、そのまま俯いてしまった。

玲の目に、少しだけ不安の色が浮かぶ。

「…驚かせすぎちゃったかな、僕…」

だが、大きく首を横に振ると、曖は顔を上げて素晴らしい笑顔を玲に向けていた。

「ありがとう…」

可愛らしい口許は、それでも、こんな僅かな言葉しか紡ぐことが出来ない…

…もつと、他にも言いたいのだ。こんな自分なんか、こんなにも素敵な贈り物を届けてくれる…そんな玲に、もつともつと、『何

か』を伝えたいのだ…

…だが、曖には何をどのようにして伝えたらいいのか、全く分かんかった。

「良かった！喜んでくれて」

玲は、目の前で嬉しそうに笑ってくれている。

その笑顔は、曖が伝えたいと思っていることを全て受け取ってくれているようにも思えるのだが…そうだとしても、曖は自分の気持ちの何百分の一でもいいから、自分自身で玲に伝えたい…そう願っているのだ。

…でも…それは、我儘なのかしら…

まるで、そんな願いすら分かってくれているかのように、玲の笑顔は優しく深まって、曖をそっと包み込んでくれていた…

「…ありがとう」

心からもう一度そう呟くと、曖は小箱を下駄箱の上に置き、玲の腕を取っていた。

そのまま、中まで誘おうとした時…曖は、両手で包んだ彼の腕を、そっと…心の儘に、そっと…少しだけ強く、握り締めていた。

自分のそんな行為に気付いて、すぐに真っ赤になって俯いてしまふ曖に、玲も淡く頬を上気させながら慌てたように言った。

「中に…入ろうよ、曖ちゃん」

「うん…」

やっとの思いで目を上げる曖と視線を交わすと、互いに嬉しそうな微笑みを零しながら、二人は家の中へと入っていた。

「…開けても、いい…?」

「勿論だよ!」

その言葉に、ゆっくりとプレゼントの箱を開けていく。

どきどきしている曖の目に見えてきたのは、とても可愛い手袋だった。

途端に、驚いた表情で立ち上がると、曖は慌てて机の方へと向か

った。

「曖ちゃん？」

曖は引き出しを開けると、中からこれも小さな箱を取り出している。

優しい色合いの包装紙に包まれたその箱を、曖は何も言えないまま、玲に渡していた。

「……？」

丁寧に包装紙をはがし、中を見る……

「……あれ？」

そんな呟きと共に玲が取り出したのも、また手袋だった。驚いて目を合わせた瞬間、二人とも笑い出してしまう。

笑いながら……玲を見つめながら……曖は心から幸せだった。

そう……どうして、玲がいない時間など、考えたり出来るだろうか……ここに、今、こうして笑い掛けてくれる……玲君が、いないなんて……

……そう、……玲君がいないなんて……

「ねえ、曖ちゃん。せっかく雪が降ったんだし、今日は外に遊びに行こうよ」

曖が淹れてくれた美味しい紅茶を飲み終わると、玲は不意にそう言った。

「でも……」

曖は、玲のことを誰にも知られなくなかった。

……玲君のことは、私だけが知っているの……

そして、それはそのままであって欲しかったのだ。

そんな曖の前で、笑いながら玲は続けている。

「香笹町の南の方に、もう使われてない廃校があるんだよ。そこなら、誰も来ないからね」

その言葉に、不意に曖は頬を上気させてしまった。

……不思議、玲君って、何でも分かってくれるの……

《本当》に嬉しいのだ。

体の中が黄金色の温かな光で満ちていき、思わず身震いしてしまうほどに幸せなのだ…

暖がこくんと頷くのを見て玲が立ち上がると、急に思い出したように暖は言った。

「でも、あの雪だるまさん…」

あのように通路を塞いでいては、他の人の邪魔になるだろう。

でも…玲君が、一生懸命作ってくれたのに…

…嫌われてしまうだろうか。

だが、暖には嘘が吐けないのだ。

そつと心配そうに見上げてくる暖に向かって、玲はにっこりと微笑んでいた。

「うん！ 大丈夫だよ。今、あの雪だるまはこの駐車場に下ろしてあるからね」

そう、心配する必要など無いのだ。

どんなに凄いことでも、玲の言葉なら信じられる。その言葉を疑うことなど、暖には全く思いもよらなかった。

だって…玲君はそれが出来るんだもの…

それだけのこと、なのだ。

そこで素直に立ち上がって、マフラーや贈り物の手袋を身に着け始める。

お昼にと思っていたサンドイッチを籠に入れ、暖は玲が待つてくれているベランダで長靴を履いた。

薄く積もった雪の上に、儂い足跡が残る。あまりにも淡いその影は、すぐに消えてしまうだろう…

玲は暖の小さな体を軽々と抱き上げると言った。

「大丈夫？」

「…うん」

首に腕を回しながら、暖は微かに頷いていた。
恐くなど、ない。

こんなにも近くに玲が居てくれるのだから…

「目は閉じた方がいいよ」

優しい言葉に従って、曖が漆黒の瞳を閉じる。

不意に、耳元で風が歌い始めた。

だが、吹き付けてくる風の冷たささえ、伝わってくる玲の温もりを少しも減じはしない。

曖は心から安心して、玲に全てを任せていた。

…きつと…今、こうしていることが《本当》なの…

そう…きつと、この《本当》は、これからずっと…ずっと、続いてくれるだろう…

曖は、そう信じて疑わなかったのだ…

「着いたよ」

山間の廃校までは、かなりの距離があるはずだが…瞬く間に着いてしまう。

少しだけ、物足りない気持ちで、曖はゆっくりと瞳を開けた。

「ああ…」

感嘆の声が、小さく愛らしい唇の間から零れ出す。

玲は空中に浮かんだ儘、そんな曖を微笑みと共に見守っていた。すっかり壁を黒くしてしまっている小学校の廃墟が、純白の敷布からの照り返しを受けて眩しく輝いている。

最早誰も駆け回ることの無い運動場には、柔らかく雪が重なり、鳥のものらしい小さな細い足跡だけが一直線に続いていた。

陽光に融けて消え入りそうなその足跡の終わりには、巨大なクスノキが色濃い緑葉を纏って聳え立っている。

…この大樹も、暫くすれば水の下になるのだろう…

それでも今は、そんな行く末など案じることなく、この地は白銀の清らかな瞬きで、美しい衣を装っていた。

「…？」

…そう。美しい…

そして、清らかでもある。

でも…

「どうしたの？ 曖ちゃん」

急に真剣な表情になる曖を、玲は驚いて覗き込んでいた。

「うん…この学校…少し、『静か』なの…」

「え？」

確かに、当然ながら誰もいない。

廃校の周りの家にも、もう殆ど人は残っていないはずだ。ダム建設は、あと数ヶ月で始まるのだから…

…ううん…曖ちゃんが言ってるのは…

別の静けさだ。

まるで…『死』のような…

そう言えば、あの何十メートルもの幅で大きな枝を広げているクスノキにしても、全く風のそよぎを歌っていないではないか。

雪の毛布の上に散る光の泡粒も、親しげに揺れ動いてはいるが…

それも、まるで喜びを語っていない気がする。

「…帰る？」

そつと気遣う玲の言葉に、だが曖は首を小さく横に振っていた。

「ううん…せつかく、来たんだもの…」

…玲君が、連れてきてくれたんだもの…

このまま帰ってしまうことは、曖にはとても我儘なことに思えたのだ。

「じゃあ、降りようか」

安心したように言っていると、玲は静かに雪の上へと降りていく。

誰も踏んでいない新しい雪…少しだけ、何故か怖くなって身を震わせながら、曖は玲に導かれるままに足を下ろしていた。

……とつても……柔らかいの……

そのまま立ち尽くして、足下からの感覚に浸っていると、突然、その横で玲が頭を下にして飛び込んできた。

「きゃっ！」

籠を取り落として慌てて駆け寄った曖の耳に、楽しそうな玲の声

が聞こえてくる。

真っ白い雪の粉を顔中に付けながら、玲は曖を見上げて言った。

「柔らかくって、気持ちいいね！」

驚いていた曖も、すぐにくすくすと笑い出し…次には、同じように雪の上にうつ伏せになっていた。

…本当！　とっても気持ちがいいの…優しくて、暖かで…

曖は、自分の家の周りに積もる雪も、今迄は随分と白いものだと思っていた。

だが、このすぐそばにある雪は、もっともつと白いのだ。

「曖ちゃん！」

聞こえてきた呼びかけに顔を上げると、不意に玲は両手で雪をすくって曖に振りかけていた。

「きゃっ…」

だが、曖も普段の『鎧』などすっかり忘れて、すぐに雪の粉を投げ返している。

「うわっ！」

互いに、どんどんと白くなっていく。

その様子が共に面白く、二人は笑いながら暫く雪を掛け合っていた。

その時急に、玲の姿が消えてしまう。

きょとんとして見回す曖の背後で、玲はほんの少しだけ雪を彼女の首筋に付けていた。

「きゃっ！」

その冷たさに驚く曖の姿に玲が大きく笑うと、曖は少し怒ってみせた。

「玲君！」

「あははは」

追いかけてくる曖から逃げ出し、玲は広い運動場を走り始めた。すっかり雪にまみれてしまった子ども達の上に、淡い冬の光が射している。

風も二人に寒さを感じさせないようにと歩みを緩め、あらゆる存在が玲と曖を優しく見守っている。その中で、ジョウビタキだけが舌打ちをするように、可愛くその騒ぎに抗議をしていた。

曖に二、三度雪を投げ掛けられた後で、玲は不意に右手を天に伸ばすと、次には何気なく雪橇を手にしていた。

青いプラスチック製の何の変哲も無い橇だが、それを見た瞬間、曖の胸がどきどきするほどの喜びを伝え始める。

…楽しいのだ。

いや…楽しくなりそうな予感が、確かに、胸元に込み上げてくるのだ。

こんな感覚を、曖は随分と前に失っていた……

「ほら、あの築山で滑ろうよ！」

「うん……！」

まるで葉をそよがせないクスノキのすぐ横が、僅かに盛り上がっている。

二人はその頂点まで駆けていくと、玲は曖を前に乗せて滑り始めた。

嬉しい笑い声が、曖の小さな体から溢れ出す。

心の底から迸る喜びの歌を耳にしながら、玲も大きく笑い出していた。

初めて逢った時には、曖は運動など嫌いだろうと思いつ込んでいた。だが、今、目の前にいる曖は、本当に嬉々として輝いている。

その心の発散は、見守る玲に眩ささえ感じさせていた。

多分…『僕だけ』が……

…それも、玲自身、分かっていた。

そう、玲だけが、曖の心を解放することが出来るのだ。

そのことが、どれほど誇らしく…また、嬉しいことか…

何度も何度も、飽きることなく、築山から雪橇は滑り降りている。水分の少ない雪は豪快な飛沫となって子どもたちの頭上に降り注ぎ、その度に二人は愉快的な笑い声を憚ることなく白銀の乙女達の腕

に運ばせていた。

…この何年もの間、この辺りでは聞かれることの無かった音色を、風の遣いはそつと両手に包み込んで大切に届けていた……

純白に煌く息を吐きながら、玲は雪の上で仰向けになっている。

曖もその横に腰を下ろすと、灰色に霞む太陽の位置を見て、不意に自分がとてもお腹を空かせていることに気が付いた。

慌てて置いたままになっている籠を取りに行こうと腰を浮かせた瞬間、隣で玲が勢いよく跳ね起きていた。

「お腹が空いたね。僕、籠を取ってくるよ」

「でも…」

だが、そんな言葉を聞かずに、玲は校庭の向こう側へと走り出している。

こんなに楽しませてくれているのに…

何だか、悪いことをしているみたいに感じてしまう。

自分が我儘なようで…曖は、少し居心地が悪くなって身を動かしてしまった。

だが、そんな心配などまるで気にせず、玲はすぐに戻ってきてくれる。

…いや、気にはしているのだ。

曖が僅かに複雑な表情を浮かべていると、彼はにこりと笑って安心させるように言った。

「曖ちゃん、僕に気を遣う必要なんて無いよ。僕は、曖ちゃんの為になるのが嬉しいんだからね」

その言葉に真っ赤になって俯くと、曖は小さく頷いていた。

嬉しいのだ…だが、それに甘えるつもりはない。

私も、玲君の為に頑張らないといけないの…

雪の上に座りながら、お昼を手にして二人は互いに色々なことを話し始めていた。

学校のことや、友達のこと…

勿論、悲しいことは今は告げない。珠璃のことなど、とても話せたものではない…

若しも必要なら、その時に語るべきことだ。

魔法瓶の中の紅茶も、すぐに無くなってしまう。温かな飲み物は遊び疲れた体を優しく包み込み、交わされる言葉は胸中を春の息吹きで満たしてくれる…

その会話の途中で、ふと曖は何かを言い掛けたが、急にそれを止めてしまうと真っ赤になって俯いてしまった。

「どうしたの？」

「うつん…きつと、玲君、笑うもの…」

曖は恥ずかしそうに微笑みながら、玲を見詰めていた。

「僕、絶対に曖ちゃんを笑ったりしないよ」

自分だけにではないかも知れないが…玲にそう言ってもらえることが、曖にはとても素敵なことに思えるのだ。

「…うつん」

嬉しそうに頷くと、曖は小さな声で続いていた。

「あのね…玲君。」

…やっぱり、その…サンタクロースさんっているのかしら…」

そう、今日という日…クリスマスの日、こんなにも幸せな贈り物を貰えているのだ…

サンタクロースなんていない、って言う友達もいる。だが、他の誰が、こんな素敵な一日をくれるというのだろう…

だが曖には、自信が無かった。

消え入りそうな呟きに、玲は真剣な表情で頷くと、そんな曖に応えていた。

「そうだね…僕は、きつといると思うよ。」

みんなには、サンタさんが見えないかも知れない。だから、いい、なんて言う人もいるのかも知れない。

でもね、曖ちゃん。僕には見えるんだよ。うつん、曖ちゃんにだって見えるんだ。

すぐに、心の中にサンタさんを思い浮かべることが出来るはずだよ。

それは、何処にでもいるような姿をしてるかも知れない。でも、そのどれもに似ているようで、でも違うんだ。きっと、僕の中のサンタさんと曖ちゃんの中のサンタさんも違うはずだよ。

そんな、他のサンタさんとは少しだけ違ってしているサンタさんが、につこりと笑いかけてくれるのを見たら…ね。いつでも、体中がわくわくして、楽しくなってくるんだ」

玲の笑顔を見詰めながら、曖は小さく頷いていた。

そう…曖にだって、見ることは出来る…

「だからね、曖ちゃん。

そんな気持ちを、間違いない僕や曖ちゃんにプレゼントしてくれるんだから、きっと、本当にサンタさんはいてくれるんだよ。

今、ここにだって居てくれるはずなんだ。

だって…僕は今、とっても幸せな気持ちを貰ってるからね」

その言葉に、曖は目を見開いていた。

玲君も、私と一緒にいて…幸せを感じてくれるの…

少し照れながら、それでも玲は真っ直ぐ自分に向かって、優しく、温かく微笑んでくれている…

曖も心の中に広がる黄金色の輝きの儘に、美しい微笑をその頬に浮かべていた。

薄い灰色の幕を貫いて、不意に黄金の斜光が廃校へと腕を伸ばしてくる。

周囲の雲に輝く火の粉を撒き散らしながら、光の精霊は曖と玲を祝福するかのようになり、二人を優しく抱き込んでいく。

その冬の陽光の波に包まれながら…玲は、その中に、偉大な光の精霊の輝きを…レフリゲリウムの輝きを認めていた……

…《真実》の煌きを……

7 寥落 おわり

8 寥々

純白の敷布に包まれて、子どもが二人、広く寂しい運動場を駆けている。

絶え間無く響き渡る楽しげな笑い声を、辺りを満たす静寂は、微かな戸惑いと共に風に運ばせていた…

「ほら、曖ちゃん。これは今でも使えるよ」

四年生くらいの男の子が叫んでいる。手にしているのは、クリスマスの今日になっても、まだ青葉を残している枝に結ばれた綱だ。太く編まれたその綱を、子どもの小さな手が触れなくなつて、どれほどの時間が流れたことだろう…

だが、それは今でも、深い《静》を纏うクスノキにしっかりと繋がれていた。

傍らに立つ、黒髪を背に流した少女は…小学二年生というところか。流石に怖いのだろう、胸元で細い指先を絡めながら不安そうな瞳で問い掛けている。

「でも…危なくないかしら…？」

「大丈夫！ 見ててごらん」

勿論、玲は綱の安全を確かめている。

垂れ下がる綱を両手で握り締めると、雪上に現れている太い根から彼は軽く飛び上がった。

見事な曲線を描いて、少年の体は少し離れた根元まで移動する。

その様子は、曖にさえも簡単に思えるほど、全く力や技を必要としない、軽々としたものに見えた。

「どう？ やってみようよ」

綱を手にして駆け戻ってくる玲の笑顔に、曖はまだ少し不安ながらも頷いていた。

実際に手にしてみると、とても荒く編まれた綱だ。こんなものにしがみついて、飛ぶのだろうか…

玲の手に誘われてクスノキの根に登りながら、曖はふと、そんな彼に従っている自分に気付いて驚いていた。

…私、…今迄だったら、きっと…

いや…今でも、一人だったらこんなことをしようとは思わなかっただろう。

自分の白い指先を取ってくれているのが…誘ってくれているのが玲君だから…

……そう、玲君と一緒にいる『時間』だから…私、…こんなに楽しく遊べるの……

…危険？

玲君が、大丈夫だって、言ってくれてるんだもの…危険なんて、無いわ。

それが、曖にとっての《真実》なのだ。

ふと我に返ると、既に指先は、玲に教わるままにきつく綱を握り締めている。

「大丈夫だからね。怖がって、手を緩めたら駄目だよ」

「…うん」

少しだけ…深呼吸をしてみる。

そんな曖の様子に微笑みながら、玲は彼女が落ち着いたのを見て優しく言った。

「いくよ？」

「…うん」

「じゃあ…一、二の三！」

「きゃっ…」

飛び出した瞬間は、やはり声を上げてしまう。

力一杯、綱にしがみつきながら、曖は目を閉じると虚空に身を任せていた。

…長い間、寒風を感じていた気がする。

だが、実際にはすぐに温かな腕が曖の体を抱き止めてくれていた。愉快的な笑い声が、すぐ耳元で明るい音色を奏でている。

「駄目だよ、曖ちゃん！ 折角飛んでるのに、ずっと目を閉じてたら何も見えないよ」

「…でも、…やっぱり…」

大きな根に下ろしてもらいながら、曖は小さくなってそう答えていた。

玲はすぐにつこりと笑い掛けると、綱を持ちながら言った。

「じゃあ、一緒に飛ぼうか」

「え？」

だが確かめる前に、曖の儚げな体は、既に玲の右手一つで抱えられていた。

慌てて、玲の首に腕を回す。

「しっかり、掴まっててね！」

左手だけで綱を握ると、玲は足先で軽くクスノキを蹴っていた。目を閉じる間も無く、空中へ飛び出している。

すぐ横を流れるクスノキの木肌を見ながら、曖はもっと近くにある温かな存在を、僅かな恥じらいと共に感じていた。

あつと言つ間に、向かいの根が近付き、玲が降り立つ。

だが、曖は離れようとはせず、そのまま顔を隠してそつと囁いていた。

「もう少し…このまま、飛んでいて…」

「うん！ いいよ」

微かに頬を上気させながらも、玲はそのまま曖を抱いて幾度か宙に飛び出していた。

歌を忘れた緑の枝葉が、そんな二人を見下ろしている。

優しく包み込むように…光の泡粒を流している…

愛おしさに溢れながらも…だが、そこにはやはり、静寂が深く纏わりついていた…

白い布地に、茜色が降り注いでいる。

曖は玲が寝転ぶ横で、山並の上に広がる夕焼け空を遠く眺めなが

ら膝を抱えていた。

…不思議なの…私が、こんなにも楽しく遊べるなんて…

少し、風が出てきたようだ。すぐ傍にあるクスノキから、微かな葉擦れが届けられる。

だが…曖は、やはりその音色が無機質なものに思えて仕方が無かった。

風は、こんなにも優しいのに…

そう、本当に優しい微風だ。横になろうとしている曖の体をそつと静かに包み込み、雪の柔らかな照り返しと共に温かく見守っている。

まるで…そう、まるで…

曖は、頭の中でしか創造出来無かった『母親』を、その雪と風に感じ取っていた。

何も、音がしなくなる。

玲も、黙って瞳を閉じている。

静かな…そして、深い慈愛に満ちた時間が、夕暮れと共に黄金に煌く流れを下っていた。

「曖ちゃん、ちょっと廃校を覗いてみようよ」

帰ろうと籠の用意をしていた曖は、玲の言葉にひどく驚いてしまった。

「え？ でも…」

昼間とは違い、今は青い闇に包まれ、木造の廃墟は少し不気味で近寄り難く見えている。

…だが、すぐ隣には、安心させるように微笑む玲の姿もある。

「ほら！」

迷っている曖の細い腕を取ると、玲は先に立って廃校の入り口へと駆け出した。

「あつ…！」

慌てて、曖も走り出す。

近づく校舎の板の壁は随分と黒ずみ、窓ガラスも所々で割れている。

その奥には、…ぼんやりとした闇が霧のように漂っている。

曖が声を出そうとする前に、だが、玲はまるで躊躇いもなく玄関を開けていた。

扉は音も無く開かれていく。その静けさが今は少し奇妙に感じられ、曖は正直に微かに身を震わせてしまった。

左腕に縋ってくる曖を感じながら、玲は元気に中へと入っていく。勿論、彼には分かっているのだ。この廃墟の中に、邪気は感じられないと。だからこそ、平気で曖を誘って入っているのだ。

「曖ちゃん、大丈夫だからね。怖いものなんて、何も無いから」

「…うん」

さすがにそう言われても、不安な表情は隠せない。

もつとも、心の何処かに、まだ少し玲と一緒に居られる時間が延びたことを喜ぶ光がある。

そのことに気付いて、曖は驚いてしまった。

…私…あまり、怖がってないのかも…

長い間、使われることの無かった廊下には、塵一つ落ちていない。暗がり広がりつつある中を、並んで歩いていると、不意に背後でがたつ！ と大きな音がした。

「きゃっ…」

思わず、力一杯、玲にしがみついてしまう。

そんな曖の細い肩を抱きながら、玲は鋭い視線を後ろに滑らせていた。

邪な気配は無かったが…廊下の先には、玄関を入ってきたらしい一人の幼女の姿が見えていた。

幼女は今日の雪のような純白の衣を纏っており、その短い髪のは肩の上で綺麗に切り揃えられている。

彼女は、まるで玲や曖のことになど気が付いていないかのように、すぐ傍の教室の扉を開けて入ってしまった。

「あの子…」

戸惑う声で、曖が呟いている。

自分よりも一つか二つ、小さな女の子の姿に、曖は怖がっていいのかわからずにいたのだ。

玲は一瞬、真剣な表情を浮かべたものの、すぐに笑顔になると曖の顔を覗き込んで言った。

「大丈夫、幽霊じゃないよ。ちょっと、黙って覗いてみようか」

玲の横に立って、曖もそっと教室の中を見てみる。その少しだけ震える肩に、玲は黙って手を添えていた。

大丈夫、大丈夫だからね…

…まるで、そう言ってくれているようだ。

その温もりを疑いなどせず、曖は教室の中の少女の姿を目で追っていた。

白い衣を揺らしながら、彼女は並ぶ机の間を縫って走り回っている。

かと思うと、近くにあったイスの背に手をかけ、がたがたと揺らし始めた。

両手で掴む椅子の動きは次第に激しくなり、それに連れて少女自身も上下に飛び跳ねている。床や机に椅子がぶつかり、大きな音が宵の廃校の中に響き渡っていた。

だがすぐに飽きてしまうと、今度は四つん這いになって机の下を潜り始めている。

時折頭をぶつけてしまっているが、それすらも楽しいのだろう。明るい笑い声を上げている…

先程までの恐怖や戸惑いも忘れ、曖はそんな愛らしい少女の仕草に思わず優しい微笑みを浮かべていた。

そこまでの年齢差は無いのだが、あの女の子は、どうしてあそこまで無邪気に遊べるのだろう…

曖は、その少女の存在そのものには全く不思議を感じていなかった。暫くすれば水の下になるこの辺りに、どんな子どもが残ってい

るはずがないのだが…

教室の中の女の子は、今度は黒板に何かを見つけたらしい。薄闇に青く染まる右手が差し上げたのは…チョークだろうか。

すぐに、白い線が黒板に引かれていく。

一気に黒板の端まで走った後、再び駆け戻りながら、幾度もそれを繰り返す…

暫くして黒板から離れると、自分が描いた無数の白線を見て、少女は飛び跳ねながら大きく笑い声を上げていた。

玲と曖が見守る中、次には女の子は机にまで落書きを始めている。一つの机の上ではとてもではないが収まらず、次々と机を移動しては巨大な絵を描き出していく。

やがてその絵の中には、床や壁までが飲み込まれてしまった。チョークの先が、ふと、止まる。

だが休む間も無く、今度は黒板消しに手を伸ばしていた。

自分が描いた線が消えていく…そのことがとても不思議で面白く消している最中に落ちてくる白い粉を見ては、力一杯息を吹きかけたりして遊んでいた。

巻き上がる白い粉に服や頭が汚れても、少女は決して笑みを絶やしはしない。

小さく丸い指先が黒板消しを押すたびに、粉が吹き出すのを見て喜んでいたかと思うと、次の瞬間、彼女はそれを床に叩きつけていた。

湧き上がる白い粉の乱舞に、大きな笑い声が重なる。

その声は、何も聞こえないはずの廃校の中に響き渡っていた…

「…不思議な子ね…」

これだけの悪戯を見せられたなら、さすがの曖も普段なら眉を顰めていたことだろう。

だが、今、目の前ではしゃいでいる少女を、誰が叱れようか。

彼女は、心の底から、純粹に愉しんでいる。遠慮や配慮など無く、ただ自分の心の儘に行動しているのだ。

そこに、悪気などまるで無い。そんな心の動きそのものを、この幼女は理解することなど出来ないだろう。

「玲君…」

にこやかに笑みを浮かべている彼なら、きっとあの子のことも知っているはずだ。

曖が女の子から視線を外して玲を見た途端、教室の中から不意にしわがれた声が聞こえてきた。

「やれやれ、随分と騒がしいのぉ」

あまりのことに、思わず可愛い唇の間からは悲鳴が飛び出してしまった。

一体、どうやって教室の中に入ったというのだ。誰も入り口を開けていないし、先程までは間違いなく幼女以外には誰も居なかった…刹那、玲の漆黒の瞳からも幼さが消え失せる。

教室の中の女の子は、不意に現れた老人を見ても動じることなく、嬉しそうに笑うと抱きつこうとしていた。

その途端、教室の中を埋め尽くしていた白線や飛び散る白い粉が消えてしまう。

幼女に白髪を掴まれた老人は、その時、突然優しく静かな微笑みを曖に向けると、驚く少女に話しかけていた。

「どうぞ、入ってきなされ」

逆らう必要は無い。

曖は、既にこの老人のことも好きになりかけていたのだ。

玲はそんな曖の手を引くと、教室の中に入っていた。

その瞳には、再び幼さが戻っている…

幼女は二人のことなど眼中に無く、細い腕で老人の首に抱きついては喜びを伝え続けている。

その様子を、曖はどこか眩しそうに目を細めながら、そっと尋ねていた。

「あの…その子…お爺ちゃんの…」

だが、初めて会った人には、そこまでが曖の限界だった。

すぐに、玲の後ろに顔を隠してしまう。

老人はそんな暖の仕草に温かな笑い声を上げると、白衣の幼女を膝に抱きながら応えていた。

「いいや。この子の名前は知っておるんじやがの…この子は、『無邪気』と言っんじや」

「無邪気…？」

暖の呟きに、老人は大きく頷いていた。

「そう。そして、この子の親は『人間』と言っんじやよ…」

…どうか、覚えておいてくれんかのお。

何処におつても、この子連れれた『人間』を見かけたら、そつと微笑んでやつてはくれまいか。

優しく見守つて…困つておれば、助けてあげて欲しい。

残念なことじゃが、今の世は、この子を育てることさえ難しいんじやよ…育むどころか、安易に捨ててしまふ者もあるんじや…

この子連れれておること、悲しみ、苦しむ『人間』を見かけたら…そつと、慰めて…励ましてやつてもらいたいんじやよ…」

「僕は、きつとそうするよ。…きつと、ね」

静かに応える玲の背中、暖も小さくはあつたが真摯に頷いている。

「ありがとう…」

老人の深く柔らかい微笑みが、暖の心に安らぎを与えてくれる。

膝の上の女の子も、何事かは分からないものの、ただ老人が満足したことだけを感じて満足げに笑い声を上げていた。

皺の引かれた手でゆっくりと幼女の髪を撫でてやりながら、老人は瞳を半ば閉じて続いていた。

「…悲しいもんじや。」

この辺りには、もう、この子連れれておる『人間』はおらんようになつてしまつた…

それもこれも、この地が水の下に沈んでしまつからじゃが…

…けれど…な」

ふと、言葉が止まる。

曖と玲は、ただ黙って続きを待っていた。

「…本当に悲しいのは、この学校が『死んで』しまっておることじゃ…」

「『死んで』…」

曖は、その言葉に微かに身を震わせてしまった。

そう…この廃校に来た時、確かに曖は『それ』を感じたのだ…

「そう…未だ壊されずにおりながら、この学校は既に死んでおるんじゃない…」

お嬢さん。『物』とて『存在』なんじゃよ。それは生きてもおれば、育ちもする。ただ、それには必要なものがある…それが『人間の『心』じゃ。』

『心』によつて、『物』は生きて成長していく…

じゃが、この学校には、最早見守ってくれる『心』が無くなつてもうた…今ではもう、誰もこの学校のことを想つてはくれんのだや…

人の『心』の中における『死』こそ、その存在の『死』じゃ。

例え、校舎や運動場が残っておろうとも、それらは紛れもなく死んでおるんじゃない…」

「…ううん。まだ、本当には『死んで』ないよね。お爺さん」

静かに…幾分、窘めるように、玲が告げている。

その深く、重い口調に曖は少し驚いていた。

…玲君…とつても…

そう…厳しいのだ。だが、その奥底には黄金色の優しさが秘められている…

「…確かに、そうかも知れん。

それでも、残った時間など、短いもんじゃ…」

老人の呟きに、今迄笑みを絶やさなかった幼女が、不意に悲しみに瞳を翳らせてしまった。

そして、今にも泣き出しそうな震える声で、老人を見上げて尋ね

ている…

「…お爺ちゃん、…悲しい？」

「……」

思いやりある問いかけに対し、老人は何も言わなかった：

玲が口を開きかけた時、不意に一陣の突風が窓ガラスにぶつかってきた。

気付けば、辺りはもうすっかり暗くなっている。だが、自分達だけは青い闇にぼんやりと照らされていることに気が付いて、曖は驚いていた。

不思議さが怖さに変わる直前、彼女の耳に微かな歌が聞こえてきた。

……？

風と共に、窓の隙間を抜けて教室へと流れ込んでくる…

本当に微かで…とても澄んだ音色だ。無垢な少女の歌声…それは銀の光を呈する風に乗る、言の葉を送り届けてくれる…

「まさか…」

老人が驚きで腰を浮かしかけると同時に、『無邪気』は喜びの声を上げると膝から飛び出し、次には教室の壁を通り抜けて見えなくなってしまった。

だが、そんな二人の様子も、曖の目には殆ど映っていない。

彼女は、すっかり歌に心を奪われていたのだ。

残念ながら、少女の言葉の意味は分からない…

…？ …少しだけ…木の葉の音がするの……

曖の様子を優しく見守りながら、玲だけが落ち着いて身動き一つ出来ずにいる老人に声を掛けていた。

「ほら、あのクスノキは『生きて』るんだよ。…ううん、甦ったんだ」

「信じられん…里美が…」

「…里美…？」

軽やかだが、何処かに悲しみが秘められている…その音律に瞳を

濡らしながら、我に返ると曖は尋ねていた。

そんな曖を、そつと支えながら、玲は近くの椅子に座らせる。

そして、自分も傍に椅子を寄せると、腰を下ろしながら言った。

「話してくれますね？」

その催促に、再び腰を落ち着けると、老人は微かに声を震わせながら話し出していた。

「あの『無邪気』もそうじゃ…もともとは、里美が連れておったんじゃよ…」

本当に…どんな存在にも優しい子じゃった。見えておらんのに…そんな存在にまでも、優しくったんじゃよ…

いつでも明るく振る舞って…どんなに悲しいことも、あの子がそばにおるだけで、春のような心地になれたんじゃ。

歌と、無邪気な笑顔と、愛らしい仕草と…

そつ…ここにおった者は皆、誰もが里美を可愛がって…大切に思っっておったんじゃよ…

ところが、何かが狂ってしまいおった…

気付けば、山の中では測量が始まっておったんじゃ。

…この地に水が入ってくる…今迄、そこにあつて『当然』だと思っっておった存在が、全て手の届かない所へと消え去ってしまう…

里美は辛かったんじゃ。

いや…もつと悲しいこともあつたんじゃ…」

冷たい風に乗って、優しく静かな歌が、クスノキから流れてくる。今では、その歌は悲しみを秘めることなく迸らせ、曖は寒さだけでは無い震えを心で…全身で受け止めていた。

「この地は、醜い闇に覆われてしもつた…」

私利私欲に酔いしれた者がはびこり、まるで空気そのものがあまりの暗さに沈み込んでしまうようじゃった。

それでも…そんな中でも、里美はいつもと変わらず、明るく努めようとしておった。あんなにも楽しかった人との交わりが、これ程変わってしまうなどと、あの子には信じられなかったんじゃよ…

現実には、あの子に敵しかつた。歌も微笑みも忘れた人々は、里美の心に悲しみしか植え付けなんだ。

それでも…それでも、里美は願っておったんじゃ。この地が、再び明るく楽しい所になるように…と。

それからじゃ…何日も、何日も、あの子がクスノキの下に立つようになつたのは。

あのクスノキは、この辺りで最も大切にされてきたものじゃ。

次第に少なくなっていく子ども達からも離れ、里美はクスノキの下に立つては、真剣に…心から願っておった。

この木から歌を送り届けることが出来れば…いつまでも、いつまでも、ここから歌が聞こえてくれば…この地はまた、元通りに明るく楽しい所に変わるじやろう…

…あの子は、そう信じて疑わなんだ。

自分の歌だけでは、力が足りない…

大切にされてきたクスノキから歌が流れ出せば、きっと、皆も楽しい暮らしを思い出してくれる…」

老人は、無邪気な少女の願いに、言葉を詰まらせてしまった。

…だが、暫しの沈黙の後、再びゆつくりと話し始める…

「…ある夜のことじゃ。

里美は、家を抜け出して、この運動場へとやってきた。

何故かは分らん。風に誘われたのかも知れんし、心に呼びかける声があつたのかも知れん…

いずれにしても、あの子は黙ってクスノキの下に立つと、そつと小さな手を木肌に添えて待っておったんじゃ…

星の綺麗な夜じゃつた…風も、微かに木の葉を揺らすだけで…とても静かな夜じゃつた…

あらゆる存在が見ておつた。

そつ…あらゆるものが、あの子の清らかで澄んだ心を、温かく包み込んでおつたんじゃよ…」

不意に、風が止まる。

曖は驚いて窓の外に目を向けていた。

深く、厚い夜の帳が下りる中…だが、曖の目には大きなクスノキがまだ見えていた。

根元が青白く輝いている…その周りを、白い小さな煌きが飛び跳ねて…

「…いや、…止めないで…」

無邪気な少女の白い輝きが…次第に薄れていく…

「いや…！」

涙が溢れ出す…

「いや…いや…」

呟き続ける曖の隣から、不意に力強い言葉が聞こえてきた。

「そう。まだ、消える時じゃないよ」

それが、聞き慣れているはずの玲の声だと知って、曖はひどく驚いてしまった。それは、とても普段の玲からは想像出来ない…深くて遠いものだったのだ。

（玲君…）

だが、どれ程遠く感じる言葉でも、その連なりには優しさがあり…曖に対する思いやりがある。

そう、決して、玲は遠い存在になったわけではない…

…だって、…こうして、私に笑いかけてくれてるもの…

胸の奥で、喜びに鼓動が大きく鳴り響く。

こんな玲と共にいることが出来る『事実』に…《本当》に、曖は幸せを感じていたのだ…

ふと気付けば、風は再び微かな歌声を運んできている。

その歌に耳を傾けながら、老人も再び話し始めていた。

「里美がおらんって…誰もが悲しい思いをした。

歌い始めたクスノキの想いに、明るい心を取り戻した者もおったのはおったんじゃないが…

それでも…多くの人の心は変わらんかった。

皆、少しずつここから去っていき…この学校からも子ども達の笑

い声が消えてしまったんじゃ……

それでも…それでもじゃ。里美のことを…クスノキの歌のことを誰かが覚えておる間は、あの木も喜びを歌にしておったんじゃよ。それが、次第に悲しみの歌になり…やがては『死んで』しまったんじゃ……」

重い…あまりにも重く深い沈黙が、教室の中に満ちていく。

曖のすすり泣きだけが聞こえる中、最早風はなにものも届けることはなかった……

「違うよ。やつぱり、『死んで』なんかないよ」

そつと、玲が立ち上がる。

そして、涙を流す曖の肩に力強く手を置きながら…《全て》に語りかけていた。

「皆はまだ、覚えてるんだから。」

覚え続けるのは、人間じゃなくてもいいんだよ。

水の下になることは止まらないかも知れない…覚えている存在も、同じように水の下になるのかも知れない…

でも、それは《全て》ではないよ。

それに…僕や曖ちゃんだって、きつと、ずっと、この廃校とクスノキの歌を覚えているよ。

だから…『死』を恐れたり、悲しんだりしなくてもいいんだ。

覚えている心の中で、皆は『生きて』いけるんだから…

その『生』だって、きつと《本当》の『生』なんだから…ね」

穏やかな玲の言葉に、老人は俯いたまま、何度も何度も小さく頷き続けていた……

すっかり晴れ上がったようだ。

満天に鑲められた宝石の粒と、半ばを暗くした月に照らされながら、クスノキは雪の大地に淡い泡沫を描き出しては風に揺らしている。

その下に立つ玲の体から、不意に黄金色の光が放たれ、闇を裂き

…次には『力』の高まりと共に、曖を抱えた少年の姿は消えていた。
微かな歌を背に…純白の衣を纏う少女と、静かに佇む老人に見送
られながら…最後の子ども達は消えてしまったのだ……

……数年後、月は豊かな水の面を、その銀色の光で照らし出して
いた……

8 寥々 おわり

9 愛而不見・かくれてみえず・

その日は、随分とツバメが騒いでいた。

「じゃあ、母さん」

「ええ、行つてらっしゃい」

そんな言葉に送られて、学校に向かおうと玄関を飛び出した瞬間……俺は、その子を見付けていた。

最初に目に入ってきたのは、揺れる栗色の豊かな髪だった。

恥ずかしげに少し俯きながら、俺を見上げてくる……その青味がかった銀色の瞳に見つめられて、俺は慌てたように視線を逸らしていた。

……胸の奥の方で……『珠璃』が、温かな……黄金色の閃光を放っている……？

「な、何か用……か？」

同じ、中学生くらいに見える。

勿論、こんな朝早くだ。何か用事はあるのだろう。

乱暴でしかない俺の問いかけに、その子は力無く……それでも、綺麗な微笑みで応えてくれた。

「はい……私、あの……今日から、この宮木神社でお世話になりたくて来たのですが……」

「え？」

思いもしなかったその言葉に驚いていると、突然、後ろから父さんの声が聞こえてきた。

「君は……」

父さんも……驚いている……？

「何故、このような所まで……」

「……」

驚愕と……警戒と……？

その二つの感情を内に秘めた父さんの言葉に、その子は何も言わ

ず、ただ立ち尽くしていた。

「龍真、まだ行かないの？」

落ち着いた母さんの声がする。

その声に背中を押されて、俺は軽くその子に目礼をすると急いで駆け出していた。

…その子の姿を、もう一度だけ、盗み見て。

普通にしようとしても、何処からか高貴な雰囲気が漂い出てくる…そんな姿だ。

俺は、こんな女の子を、今迄に見たことが無かった。だからだろうか…妙に、胸が喜びに高鳴るのは……

この日からだった。

その子…ローニアが、俺の家に住むようになったのは。

.....

「あれ？ 今日随分早いんだね」

教室に入ってきた玲は、そう言う窓際に座っている龍真の所へと歩み寄っていた。

中学校の新しい制服が、窮屈そうに見える。

「まあな。たまにはいいもんさ」

龍真は片目を瞑ってみせると、どうしても込み上げてくる欠伸を口で噛み殺していた。

そんな様子に玲が軽く笑い声を上げていると、大きく元気な声が教室に飛び込んでくる。

「どうしたのよ！ こんなに早いなんて」

そんな言葉に、うんざりしながら龍真は肩を竦めていた。

「つたく、これじゃ小学校の時と、何も変わってないじゃないか」

「それは仕方無いだろう。校区が一緒なんだから」

綾子と並んで入ってきた和輝は、落ち着いた優しい笑みを浮かべている。

「そりゃそうだけだな。こんなうるさい奴と、また同じクラスになるとは思わなかったぜ」

「うるさい奴って何よ！」

綾子が大きく脹れている。以前なら、ここで龍真に殴りかかっていただろうが…

玲は、和輝と綾子を見ながら、微かに笑みを浮かべていた。

小学生の頃は、綾子は幼なじみで近所に住む龍真と一緒に登下校をしていた。それが、今では遠回りになることを承知で、和輝の家まで毎朝迎えに行っているのだ。

小学校を卒業したその日、綾子は玲と龍真の励ましと協力を受けて、和輝に告白していた。後押しした二人も驚いたことに、和輝は素直に彼女の告白を受け入れていた。

…ひよつとすると、和輝には綾子の真剣な想いが伝わってないかも知れないな。

後になって龍真はそう言っていたが、玲にはとてもそうは思えなかった。

結局、和輝は綾子の想いを真摯に受け止めていたのだ。

この日以来、二人はいつも共に行動をし、綾子は晴れて和輝の彼女として、想いを隠す事無く振る舞えるようになっていた。

綾子にとって、それがどれだけ嬉しいことだったか……

「どうしたのよ、玲君」

綾子の不思議そうな声に、玲は我に返ると慌てて口を開きかけた。その時、教室の入り口から興奮した口調の男の子が駆け込んでくる。

「おい！ 今日、転校生が来るんだってよ」

教室の皆が騒ぎ出す中、突然窓の外を眺め始めた龍真を見て、玲は笑い声を上げていた。

「何だ、噂の女の子が来るんだね」

「ローニアなの？」

有無を言わせぬ綾子の問いに強制されて、龍真は渋々と頷いた。
「それで早く来たのか」

龍真にとって、綾子とならともかく、見知らぬ女の子と並んで登校するところを見られるのは、あまりに恥ずかしいことだろう。

「どんな子なんだろうね」

龍真以外、実際にローニアに会ったことがあるのは綾子だけだ。

「とっても不思議な子よ。綺麗で、物静かなの」

「：そうだな、綾子とはまるっきり違うぜ」

「悪かったわね！ あたしだって、しようと思えば静かに出来るんだから」

憤慨する綾子の言葉に、玲と龍真は当然のこと、和輝までもが首を横に振っている。

「和輝君！」

「あははは。ごめん、綾子」

「もう！」

穏やかな眼差しに優しく見つめられて：どうしようもないくらい頬を上気させた綾子は、腕を組むと横を向いてしまった。

やがて、朝礼のチャイムが鳴り響く。

皆が一斉に席に戻り、期待した眼差しで入り口を見つめる。

待つほどもなく、担任に連れられて一人の少女が俯き加減に入ってきた。

見事な栗色の髪が目立つが：最も惹きつけられるのは、伏し目がちな、その碧を含む銀色の瞳だ。

だが、そんな彼女の姿を見るや否や、玲は全身に緊張を走らせていた。

：漆黒の瞳が細められ、内の『力』が静かに高められていく：
胸中に如意宝珠を受けた龍真には、玲の『力』の動きを察することが出来ていた。だが、彼には玲の警戒が解せない。

：どうしたって言うんだ？ 玲の奴。

感情の失せた冷たい双眸に気付き、ローニアも一瞬目を上げると玲に視線を送る。

深く静かな流れだけを感じる…

…少なくとも、騒乱が目的じゃないみたいだね…

なら、彼女は一体、何の目的でこの世界へ来たのだろう。

思考の泉へと沈み込む寸前、担任が玲に向かって話しかけていた。「川瀬の後ろが空いているな。川瀬、机を倉庫まで取りに行ってくれないか」

「あ、はい！」

すぐに席を立つと、教室から出る。それを見て、ローニアも頼んでいた。

「私も、行っても構わないでしょうか…？ 一人では、大変だと思います…」

「そうだな。椅子くらい、運んでやってくれ」

その言葉に急いでローニアも廊下に出る。

そこで当然のように待っていた玲に小さく頷くと、二人は一緒に倉庫へと歩き出していた。

「…一つだけ、訊いてもいいかな」

ローニアを振り向きもせず、静かに尋ねる。

「…はい」

応えてくるのは…儚く消え入りそうな声だ。

たおやかさと幼さと…奇妙に入り交じる彼女の振る舞いに、玲は思わず知らず微かな笑みを浮かべてしまっていた。

「どうして、冥界の鬼が…魄鬼はくきの君が、この世界に来たの？ それも、わざわざ、君の『力』が萎縮されてしまう宮木の地に…」

「それは…」

頬を染めると、俯いている。

歩みを止めてしまった彼女の横顔を、玲は少し驚いた表情で見つめていた。

…まるで…人間みたいだね…

どうしても言葉を紡ぐことが出来ずにいるローニアに、玲は『力』を弱めると軽く笑い声を上げていた。

「もういいよ。話せないみたいだからね。」

君は、きつと悪いことをしに来たんじゃないと思うよ。

でも…」

不意に、『力』を高める。

ローニアは、真剣な面持ちでそんな玲を見つめていた。

「龍真や皆に何かしたら、僕は絶対に赦さないよ」

「…はい」

恥ずかしさも忘れて、ローニアは大きく頷いている。

玲はそんな彼女に再び『力』を弱めて笑いかけると、普段通りの声で言った。

「さあ、早く机を取りに行こうよ。授業が始まるからね！」

.....

「はい、これ……」

呟くようにそう言っ、真っ赤になりながら朋也が差し出しているのは、一通の手紙だった。

「え…？」

曖は戸惑いながら…どうしたらいいのか分からず、ただ頬を赤らめて俯いてしまう。

…教えてくれた子もいたが、まさか本当だとは思っていなかった。そう…まさか、悪戯者として五年生の間でも名高い彼が、自分のことを好きだとは……

すぐに、曖の脳裏には玲の顔が浮かんでくる…

「俺、本当に曖ちゃんのことを好きなんだ。来週までに、返事をくれないかな…」

そんな言葉も、耳には入っていない……

… 暖は、ただ心の中で彷徨い続けていた。

玲君は…

… 玲君は…私のことを…

そう、…『好き』、…なの…？

私は…私は……

…『当然』だった。

胸を高鳴らせながら、ぼんやりとしている間に、暖はその手紙を無理やり握らされていた。

慌てて目を上げて、もうそこに朋也の姿は無い。

勿論、断らなくてはならない。

…でも…

……

… 暖は、玲の想いを確かめなくなっていたのだ……

やがて、普段と全く変わらぬ様子で、水曜日の夜がやって来る。

十時になるのを待ちながら… 暖は自分でも気付かぬ間に、何度も朋也からの手紙が入っている引き出しを盗み見していた。

何故だろう… とても悪いことをしている気がする。

だって、… 玲君は……

…そう。

玲の気持ちは分かっているのだ。

これでは、まるで… 玲のことを信じていないかのようではないか…

玲君……

それでも、… 信じてはいても、やはり、不安はあるのだ。

若しかしたら…そう、若しかしたら、… 玲君は私のことを……

……『友達』としてしか、見てくれないのかも知れない……

そんなことは無いと、強く心の中で否定しながらも… それでも、暖は、一抹の不安を感じずにいらなかったのだ……

近付く夏へと、大気の温もりは着実に増してきている。

先週の逢瀬の時よりも随分と暖かくなった空を、玲は音も無く滑るように飛んでいた。

中学校に入ってから水曜日の十時に曖の所へ行くと決めていたのだが、彼はその行き帰りも含めて、今では殆ど『飛ぶ』ことを止めていた。

『力』を使うこと自体、稀になってきている。

幼い頃から親しんでいる『力』に違和感はないが、それでも、これは本来なら誰も持つはずのない『力』だ。今のように、時折、僅かに使うことはあっても、それも危険な場合を除いて、これからは止めていこうと考えている。

眼下に広がる漆黒の闇に紛れ、仄かな薫りが風に運ばれてくる。

香笹だ。

その脇には、今も、夢鏡ノ泉が深く重い静寂を纏いながら、横たわっていることだろう…

そう…危機的な状況があれば、躊躇うことはない。

その為の『力』だ。

妖夢界に思いを巡らせながら、町を分ける頂きを越えた瞬間、視界に入ってきた光景に驚いて玲は空中で停まってしまった。

円に近い天体の表面で反射された太陽の光は、淡く青い月明かりとなつて足下の巨大な掘削機を照らしている。その機械に踏み潰されて、太い丸太が幾本も赤黒い地肌に転がっていた。

「そんな…」

確かに、先週、ここを通った時には鉄の柵が並べられていたが…だが、たったの一週間で、ここまで野山を破壊してしまうとは…

去年まで、この辺りでは見事なヤマツツジが森陰に美しい花を咲かせていたのだ。

「何か、凄く……」

…醜いね」

地肌が、ではない。それを為した存在が、だ。

剥き出しにされた山肌は、見る者に悲しみを植え付けていく。玲は急いで顔を背けると、曖の家に向かって再び飛び始めた。

月は、全てを等しく銀の光で塗り込めていく。大地の傷を覆い隠そうとするその漣を、音を失った風が乱すことはもう無い。

…先週までは、確かに葉擦れを運んでいた風は、もう何も運ばず、何も揺らさない……

そつと、ガラス戸が叩かれる…

「曖ちゃん！」

明るくて元気な、…心から待ち焦がれていた声がする。

曖は一つ深呼吸をした後、そつと静かに窓を開けていた。

「…！ どうしたの？」

不安が色濃く現れている曖の表情に、玲は戸惑いながら尋ねていった。

悲しい…のかな？ それとも…何かを怖がってるのかな…

「玲君、私…」

…本当に、言ってしまうの…？

だが、『声』は勝手にその小さく愛らしい唇から零れ出していた。

「男の子に…その、…ラブレターを…貰ったの…」

次第に消え入りそうになる曖の言葉に…

…玲は、につこりと微笑むと嬉しそうに言ったのだ……

「良かったね、曖ちゃん！ やっぱ、曖ちゃんを好きになってくれる人はいるんだよ」

心から喜んでるように見える…

そんな玲の言葉に、曖はびくつと体を震わせると、掠れた声で続けた。

「…玲、玲君は…誰か、……『他の人』、が…私を、……『好き』

になっても……」

「良いことだよ！　だって、好きになってもらうことって、とっても……」

だが、その言葉は途中で断ち切られてしまった。

曖が突然、両手で顔を隠すと泣き始めたのだ。

玲は、そんな曖の振る舞いにひどく驚いてしまった。

「曖……ちゃん？」

思ってもいなかった玲の言葉に、曖は最早何も聞こうとはしなかった。

……決して、自分以外の人には玲を『好き』になつて欲しくない……

玲君は、『私だけ』の……

そう思っているのに……願っているのに……

……なのに……

「……帰って……」

「え？」

玲は自分が耳にした言葉を信じられず、思わず問い返していた。

「……お願い……帰って……」

……もう、……来ないで……」

玲君だけは……信じていたのに……

……曖は、この瞬間から《全て》を信じることをやめてしまった。

今迄信じ、頼ってきた玲も……結局……

「……曖ちゃん……」

茫然と立ち尽くしている玲の目の前で、曖は声も出さずに泣きながら窓を閉めてしまった。

……玲には、それを止めることが出来無かった。

ガラスの向こう側、室内では灯りを消すとベッドに倒れ込み咽び泣いている曖の姿が見える。

今迄、幾度、そんな彼女を慰めてきただろう……儚く、消え入りそうな細い肩を、幾度、支えてきただろう……

玲は、今起こっていることがとても信じられなかった。

慣れ親しんだ机や椅子、…このベランダも、今日で見るのが最後になる……

「嫌だよ…そんなの…」

だが、今の曖に、何が言えるというのだろう。

…いや、これから先、曖と話すことなどあるのだろうか……

玲には分かっていた。

曖は今迄に無いほど、…厚い『鎧』を纏ってしまったのだ……

今や、辛うじてそこから伸びていた細糸も、完全に断ち切られてしまっていた…

天を巡る星々は、力無く宙を飛ぶ少年に向かって、鋭い…厳し過ぎる程の冷たい槍を放っている。

その無限の天蓋から、中天に掛かった月だけが、少年の深い悲しみを銀の光で包み込んでいた。

………

「…曖ちゃん…どうしたのかな…」

駅から降りると、そこにはあまり見慣れない景色が広がっている。ここに立つのは久し振りだ。

五月の陽光に白く輝いている道を、玲はゆっくりと、力無く歩き始めた。

何故、これほど憂鬱な日に限って、幼い従兄弟に会いに行かなくてはならないのか…

玲は重い溜息を吐きながら、英孝の家に向かって歩みを進める。

…お姉ちゃんに、代わってもらった方が良かったかな…

別に、従兄弟の英孝が嫌いなわけではない。春日の叔母さんに会うことも、いつもなら楽しいことなのだが…今日は、止めておいた方が良かったかも知れない。

僕…もう……

昨日の曖の姿が、何度も脳裏に甦ってくる。

自分が原因らしいのだが…何がいけなかったのだろう…

玲は、相手が誰であれ、曖が他の人に好きになってももらえることは素晴らしいことだと思っていた。

たとえ、それが特別な『好き』であつたとしても、そんな気持ちを持つてもらえることは曖にとって喜ばしいことだと思ふのだ。

誰にも好きになつてもらえないなんて…悲しいことだからね…

だから、玲は曖の話に素直に喜んだのだ。

だが…

…もう、彼女に逢いに行くことも出来無いだろう。

自分が邪魔になるのなら…

行かない方が、曖の悲しみを減らすのなら…

玲は這い上がれないように思ふ深い淵の底で、ただただ大きな悲しみと苦しみに押し潰されそうになっていた。

…豊かな光が、風と共に舞う美しい歩道の上で…彼一人は、濃い暗闇をその背に負いながら歩み続けていた…

………

「…龍真さん」

「何？」

微かに聞こえた囁きに驚き、龍真は立ち上がると部屋のドアを開けた。

すぐ目の前に、俯きながらローニアが立っている。

…彼女は本当に不思議な存在だった。

優しく、静かで…だが、それでいて他を圧するような高貴な雰囲気その身に纏っている。

黙って見つめる視線に応えるかのように淡く頬を上気させたかと

思うと、ローニアは深い決意を秘めながらも遠慮がちにその双眸を上げた。

その瞳を受け止めた瞬間、龍真はローニアに不思議な魅力を感じている自分をはっきりと自覚した。

「いや、そんなことはずっと前から分かっている。

だが…それは、今迄に龍真が感じたことの無い、心の震えだったのだ。

戸惑いを覚えても当然だろう…

「あ、あの…お話を聞いていただきたいのですが…」

「あ？ ああ…いいよ」

慌てて、龍真はローニアを部屋に招じ入れていた。

彼が勧めた椅子に浅く腰掛けると、ローニアは暫くそのまま何も言わずにいた。

だが、その逡巡を終えると、彼女は小さく息を吸い込み、そして勢いよく言葉を押し出した。

「龍真さん、龍真さんはもう気付いていると思うのですが…」

私は…」

だが、龍真がその言葉を遮ってしまう。

「いいよ、そんなこと。俺は別に気にしてないから」

そう、何故玲が彼女に警戒心を抱いたのか、今では龍真にも分かっていた。

だが、それでも、彼にはローニアを疑うことなど出来無かったのだ。

…『琉璃』だって…こんなに、黄金色の光を送ってくれてるじゃないか…

「…有難うございます」

ローニアは安心したような表情を浮かべたが、すぐにまた真剣な眼差しに戻ると龍真を見つめた。

「実は、龍真さんに頼みたいことがあるのです。

…私が、…魄鬼の私が、この神社の『力』の領域に…神の聖域に

入ってきたのは…兄を探しているからなのです…」

「兄さん、を？」

龍真は思わず叫んでしまった。

宮木の地に『鬼』なんて…

だが、刹那、脳裏に一つの倉の“影”が過ぎる。

…珠璃が殺された場所…

ローニアは、隠しもせずに頷いていた。

「あそこは…」

大切な妹の死の瞬間が、今も彼の心臓を強く締め付ける。

龍真はローニアに背を向けると、目を閉じて必死に耐えようとした。

ローニアは心から慕う兄について告白したことで、恥ずかしさで一杯になっていた。だが、目の前の龍真の奇妙な振る舞いに気付かないわけがない。

「龍真さん…」

彼女は知らないのだ。あの場所で起こった惨劇を…

普段は乱暴なくらいの龍真が、今は自分に背を向け、その肩を細かく震わせていることに、ローニアはひどく驚いてしまった。

…泣いて…いるのですか…？

銀色に輝く瞳が、兄のことすら忘れ、深い悲しみに彩られる。

…！ あれは…

龍真の体を、純白の光が包み始める。

その優しく揺らめく光を観て…その、『珠璃』の緩やかな流れに見せられて…

彼女は、過去を知らされた。

「龍真さん、…ごめんなさい…

ごめんなさい……」

自分は兄を心から慕っている…だが、こんな風に龍真を苦しめてまで…彼女は自分の願いを聞いてもらいたくはなかった。

立ち去るべきかどうか迷いながらも、ローニアが腰を上げかけた

時、押し殺したような低い声が届けられた。

「…いや…《本当》は、悲しむことじゃないんだ…
ここに…珠璃は居るんだから…」

「龍真さん…」

急いで涙を拭くと、龍真は静かに振り返り、ローニアの瞳を真っ直ぐ見つめた。

「俺は、君を信じようと思う。」

龍脈を伝って『氣』が集まるこの宮木では、『負』は萎縮されてしまう…

でも、君はそれにも耐えながら、ここに留まり続けた。俺達に何もしようとはしなかった…

…だから、約束してくれないか。兄さんを解放したら、すぐに冥界に帰すと」

「はい…」

いつもの羞恥心も忘れ、ローニアは彼を正面から見つめ返すと力強く頷いていた。

「じゃあ、今から行こうか」

向けられる笑顔に影が射していることが、ローニアの心を苦しめる…

「…有り難うございます」

…だが、…彼女には、そう呟くしか出来無かった。

宮木で作られた棺が並ぶ倉…邪な存在を封じ、沈黙がその木棺を更に上から包み込む暗闇の中を、昼の光は淡く微かに切り裂いて揺れている。

魄鬼グラーズを封じた棺は、すぐに見つかった。

想いのままに走り寄ったローニアの後ろで、龍真は御神酒で自分の掌を湿らせると心を沈め意を集中する。

彼の願いに、彼の中の如意宝珠は黄金色の光を放ち、応えていた。ローニアが見守る中、木棺の表面に描かれた墨字が白光を放ち、

弾け消える。

「あ…」

だが、喜ぶ間も無く、不意に蓋が吹き飛ばされると、影が龍真に襲い掛かっていた。

「お兄さま！」

悲鳴を上げるローニアの前で、辛うじて身をかわすと龍真は残った御神酒を…

だが、その時、彼はローニアの恐怖に歪んだ顔を見てしまった。

龍真が躊躇した瞬間、グラーズは嘲りを含んだ高笑いと共に、倉から飛び出していた…

二人が黙り込んだまま倉を出ると、そこには宮木神社の主である龍真の父親が立っていた。

「君は、私達の信頼を裏切ったのだね」

静かな言葉に、ローニアは黙って俯いてしまった。

大好きな兄は、何も言わずに去ってしまい…親しくしてもらっている龍真を傷付けてまでして、封印を解いてもらったのだ。

一体、何が言えるだろう。

周りから禰宜達も集まってくる。

もとより、皆が心底から『鬼』を信じていたわけではない。当然、このような結末も予想されていた。

既に追跡も始まっている。

そして、彼女を冥界に送還する準備も…

栗色の髪で顔を隠しながら、ローニアはただ黙って立ち尽くしていた。

「止めてくれ、父さん」

ローニアを庇うように立ちながら、龍真は静かに言った。

「俺は、ローニアを信じて宮木の封印を解いたんだ。

そして今も、兄さんを冥界に帰すという、ローニアの言葉を信じている。」

だから、暫く見ていてくれないか」

「龍真さん……」

ローニアは目の前の大きな背中を、驚きと共に見つめていた。
…私さえいなければ、辛い記憶を思い出さずに済んだのに…
私さえいなければ、あの時、お兄さまを止められたのに…

……いいえ。

私が来なければ、この出来事そのものが生じなかったのです……
それでも、龍真は信じてくれているというのだ。

思わず、ローニアは両手で顔を覆うと、その場で泣き崩れてしまった。
った。

…それは、『負』の存在らしくもない行動だった…

神主も禰宜達も、暫く厳しい顔付きでただ龍真一人を見ていたが、
やがて、父親が重く口を開いていた。

「…明日までは待とう。」

だが、今日中にでも被害が起こりそうであれば、私達はそれを防ぐ
為に動く」

「…有り難う」

龍真は僅かに気を緩めると、すぐに後ろのローニアを立ち上げら
せていた。

「ローニア、少なくとも今は泣いてる時じゃない。

追いかけてよう」

「…はい……」

細い指先で涙を拭くと、ローニアはその頬に美しい微笑みを浮か
べようとした。

あれでは、まるで妖鬼だ…

だが、そんな振る舞いをした兄であっても、ローニアはすぐにで
も会いたかった。

だが…

…その時、私は……

そう。その時、彼女は兄を冥界に送還しなくてはならない。

そして……自分も……

神社の結界の中では飛ぶことも出来無い自分の腕を取り、空へと舞い上がった龍真を見上げながら……

…ローニアは、この世界を去ることをとても難しく感じていた……
初夏の、新しい爽やかな風が宙を駆けている。その乙女達を背に連れて、二人の姿はやがて蒼茫たる大空の中へと融けこんでしまった。

9 愛而不見 - かくれてみえず - おわり

10 愛而不見・あいすれどもみえず・

「はあ……」

一体、幾度めの溜息になるだろう。

この春に萌え出た美しい青葉の下を歩くには、あまりにも不釣合いな気分だ。

曖ちゃんは…、もう…僕とは逢いたくないんだ…

豊かな黒髪をした少女の一言は、玲の気持ちを押し潰すのに十分な力を持っていた。

…曖ちゃんは…僕が『嫌い』なんだ……

そんなことはない、と、反論したい気持ちもある。

だが、確かに…曖は言ったのだ。

もう、来ないで…と。

従兄弟の英孝の所へと向かいながら、玲の心は殆ど辺りに注意を払っていなかった。

今回だけは、母親の用事が済めばすぐにでも帰りたい。今は、英孝だけに限らず、誰とも会ったり遊んだりしたくなかった。

曖ちゃん…

泣き崩れる彼女の姿が、何度も何度も脳裏に過ぎる。

…本当に、玲は泣きたい気分だった。曖に『嫌われる』…そのことが、これほどまでに辛く悲しいものだとは…

ふと、足を止める。

…確かに、曖ちゃんは僕のことを『嫌い』なのかも知れない…

でも…それなら……『僕』はどうなのかな…？

…そんなことは、自問するまでもなかった。

勿論、玲は曖のことが今でも『好き』なのだ。あの小さくて儂い曖の存在を、今でも…これからも守り続けたいのだ…

そう思うことは…いけないことなのだろうか…

玲は訝しげに通り過ぎていく人々のことなどまるで気にも留めず、

真剣に考え続けていた。

曖ちゃんは、もう僕とは逢いたくないんだ…僕と逢えば、悲しくなってしまうかも知れない…

…でも…曖ちゃんに『嫌われて』も…それでもきつと、僕は曖ちゃんを『好き』なんだ…

それは推量ではなく、確信だった。

今夜、もう一度だけ、曖ちゃんに逢いに行こう…

自分が『嫌われて』いるとしても…それでも、これから曖ちゃんを『好き』なままでいることを、玲はどうしても伝えたかったのだ。

自分はずっと、曖を見守り…『好き』なままでい続けるだろう……

黒い影を伴ったままではあるものの、玲の頬に微かな笑みが浮かび上がる。

重く、歩道に根を張っていた足も、再び春日家に向かってしつかりと歩み始めていた。

だが…次の瞬間、玲の胸に鋭い痛みが走る。

同時に前方から急ブレーキの甲高い悲鳴と、人々の悲鳴が共に和して空中に響き渡った。

「まさか…」

英孝…が？

大きな人の輪が出来始めている。

その人垣に突き進んだ玲は、輪の中心に一人の若者が霊となって浮かんでいることに気が付いた。

あれは、英孝ではない…それなのに、未だ玲の胸は痛みを訴え続けている…

集まってはいるものの、誰も何もしようとはしない。中には、携帯電話で動画を撮影している者もいる。それらの存在に激しい憤りを感じながら、だが今は、玲はただひたすら群れの前に出ようと足掻いていた。

人垣を越えた途端、前部が潰れた車体と広がる鮮赤が目飛び込

んでくる。その不気味な泉に横たわっているのは、先程から幽霊となつて浮遊している若者と…

「英孝！」

その若者の腕に抱かれて、幼い従兄弟が大声で泣きじゃくつていた。

慌てて駆け寄る玲に続いて、黒髪を揺らす一人の女子高校生も『何か』をしようと現場へと近付いていた。

「きゃあ、ひつどおーい……」

眉を顰めて呟くその学生の言葉を、だが玲はまるで聞いてはいなかった。

赤い血の中に飛び込むと、泣き叫んでいる英孝を抱き上げる。急いで体内の『気』の流れを確かめるが、打撲と精神的な衝撃で多少の乱れはあるものの、危険な状況ではない。

思わず、正直に安堵の溜息を吐いてしまう。

その時になつて初めて、玲はすぐ傍に横たわる若者に目を向けた。だが…

…結果は分かっている。玲には見えているのだから。

その若者の肉体からは、既に『気』の流れは失せている。滞ったり、途切れたりしているわけではない。流れそのものが消失しているのだ。

この肉体に、最早生命や精神に係るエネルギーは存在していなかった。

でも…あの幽霊がまだ居たら…

若しかすると、まだ取り戻せるかも知れない。

急いで視線を上げてみたのだが、先程まで見えていた霊が消えている。移動したのか昇天したのか…

隣に来ていたはずの女子高校生も、いつのまにかいなくなっている。

相変わらず遠巻きにして、好奇心を剥き出しにしながら眺めている群れの前で、ただ一人、若い僧侶だけが漸く到着した救急車を誘

導してくれていた。

何も…出来ないのかな…

この若者が、英孝を護ってくれたのだ。

それなのに…また、救えなかった…

玲の姿に気が付いたのだろう。少しずつ落ち着いている英孝を抱いたまま、玲も救急車に乗り込む。

あの、遺体となった若者も一緒だ。

離れようとしない英孝を抱いたまま、玲は目の前の動かない存在を見ながら悔しさに唇を噛み締めていた。

…こんな僕に…曖ちゃんが守れるのかな…

…それは…果ての無い、苦しみだった…

「玲君！」

病院に駆けつけた英孝の母親に、彼は出来るだけ安心させるような笑顔を向けていた。

「大丈夫だよ、おばさん。今、中で検査をしてるけど、命に別状は無いそうだからね」

「そう…」

玲の漆黒の瞳は、言葉以上に彼女の心を落ち着かせる。

張り詰めていた心を解き放ち、力無くソファに座り込んだ叔母の姿を、玲は子どもとは思えないほどに優しい瞳で見守っていた。

だが、もう一つ、伝えなくてはならないことがある。

やがて落ち着いたと思うところで、玲は悲しみを込めて近くの病室の扉を指し示していた。

「あそこに眠っている人が、英孝を助けてくれたんだ…」

「…え？」

母親は急いで立ち上がると、その病室を覗き込んだ。

傍のベッドでは、あの若者が顔を隠して静かに横になっている…

暫くすれば、移されるだろう……

「あの方は…」

その先を言い出せず、振り返った叔母に英孝は重く頷いて聞いたことを伝えていた。

「あの我妻さんの両親も、半年前に列車の事故で亡くなってるそうなんだ。兄弟もいないし、親戚はいるのかどうか分からないくらいに付き合っても無くて。引き取り手がないんだ、って。」

英孝の母親は、孤独な恩人へとそとと歩み寄っていく。

その後ろ姿を見ていた玲は、不意に『何か』の気配を感じて瞳を細めていた。

死んでしまっている若者の体を、突然、鮮やかな黄金色の光が包み込む。だがその光は、すぐ傍で跪く叔母には見えないものだ。

あれは…精霊？

光の上位精霊…レフリゲリウムの光…！

驚きのあまり動けずにいる玲の目前で、眩く揺らめく黄金の煌きは、やがて銀の静けさを内に呈し始めていく。

銀光は次第にその純度を上げていき、叔母が何も知らずに立ち上がる前で、若者の体の深奥へと吸い込まれて消えてしまった。

途轍もない『力』が、若者の体に纏わりついている。

畏怖の念と共に黙って見守っていた玲は、その遺体の中で再び『気』が流れ始めたことに気が付いて大きく目を見開いていた。

確かに、死んでいたのに…蘇ったんだ…！

英孝の母親も、玲の様子がおかしいことに気が付き、後ろを振り返っていた。彼女に『気』を見る能力は無かったが、微かな腕の動きを認めて叫んでいた。

「生きてるんだわ！」

慌てて部屋を飛び出していく。

玲は、病室の入り口で、ただ茫然と立ち尽くすだけだった。

一体、誰が甦らせたのだろう。彼には、若者の脳が動き始め、心臓も新鮮な血液を送り出しているのが見えていた。傷は酷い。だが、肉体の損傷は治せるかも知れない。

ただ…そう、玲には別のものも見えていた。いや…それだけが見

えていなかったのだ。

その肉体には、幽霊となった彼の心だけが無かったのだ。

誰かの手による蘇生だということは間違いない。あの横たわる肉体には、別の魂魄が入らないように封印まで施されているのだ。

封印……いや……

……まるで、……眠っているみたいだね……

あの若者の靈魂だけが入れるように……予め決められているようだ。誰が為したのか……ここには、誰も居なかった……それは間違いない。玲には、未だレフリゲリウムの《真》の『力』は分からなかったのだ……

五月の光は、その清らかな流れで全ての存在を包み込んでいる。美しいその煌きの下、我妻明利と言う名の若者は、英孝の母親の懇願によって生き続ける為の手術を施されることになった。

そして……新たな『夢』が、生まれたのだ……

………

「おや、死ぬつもりかい？」

就職活動の為に着慣れない衣服に身を押し込めていたその女性は、不意に背後からかけられた言葉に驚き、足を止めてしまった。

栗色の髪をした美しい青年が、優しそうな瞳で見つめている。

屋上の端から僅かに身を引きながら、女性は震える声で呟いていた。

「……そ、そうよ。……どうせ、私なんて必要無いんだもの」

採用通知など、何処から来なかった。自分は、社会からは必要とされていないのだ……

「そうか」

明るい口調で、にこやかに青年は一步を踏み出す。

「なら、君が死んでも誰も文句を言わず、悲しみもしないと？」
「そうよ」

強い口調で断言している女性に、青年は嬉しそうに頷いた。

「なら、俺の為に死んでもらおうか」

「え？」

突如、その瞳から青い光が迸る。貪欲な表情を剥き出しにしながら飛び掛ってくる青年の、そのあまりにも突然の変容ぶりに、女性はその場で気を失ってしまった。

華奢な体が、屋上の手摺りに寄りかかる。

その首筋へと、鋭い爪の先が伸び…

「止める！」

厳しい声と共に、青年の前に見えない壁が立ち塞がる。

「チッ」

青年は振り返ると、背後に浮かぶ龍真とローニアを睨み付けた。

「グラーズお兄さま…」

あれが…かつて、自分に優しくしてくれた兄なのだろうか…

ローニアは、その変わりように、思わず目を背けてしまった。

「おとなしくしてろよ！」

鞘印を左の腰で結ぶと、龍真は『気』を込めながら冥界の鬼に向かって飛び込んでいく。

グラーズはその正面に立つと、薄く笑いながら呼吸を計って待ち構えていた。

「イエーツ！」

白光に包まれた鞘印から、右手の刀印を抜くと、人差し指と中指を伸ばし『気』を打ち込む。

間髪を入れず、鬼も同じ刀印を結び、心気を放った。

「オーツ！」

二つの結印の狭間で、見えない『気』がぶつかり合う。
だが、次第に『負』の力が龍真のそれを吸収し始める。

「龍真さん！」

ローニアの悲鳴が響いた直後、倍化された『気』は龍真の中に打ち込まれてしまった。

体内の心気を制圧された龍真は、自ら話すことも動くこともかなわず、空中から落下し始める。

その体を急いで支えようと、ローニアは静かにビルの屋上へと降り立った。

…そのまま、動かない。

少し俯いた彼女の頬は、豊かな栗色の髪が覆い隠してしまっていた。

「どうしたんだ、ローニア」

優しい…優しそうな声がする。

びくつと体を震わせると、彼女はゆっくりと龍真の体を屋上に横たえ、瞳を上げた。

真っ直ぐに兄の視線を受け止め、静かに口を開く。

「…お兄さま。

私は、お慕いするお兄さまに逢いたくて、逢いたくて…冥界から出てきました。そして…」

ちらつと龍真を見る…

「…龍真さんに、お兄さまを連れて帰ることを条件に、封印を解いてもらったのです。」

お願いです…一緒に戻ってください…」

以前のローニアなら…そう、グラーズが知っている彼女なら、こんなにもしつかりとした言葉を紡ぎ出せなかっただろう。

いつも、恥ずかしげな仕草で、誰かの後ろに佇んでいたローニア…そのローニアが、一番大好きな兄に向かって、真剣に『命令』しているのだ。

一瞬、グラーズの顔が歪む。だが、次には美しい微笑みを浮かべて頷いてみせた。

「分かったよ、ローニア」

「お兄さま…！」

「だが、俺の『力』は帰ることも出来ないくらいに失われているんだ。

だから、お前の『力』を分けてくれないか」

（嘘だ！）

その『力』の大きさを、龍真は今、身を以って感じている。十分過ぎる『力』だ。

グラーズの左右の爪が細く伸び、長い触手へと変わっていく。

見えている…聞こえている…

ローニアは、そんなグラーズの前で動こうとしない。

龍真は逃げるように、必死で叫ぼうとした。

だが、動けないのだ…唇は開こうともしない。

…ローニアだって、嘘だと分かっているはずだ…！

その彼女は動けない龍真を再び一瞥すると、全身から力を抜いて言った。

「…構いません。お兄さまの為になるのですから…

その代わり…終わればすぐに戻ってください。

必ず…」

「勿論だとも」

（止める、ローニア！）

だが、伸びてくる触手を、彼女は自らの意志で受け入れていた。

大好きな兄に逆らいたくはない…例え、その全ての言葉が偽りであり、この自分が消失することになっても…

そう決意することが、『大好きなグラーズお兄さま』というかつての想いを、その心に残しておける唯一の手段だったのだ。

静けさと優しさを秘めた…気品を漂わせる中にも、何処か儚さを潜める美しい姿が白い触手に巻かれ、消えていこうとしている。

（ローニア！）

顔を俯けたまま、彼女は何も見ようとはしない。

龍真は自らの『気』を高めて、呪縛から逃れようと身悶えていた。視界に、…栗色の髪影から伝い落ちた、一滴の煌きが映る……

(ローニア！)

絶対に許せない…彼女を二度も泣かせるなんて…！

不意に、胸中に黄金色の漣が生まれ始める。『珠璃』はその波を自らの内に取り込むと、凄まじい閃光を放ちながら打ち込まれた『氣』を破ろうとしていた。

目に見える白い輝きが、龍真の体を覆い始める。

その急激な『氣』の高まりを警戒し、グラーズは一瞬ローニアから注意を逸らした。

「うおおーっ！」

その間隙を縫って、龍真の体からローニアへと『氣』が迸る。

思いがけない標的にグラーズが我に返る頃には、既に彼女を飲み込んでいた触手は全て切り払われていた。

同時に、ガラスが割れるような甲高い「無音」が辺りに響く。

再び動くようになった体を擡げながら、龍真は静かな声で告げた。

「ローニア。例え、君自身の意志だとしても、俺は絶対にそんなことを認めないからな」

その場に蹲ったローニアは…俯いたまま、何も答えなかった……

グラーズは舌打ちすると、揶揄するように言った。

「おやおや、君はローニアに気があるらしいな。」

だが、それなら君に俺は倒せないだろう？ 何しろ、俺はローニアの兄なんだからな」

「へっ！」

立ち上がった龍真は、侮蔑の眼差しを隠そうとしなかった。

「確かに、ローニアが好きだったお前なら、俺は倒せなかっただろう。」

だが…」

そこで、彼は蹲ったローニアを見つめた。

「…いいかい、ローニア。」

もう、魄鬼のグラーズなんていやしないんだ。いるのは、ただの妖鬼だけさ」

龍真の体を純白の衣が包み込む。

ローニアの想いを踏み躪ったグライズへの怒りは、際限無く彼の『氣』を高めていく…

「小賢しい！」

妖夢界の鬼へと堕ちた存在が、諸手に『力』を集め、振り翳す。その強大な『負』の力は、自らの中へと逃げ込んでいたローニアでさえ、思わず顔を上げてしまう程のものだった。

「龍真さん…！」

「遅い！」

グライズが高らかと笑いながら、『力』を投げつける。

その先に回ろうと急いで立ち上がったローニアの目の前で、龍真は激しい憤りの儘に叫んでいた。

「宮木をなめるな！」

途端に噴き出した『氣』の奔流に弾き飛ばされ、負力は宙に霧散してしまふ。

それでもなお、龍真の『力』は高まり続ける。

「龍真さん…」

まるで、その《源》には、際限など無いようだ。

「宮木よ。龍脈、地脈、水脈の一端を担い、《大地》の全てをその身に享ける存在よ。今、顕現たる我に託せ、その全てを」

低い呟きが聞こえる。

そこに立つのは、最早ローニアの知る龍真ではなかった。

渦巻く『氣』に煽られている彼女でさえ、今の龍真には恐怖を覚えてしまふ。

だが…これも、彼女自身の為、なのだ…

その彼の瞳が、刹那、ローニアの視線を捉える。

そして龍真が軽く右手を上げた次の瞬間、彼女は自分が宮木の『氣』が創り出す見えない箱に閉じ込められていることに気が付いた。意識が朦朧としてくる…

宮木は、邪気を萎縮する。たとえ邪な存在ではないとしても、口

「ニアもまた、宮木に依って影響を受ける『負』の存在だ。

だが…彼女は知っていた。この龍真の『力』が、自分を痛めつけるものではないことを…

（龍真さん…ありがとうございます…）

素直に瞳を閉じると、ローニアは龍真の願いに身を委ねていた。

「クッ！」

意識を失い倒れるローニアの前で、グラスはぶつかってくる激しい流れに抗していた。

彼もまた、全力で防ごうとしている…と同時に、彼の中ではこの『力』に対する魅力も増していた。

この『力』が欲しい…

自らも『力』を高め、呼吸を整えようとする。そして、龍真がローニアを宮木から解放しようと『気』の一部に意を移した瞬間、妖鬼は一気にその『力』を発し、飛び掛っていた。

「死ね！」

落ち着いてグラスの残骸を見上げている…

「…消えろ」

龍真が最後にかけた言葉は、静かなものだった。

…純白の、美しい爆発が大気を震わせる…

ローニアは薄れていく意識の中で、辛うじて二人の声を聞いている…
た。

（お兄さま…）

結果は見るまでもない…あまりにも、『力』に差がありすぎる…

優しい頬を、一粒の星辰が伝い落ちていく…

……全て、思い出になったのだ…

玲を追い返した日の翌日… 暖は初めて嘘を吐いて学校を休んだ。
昨夜からずっと… 彼女の頬には、止め処なく涙が溢れている。

…泣いて…いる？

そんな自身の感覚すら、暖にはもうない。

彼女が感じているのは、ただ心中に満ちている涙の渦だけなのだ。
玲が出て行ってから、ベッドからも殆ど動いていない。

勿論、何も口にしていない。

自分の周囲のあらゆる存在を、彼女の弱々しい心は否定していた。
部屋の中は深い悲しみと孤独で染まり…そこにある《全て》が悲
痛な面持ちで見守っていても、それすら暖は感じようとはしなかつ
た。

……玲君…

…玲君は……

……私のことが『好き』じゃない……

暖なら、誰か他の人が玲を『好き』になることに、平気ではいら
れないだろう。

でも……玲君は……

彼女の心からは、最早伸ばされるべき細い絹糸も失せていた。

暖は、この世界において、たった一人の孤独な存在なのだ。

彼女を包み込む存在全てが、愛の小さく儂い心を押し潰そうとし
ている…

……そして…

彼女の心を消し去ることなど…いとも容易いことなのだ…

不意に、部屋の電話が鳴り響く。

全ての感覚を遮断してしまっていた暖に、その無機質な音は最初
聞こえていなかった。

だが…『何か』がその中に含まれている。

その『何か』に強要され、暖は現実へと引き戻されてしまった。

力を失った白皙な腕が伸び、受話器をそつと持ち上げる…

「…はい」

蚊の鳴くような声は、相手には聞こえなかったかも知れない。

「曖ちゃん？ どうしたのさ」

…心配そうな声は、朋也だった…

「…ごめんなさい…」

言わなくては…そんな決意は、今の曖には生まれない。

それは、ただ無意識に零れ出したものだった。

「ごめんなさい…ごめんなさい…私は…好きになれないの…ごめんなさい…もう…電話なんてしないで…」

もう…電話に出る者などいなくなるのだから…

受話器の向こう側からは、何かの叫び声のようなものがしている気がする。

だが、もう曖は電話に注意など向けていなかった。

受話器を取り落とすと、再び自己の泉の中へと深く沈み込んでいく…

やがて、受話器の向こうも静かになった。

これらも、全て朋也から始まったと言えるかも知れない。だが、誰か他の存在を怨むということは、とても曖には出来ないことだった。

だからこそ、彼女は全てを自身で受け止めてしまうのだ。

今迄なら…そう、昨日までなら…曖の心の叫びを聞いて…細い絹糸を手繰って、すぐに玲は来てくれただろう…

だが…曖自らが言っただけではないか…

「…もう、…来ないで…」

…と

もう…玲君は、逢いに来てくれないの…

玲がいない世界など、曖には考えられなかった。

今も…こんなにも『好き』なのに…こんなにも逢いたいのに…
ずっと…ずっと…

…そう、ずっと、続くはずだったの……

…だが、最早、絶対に彼女の想いは叶わないのだ……

何時の間にか、日も暮れている……

初夏の星座が風渡る遙か頭上に並び、清らに澄んだその輝きを静かに放ち始めている。

…曖は、やはりベッドから動こうとはしない。

彼女にとって、この絶望に沈んだ心しか、この世に存在しているものは無いのだ……

曖の心に、《死》という単語があつた訳ではない。だが、確実に彼女の心の中にはその《死》が入り込んでいた。

それは容赦の無い力で、『曖』を引き裂いていく……

……

…その時、何かがゆっくりと滑り、開かれる音がした。

だが、曖の耳は全ての物音を断ち切っている。

今迄であれば喜びと共に迎えるその音を、最早彼女の耳は捉えてなどいない。

「曖ちゃん……」

悲しみに彩られながらも、強い決意に満ちた囁き声とする。

待ち侘びていたはずの声……

だがそれさえ、音など存在しない世界に逃げ込んでいる曖には全く聞こえていなかった。

静寂の中、玲はそつと窓を閉めていた。

彼には、部屋に入る前から見えていたのだ。曖を包み込んでいる厚い……絹の細糸さえ断ち切っている、厚い『鎧』が……

…この『鎧』はきつと……僕がここに來たからなんだ……

そう思っていた玲は、その『鎧』を無理に切り裂こうとはしなかった。

そのまま静かに近付き、ベッドの上の小さな肩に手を置くと、そ

つと耳元で囁き始める…

「…曖ちゃん…また、来てしまつてごめんね…でも…どうしても…
言いたかつたんだ…」

曖ちゃん…僕は、曖ちゃんが『大好き』なんだよ………」

その声は届かなくとも、その『言葉』は不意に黄金の矢と化し、
曖の『鎧』を貫いていく…

「…だから、曖ちゃん。僕は、例え曖ちゃんが僕のことを嫌いでも…
僕は、曖ちゃんのことをこれからもずっと、…そう、ずっと守り
たいんだ…『好き』でいたいんだ…」

次々と放たれる『言葉』の矢…

『鎧』の一部からはその矢を受け入れようと、同じ黄金の輝きを
持つ光が溢れ出していた。

「…迷惑かも知れないけど…どうしても、そうしたいんだよ…

…ごめんね、曖ちゃん。

きっと、今、曖ちゃんが悲しんでるのは、僕がここに来てしまつ
たからだろうから…すぐに、帰るよ……

ごめんね………」

……

心が、反応しようと身じろぎする…音が、感覚が、入り込んでく
る…

…だが、これは《本当》なのだろうか？　心が描き出した『幻』
なのでは…

立ち上がる気配が…音がする。

違う…違う…

幻…

夢…

『夢』でもいい…

…外から、中から…あらゆる存在が『鎧』に向かって押し寄せて

くる……

それでも、いい……

逢いたい……伝えたい……

…《全て》……………

内外から迸る光の奔流に、歪み、溶け、形を変えてしまう『鎧』
越しに、『何か』は溢れ、愛らしい唇を通して紡ぎ出そうとしている。

……

その『音』になっていない『言葉』は、ガラス戸に手をかけていた玲の足を止め、振り返らせていた。

何も見えていない…虚ろな視線が辺りを彷徨っている…

儚い心は、自分自身の光にすら耐えられず、混沌の中を激しく押し流され、その中から浮かび上がることさえかなわない。

曖には、目の前で覗き込んでくれている玲の瞳すら、見えても見えてはいなかった。

「曖ちゃん…」

「…玲…君…」

やっと紡がれたその声も、自分では知覚出来ていない。

自分が半ば身を起こしていることも分からないのだ。

だが…

…優しい…温もりが…

肩を抱く手に、知らず指先を重ねると、曖は涙を流していた。

「違う…違うの…」

…私も…玲君のことが…『好き』……………」

掠れた…本当に微かな声が、零れ落ちる…

「……ずっと…初めて、逢った時から…ずっと……………」

「曖ちゃん！」

玲は力一杯、その小さく弱々しい体を抱き締めていた。

「曖ちゃん…僕はね、曖ちゃんが誰かに好きになってもらっても、それはやっぱり素敵なことだと思うんだ。

でも、それは…曖ちゃんがきつと…僕を『好き』なままでいてくれる…

…そう、信じていたからなんだよ」

「玲、君……」

体を包み込んでくれる、柔らかな温もり…

…曖は、…漸く、涙の向こうに微笑みを感じていた。

「ごめんなさい…玲君…

…ありがとう…いつも、傍に来てくれて…

…ありがとう…私のことを…『好き』でいてくれて……」

「曖ちゃん……」

玲は、気持ちのままに、そつと…曖の唇に触れていた。

白皙な頬が、不意に朱に染まる。

…だが、彼女もまた、この『言葉』を伝えたいと願っていた…

口付けの間、玲は曖から流れ込む想いと共に、レフリゲリウムの黄金色に輝く波動をも全身で感じ取っていた。

…やがて、その波が銀色の煌きを、その身に呈し始めたのが分かる……

これは……

今日の昼間。あの、我妻という若者が……

……銀光は、次第に二人の中へと溶け込んでいく…

光の精霊が司るもの……その《真》の姿を…《永遠》を、玲は認めたのだ……

時間の輪は、容赦無く回り続ける。

だが、例えその輪が一つの命を引き裂いても…

…銀を秘めた存在には、最早その意味すらも失せてしまう……

……きっと……変わらない……

……『時間』が、散る……

10 愛而不見 - あいすれどもみえず - おわり

11 離閣

「ハイキング…？」

七月の強い日差しで、暖の部屋からは夜になってもまだ熱も逃げ
ていない。

クーラーの設定温度を下げようとした暖は、突然の玲の言葉に驚
いて振り返っていた。

「うん！ きつと、気持ちいいと思うよ」

「でも…私、そんなに…その、歩けないと思う…の…」
がっかりさせたくなかったが、暖は正直にそう言った。

だが、玲は安心させるように微笑むと続いていた。

「大丈夫だよ。歩くのは2時間くらいだし、疲れたら、勿論送って
あげるからね。」

暖ちゃん、もう少しだけ、自分の体力に自信を持ってもいいと思
うよ」

「…ありがとう…うん」

山の中をハイキングした記憶など、暖の中には無い。そのことを、
玲もよく分かっていた。

当然ながら、山道を歩くつもりは無い。若干、距離は長くなるが、
歩きやすい車道を登るつもりだ。

玲は、暖に少しでも、『外』を知ってもらいたいのだ。

知らなくていいこともある…だが、知らずにいて大切なものを逃
していることもあるのだ。

夏休みが始まったその日、暖の父親は仕事で出掛けている。

その日に二人は、翳月山に登ることに決めた。

「随分、暑いね…」

流石の玲も、顔を顰めている。

暖は純白の大きな帽子の下から見上げると、心配そうに言った。

「玲君…帽子を被った方がいいと思うの…」

「うーん、それが忘れちゃったからね。まあ、大丈夫だと思うよ」

玲は簡単にそう言っていると、暖の指先を取って歩き始めた。

「さあ、行こう！」

「…うん！」

暖もにつこりと微笑みながら、玲に従っていた。

この時期、翳月山眩耀寺では、何の行事も行なわれていない。

また、周囲の山々に綺麗な花が咲き誇っているわけでもなく、ただ道沿いの木々が緑葉を揺らしているだけだ。

夏休みとは言え、観光客などいるはずもない。

時折、自動車は走り抜けるものの、それ以外は完全に二人だけの世界だった。

「とっても、いい気分ね…」

道のすぐ脇を流れる川に、暖は軽く身を乗り出して言った。

せせらぎから聞こえてくる水の喧きは、暖に不思議な話を伝えてくれる…

…あれは…水さんが、笑ったのかしら…

目の前の中洲には、背の高い葦が蔓延っている。その向こうから、不意に巨大な影が飛び上がった。

驚く二人の前で、そのアオサギは悠然と空を舞い、高木の上に立つとそのまま動かず、じっと川下を見つめていた。

何もかもが、目新しい…

「暖ちゃん…」

玲の優しい誘いに、すっかり足を止めてしまっていた暖は頷くと再び歩き出していた。

小さな、赤い橋を渡る。

緑濃い山々に挟まれ下ってくる川を覗き込んだ暖の目には、小さ

な魚影が沢山見えていた。

頭の影が落ちたわけでもないのに、何かを感じてその細い線が、一斉に水面に輪を描いて逃げ去ってしまう。

「とっても澄んだ水だね」

岩の間を、堂々と泳ぐ魚も見える。曖の両手を合わせたよりも、もっと大きいだろう。

あんなに大きなお魚さんが…手を伸ばせば、届きそうなの…

目を上げてみれば、剥き出しになった崖の灰色の肌に、黄金色に輝く波紋が揺れている。…それは、とても不思議な映像だった。

川の眺めを楽しんだ後は、少しの間、爽やかな囁きから離れることになる。

道は木立の中へと入り、曖は遠ざかる煌きを寂しそうに見送っていた。

そんな曖を見守りながら、玲は黙って歩を進める。

左右に並ぶ杉は、次第に太く、大きなものへと変わっていく。深い蒼に染まっているはずの夏の空が、遙かな果てで、緑の頂に切り取られている。

「大きいもんだねえ」

それ以上の言葉が出てこない。二人の日常の感覚では測れない程に大きいのだ。

それでも威圧感が無いのは、下草が殆ど無く、薄暗い森の奥までが見えているからだろう。

厳しく照りつける陽光も、ここでは草葉を通して随分と柔らかな泡となっている。

その下を、二人は急ぐこともなく、手を繋いで共に歩んでいた。
「しっ！」

不意に、玲が立ち止まる。

手を引かれて、曖はきよとした表情で彼を見つめた。

だが、足音が消えた瞬間、彼女の耳にも聞こえてくる…

愉しげなおしゃべりに嬉しくなって、思わず曖は駆け出していた。

大きなカーブを曲がると…再び、川がその穏やかで楽しい姿を見せてくれたのだ。

密生した緑の葉叢に囲まれた水の流れは、岩の隙間を縫って白い泡を纏いながら、覗き込む曖に話しかけてくる。

飽きることなく耳を傾けていた曖は、知らず微かな笑い声を零していた。

そうせずにはいらなかったのだ。

その時、今度は少し乱暴な歌が彼女の耳に届けられた。

「あっ…」

風だ。

近くに立つ桜の木を揺らした乙女達は、銀色のドレスの裾で二人を包み込んでくれる。

耳元で呟かれる言葉を、曖は久しく聞いていなかったような気がした。

そつと瞳を閉じる…

すると、急に玲が笑い声を上げた。

「……？」

首を傾げて見上げてくる曖に、玲はにっこりと笑って言った。

「曖ちゃん。さっきの風がね、どうしても曖ちゃんに話したいことがあるんだって」

「え…？」

片目を瞑ると、玲は風の精霊の言葉を伝えた。

「あの風はね、曖ちゃんが川ばかり見てるから、嫉妬してるんだよ。

自分達も見えてくれないと、その帽子を飛ばしてしまうから！　って言ってたよ」

「そんな…」

思わず、大切な帽子を両手でしっかりと押さえてしまう。

だが…少し、嬉しい気がする。

曖だけが、周りを見て喜んでいるのではない。川や風も、曖や玲

のことを気にしてくれているのだ。

「あははは。大丈夫、飛ばされたりしないよ。あの風は、曖ちゃんが好きだからね。」

そんな意地悪をして、嫌われたくないんだ」

「玲君：」

素直に、真っ赤になってしまう。

玲は更に大きく笑うと、曖の細い指先を取って駆け出した。

「さっ、まだまだ歩かないとね！」

顔や手に直接ぶつかってくる日差しは、時に痛みさえ覚える程に熱く厳しい。車道を歩いている為、木々が大きく頭上を覆ってくれることは少ないのだ。まだ、時折、薄い雲が流れているのが、帽子の無い玲には幸いだった。

「玲君：大丈夫？」

「うん！ 平気だよ」

玲のにこやかな笑顔を見ると、深刻だった曖の顔も心配の色を消していく。

道は、緩やかに盛り上がった山々に囲まれている。

風に大きく樹木が靡いている様を見ながら、曖は葦原の向こうに少し遠退いてしまった水音に、再び耳を傾けていた。

ヒヨドリが元気に啼きながら、対岸から頭上を渡ってくる。

傍に立つ木の、色濃い葉陰でちょこちょこ枝を登っているのは、メジロだろうか。

「曖ちゃん：良かった。」

「とっても楽しそうだね」

「うん：ありがとう、玲君：」

玲の微笑みを見るまで、曖は自分も頬に笑みを浮かべていることに気が付いていなかった。

だが、それは恥ずかしいことではない。

曖にしてみれば、この目の前に広がる《世界》の中で、笑みを忘

れる人の方が信じられないのだ。

そんな彼女の元に、突然、深く重い空気が流れてくる。

青い匂い…気圧されそうな程に濃い草々の薫りに、曖はくすくすと笑い出していた。

「こんな香り…久し振りなの…」

視線を送った先で、玲も頷いている。

「曖ちゃん、あの上の方にある田圃まで登ってみようよ」

「うん…！」

少し先にあつた、一軒の民家の横に見える細いコンクリートの坂を、二人は手を取り合って上り始めた。

錆び付いた鉄の階段を上がり、用水路の脇を歩いていく。

やがて、山々に囲まれた細い田圃の鮮やかな緑が目に入り、それと同時に、二人はその田圃から流れ出してくる独特の香りを胸一杯に大きく吸い込んでいた。

「玲君…私ね…」

芳香に包まれ、暫く身動きしなかった曖が、それだけを言うと急に恥ずかしそうに言葉を止めてしまった。

「どうしたの？」

不思議そうな玲の眼差しに、曖は少し俯きながら言った。

「あのね…私、この香りが大好きで…何故か、メダカを思い出すの」

「そうなんだ。僕は、ヤゴかな」

この二人にとっても、それはもう随分と昔のことに思える。

奇妙に懐かしい気がする…

…僕が、メダカやヤゴを捕らなくなったのは、いつからなんだろう…

宮木神社の周辺では、今も、田圃が水を湛えているはずなのだが…幼い頃からの《時間》は、確実にその歩みを止めることなく流れ続けている。

一体、どれだけのことを忘れてきてしまったことが……

「玲君…」

そつと、曖が指の力を強めてくる。

我に返った玲は、すぐに彼女に笑いかけると下の道まで戻り始めた。

そう…素敵なことは、今も玲の周りに溢れ、続いているのだ。

だけど…曖ちゃんのことは…

…きつと、思い出になんてならないんだ…

…玲は、そう信じて疑わなかったのだ…

「やつと眩耀寺が見えてきたね」

翳月山は一般にはあまり知られていない。

だがこの寺は、その伝えられる《咒》の凄まじさで、特定の社会では名が通っていた。もつとも、それも「裏」の「表」にあたる社会であり、寺の実体を知る者は殆ど存在していない。

小さな民宿が、川の曲がり目に沿って点在している。

歩いている者は…皆無だ。セキレイだけが、立ち止まってはその長い尾を上下に振り、また歩き出しては道を我が物としている。

川のせせらぎだけが、大気を満たす…

「とつても、静かね…」

不思議なものが、充ちている気がする…深く…《虚無》を感じさせる静寂…

橋を渡り、三門の下を潜る。

巨木に囲まれた霊域は、容易には人を受け入れようとはしてくれない。

曖は、恐怖に似た感情が、胸の奥から沸き起こるのを感じていた…これ以上…奥に入ったらいけないの…

威圧感が…神聖なものであろう、だがそこから発せられる重圧は、彼女の小さな心を押し潰そうとする…

だが、すぐに玲の手が、軽く肩を叩きながら励ましてくれた。

「曖ちゃん、この辺りはまだ大丈夫だよ」

そう言っている彼には、曖よりも多くのものが観えている。

「でも、足も疲れてるし、あの急な階段を登るのは止めておこうか」
緑樹が創り出す淡い闇の下を、乱雑に組まれた階段が上っている。
地蔵が並び、大きなシダが触手を伸ばすその道は、とても暖の手
には負えないものだろう。

怯えたように身をすり寄せてくる暖を支えながら、玲は近くにあ
ったベンチに誘うと腰を下ろしていた。

「大丈夫？」

「…うん」

こんなにも近い…優しい温もりは、暖の中からあらゆる怖れを取
り除いてくれる。

彼女はにっこりと微笑みながら、真っ赤に頬を染めると囁いてい
た。

「もう…大丈夫。でも…もう少し…」

…このままで……

玲もそつと笑みを浮かべると、顔を伏せてしまった暖を抱き続け
ていた。

風は樹間を走り抜け、檜皮葺の金堂から仄かな香りを運んでくる。
…古から、何一つ変わらない……同じ『時間』が、そこには存在
していた。

綺麗に掃き清められた石畳の脇には、細い木々が点在している。
その奥に覗くのは、蓮の葉が浮かぶ池だろうか。

玲は暖の肩を抱きながら、何気無く、それらの風景に目を向けて
いた。

不意に、頼りなげに立つ木々が一斉に揺れ動く。

しなやかな枝先が宙に軌跡を描いた瞬間、小さく、みすばらしい
民家が現れていた。

驚き警戒する玲の前で、石畳は山腹に貼り付いた狭い田畑へと姿
を変え、聞いたことも無い甲高い鳥の声が谷の上を…振り仰ぐ遙か
な上を渡っていく。

……？

素早く広げられた『力』の敷布には、だが何も捉えられない。

何も……？ ……眩耀寺は……？

曖ちゃん……！

腕の中には何も……すぐ傍に居たはずの曖の姿も見えない。触れることも出来ない……

……！

……いや……『自分』さえ……ここには存在していない……？

「本当に……行くの……」

突然、背後から幼い少女の声が聞こえてくる。

狂おしく……悲痛な想いで投げ掛けられたその言葉に……

……だが、玲は振り返ることが出来なかった。

……曖ちゃん……？

何処かでそう呟く存在があるが……違う。同じく、儚げな声だが……何かが違う……

……だが、同じ……

その時、玲は茶色い髪をした若者が、自分のすぐ横に立っていることに気が付いた。

若者は振り返ると、黒髪を背に流す少女を抱き締めている……

今は、玲も振り返ることが出来ていた。

「キシユ……本当は、旅に出て欲しくない……その小剣で、誰も殺して欲しくない……例え、魔物でも……」

目の前の二人の映像は、白い霧に霞み、揺らめいている……よく見えない……

……だが、声だけは、はつきりと玲に伝わってきていた。

「でも……身を守るためなら……ううん、それも本当は嫌なの……でも……死んで欲しくない……私……私……どうすればいいか分からないの……

一人には、なりたくない……」

……どうして……『僕』は二ヤを……

その少女の名前を知っていることに、玲はひどく驚いていた。だが、『時間』は彼に、憶測する間も与えず流れていく。

「ねえ、お願い……！ 絶対に、戦争には手を貸さないで……人は、殺さないで……争いは、人災なの……避けることが出来るのよ……お母様やお姉様、キシユのお兄様やお父様が……何のために……死んだか、分からない……そんな……そんな争いだけはしないで……！」

分かってる……ニヤ、分かってるよ……

知らぬ間に、彼はそう言いながら、ニヤを抱き締めていた。

……いや……抱いているのは、……曖だ……

……不意に、場面が変わる。

「何故、それほど死を急ぐのだ」

冷淡な……深く、力強い男の声がする。

だが、霧の中から浮かび上がった映像は、雪のように純白の肌をした、見事な金髪の女性だった。

「死？ それがどうした」

男は冷たい漆黒の瞳を上げると、抑揚の失せた声で応えていた。

「俺にとって、死は有り難いもんだぜ。この身を『時間』の鎖から解き放ち、『無限』へと連れていってくれるんだからな」

「自ら、銀の輝きを予言するのか……」

そうだよ。ラスケドール。《真実》は語るに値するものだからね……ガリスはそう呟くと……

……ううん、これは『僕』の……

……その時、三度目の映像が包み込んできた。

「リル……私、孤児なの……お婆ちゃんに小さな頃……ううん、赤ちゃんの時に拾われたの……」

曖が……いや、クレアが全身を微かに震わせて、呟いている……

「私に……誰も、家族はいないの……だから……皆……」

臃な少女は、両手で顔を覆うと泣き始めてしまった。

栗色の髪をしたその少女の肩に、黒髪の少年がそつと手を置いて
いる。

心からの優しさと共に、囁いている…

「おかしいよ、クレア…じゃあ、ファティーお婆ちゃんは家族じゃないの？ その…『血』、とかは関係なくてだよ？」

水色の瞳が、『僕』を見上げてくる…

「人じゃなくなつて…クレアにとって、海は？ そのペンダントは？
それに…」

リルは…『僕』は、曖ちゃんの瞳に…クレアの清純な瞳に見つめ
られて…意を決して続けている…

「…その、加えて欲しいんだ…僕を…」

「リル！」

クレアが抱きついてくる…『僕』は…『僕』は…

「……！」

え…？

…クレア…何…？

「玲君…！ 玲君？」

…曖、ちゃん…？

薄らいだ意識の奥…

…遙か彼方から響いてくる、不思議な『言葉』…

……？

一体、…誰、だろう…？

聞いたことの無い『言葉』だ。

…温かな女性の声……

「玲君！」

「大丈夫よ。もう、気付いてるわ」

静かで優しいその声に、玲は《個》を自らの中に確保すると、は
つと目を見開いていた。

「玲君！」

安心からわつと泣き出すと、曖は玲に力一杯しがみついていた。

そんな曖を、まだ戸惑いながら受け止めている玲の前には、彼よりも少しだけ年上らしい女性が穏やかな微笑みを浮かべ、佇んでいた。

「僕…」

……『夢』だったのかな…

「『郷夢の森』を彷徨っていたのよ」

明るい栗色の髪を背に流すその女性は、静かながらも僅かに窘めるような口振りで続けた。

「きつと、ここが、あなたにとって何か意味がある場所になるんだと思うの。」

でも、『郷夢の森』を迷っている…その『場所』が自分で認識出来ない間は、もう、ここには来ない方がいいわ」

「『郷夢の森』って…」

しゃくりあげている曖を優しく抱きながら、玲は首を傾げていた。

…この人も…何かの『力』があるみたいだけど…

それは、邪なものには感じられない。

若しかすると、あの『夢』は彼女が見せたのではないだろうか…

玲は、『郷夢の森』のことなど聞いたことが無かったのだ。

すると突然、その女性はくすくすと笑い出していた。

「わたしも、時々迷い込むの…」

…でも…そこは、わたしの『源』なのよ…」

「え…?」

ガラスの鈴のような澄んだ笑い声は、…だが、次の瞬間にはその紡ぎ手を失っていた。

この『力』の壁の中で…

その女性が、口中で何かを呟いたことには気付いていた。だが、この結界の中から…この、強力な眩耀寺の聖域の中から、簡単に『飛んで』姿を消すことなど、玲にとっても簡単なことではない。

「玲君…」

不意に、微かな声が聞こえる。

我に返ると、玲はにこりと曖に微笑みかけていた。

「ごめんね、曖ちゃん。心配をかけてしまったね…」

「うっん…」

玲君のことだもの…

彼に対する心配なら、曖は自分のことなど顧みないだろう。

「もう、帰ろうか」

「うん…」

妙に力の入らない足を引き摺りながら、曖と共に翳月山を降りていく。

…やがて、一軒の民宿の影で突如黄金色の煌きが揺れたかと思うと、二人は香笹町へと戻っていった……

…『時間』の後先は、銀を呈する者にとって、共に《源》となる。そこは故郷であり、夢であり…『無限』の中における《今》なのだ……

………

一日、また一日と、夏休みは過ぎていく。

玲と曖の逢瀬は毎日のように続き…その一つ一つの出逢いが、玲にとっても曖にとっても、素敵な『時間』となって心の奥底へと仕舞い込まれていく。

…玲君…早く来ないかな…

ベッドに腰掛けてぬいぐるみを抱いている曖は、いつも、いつでもそう思っていた。

毎日、彼女は玲を想っては、心の中を不思議な音色で満たしていく。

その黄金色の海の中を、曖は喜びと共に彷徨っていた。

…玲君…

見つめてくれるその瞳は、以前と変わらない優しさで溢れている。
だが、曖はその深い所で、『大人』へと踏み込んでいく彼の姿を
認めていた。

…でも…

それでも、構わない。

玲の気持ちは同じなのだから。

そう…もう…疑ったりしないの…

声を交わさずに伝わる言の葉を、曖は素直に受け止め、信じていた。

だが…一方で、そんな風に想っている曖自身は、自分が『少女』
から『女性』へと変わりつつあることに気が付いていない。幼さが
残る心の儘で、彼女は知らず『大人』への道を模索していた。

「曖ちゃん…」

何度聞いても、胸が喜びに打ち震える言葉…

今日の出逢いも、銀の清澄な煌きをその身に纏い、黄金色の流れ
を過ぎるだろう。

そして…その一筋の銀光は、郷夢の森で一本の大樹を育んでいく
のだ……

…遙か、茫洋たる『時間』の始まりから続く、『二人』の永久な
る想い出として………

12 離析

「とぎろつ
鋭狼」

短い黒髪の女性が、そつと宙から舞い降りてくる。

二十一になり、愛らしさよりも美しさの増したその女性を、鋭狼は鳶色の瞳を柔らかく細めながらそつと受け止めていた。

「寒くないか、綺羅」

「平気よ。ありがとう」

彼の腕からビルの屋上へと降りると、綺羅は二月の曇天に囲まれた街を見渡していた。

その視線は、やがて下を歩く一人の若者へと落とされる。

「あいつが、そうなの？」

「そうだ」

「リストには無い『能力者』ね…」

若者は、もう子どもとは言えない年齢にまで成長している。

「あんなに成長するまで、対魔委員会でも把握していなかったのね」

「それはどうか…」

「え？」

鋭狼の静かな声に、綺羅は厳しい顔付きで振り返っていた。

「ジークの親仁は、そうは考えてないだろう。あいつはあのまま、暫く泳がせておく。勿論、委員会には伏せてな」

「そう…それで、あたしの目標が化け物になったのね」

確かに、いざという時のことを考えれば、その方が自分には合っているだろう。彼と行動を共に出来ないのは残念だが…

「そうだ。対魔委員会から回ってくるリストには載っていない、怪物さ」

頷きながら、再び呪符の力で浮かび上がっている。

そんな綺羅に、鋭狼は諭すように付け加えていた。

「いいか、リストに無いってことは、相手の情報は何も無いってこ

とだ。今回は、本当に危険な時以外、絶対に手を出すな。

俺達が欲しいのは、情報なんだからな」

「分かってるわよ。あたし、そんなに馬鹿じゃないんだから！」

舌を突き出すその仕草は、まだまだ幼いものだ。

綺羅は素早く鋭狼の頬に口付けると、目標を追って宙に舞い上がっていた。

続いてすぐに、鋭狼自身も本部へ戻る為に空中を飛び始める。

「それにしても……」

対魔委員会が、わざと見逃したのは間違いない。

何故だ？ ……畏、だろうか。

だが、委員会も、まだ特殊安全調査室と正面からぶつかることは望んでいないはず。

……いや……既に、あの若者を取り込んで……

『能力者』の情報は、まず委員会から特調へと回されてくる。

特調では、その『能力者』を確認し、その『力』の規模と種類、成長過程の監視と記録を行い、魔法的状况に対処する特殊部隊の構成員に値するかどうかを判断、実際の訓練から各組織の統括までをその役割としている。

だがここ数年、対魔委員会は状況の把握や発見だけではなく、独自に対処の為の特殊部隊を作ろうと画策している節がある……

「……それにしても、あからさまだ……」

何故、あの若者は、リストに無い怪物を追っているのだろう。

委員会も、特調が独自の情報網で魔法的状况の探知を行なっていることは知っている。すぐに魔物に気付くことは分かっているはずだ。当然、同じ目標を追う、あの若者のことも知られてしまう……

……… 囧か？

だが、そうだとしても、魔物はいつ一般人に襲いかかるか分からない。

綺羅の監視は必要なものだ。

……なら、囧の後ろにある動きは……何なのだろう？

雪が今にも降り出しそんな低い雲の重なりの下、鋭狼は憂鬱な気分
で飛行を続けていた。

玲が十三歳、暖が十一歳の冬のことである……

「そうか…又、失敗したんだな」

「ええ…」

薄暗く感じる明かりの下で、男は視線を逸らしながら低い声で呟
いていた。

「一度に何十万もかかって…もう、限界だな…」

「……」

「子どもも産めないなら…もう、一緒に暮らす必要は無いだろう」
吐き棄てるように言うと、男は奥の寝室へと引き込んでしまった。
…食卓では、妻であった女性が、声も出さずに全身で泣いていた
……

「和輝君、本当に来てくれるの？」

「うん」

嬉しそうな笑みを浮かべる綾子に、和輝は静かに微笑みで応えて
いた。

その優しい眼差しが恥ずかしく、綾子は急いで先に立つと、冬空
の下を歩き始めた。

真冬の最中だが、それでも今日は薄日が射している。

比較的穏やかな昼下がりに、綾子は知り合いの女性に会いに行く

と決めたのだ。

その女性は、先月の始めに離婚していた。その日以来、足が遠退いてしまっていたのだが…やはり、どうしているのか心配で、訪ねる決心をしたのだ。

それでも、流石に一人では気が引ける。

そこで、綾子は和輝と一緒に往てくれるように頼んだのだ。

「その人ね、まだ28歳なんだよ」

「何処で知り合ったんだい？」

「病院でなの。あたしのお父さん、一度、入院したことがあるから、その時にね」

ゆつくりとした足取りで、会話を楽しむ。

…綾子にとっては、夢のような一時だった。

やがて、落ち着いた茶系の壁をしたマンションが見えてくる。

あのマンションを…今迄、元夫と共に暮らしていたマンションを、その女性は譲り受けたのだ。

だが…そのまま住み続けたいのだろうか…

「あそこよ」

綾子は、自分に言い聞かせるような口調で呟いていた。

どう言えばいいのか分からない。だが、避け続けることもしたくない…

そんな綾子の様子を横で見ながら、不意に、和輝は自分の方から彼女の指先を取っていた。

「和輝君！」

驚いて、真っ赤になってしまっている。そんな彼女に、和輝はそつと微笑みを深めていた。

「さあ、行こうか」

「…そうね」

横手にある狭い階段を上り、3階の廊下に出る。

女性の部屋は、すぐそこだ。

綾子は扉の前に立つと、そつと深呼吸をした。

間を置かずに、和輝の手が繋いだ指先を強く握り締めてくれる……
「……ありがとう」

赤くなりながらも、綾子は振り返って笑顔を見せていた。
短く、ベルを鳴らす。

……だが、待ち続けても、扉は開かない。日曜日の午後は、留守にしたことが無いのだが……

「扉は、締まっているのかい？」

不安そうな綾子の傍で、落ち着いた声がする。

まさかと思いながらも手をかけてみると、驚いたことに鍵がかかっている。
……

そつと尋ねるように見上げると、少し、真剣な表情で和輝は頷いていた。

無意識のうちに呼吸を止め、綾子はそつと扉を開ける……

薄い闇が、玄関から奥の部屋へと流れていく。

……何も、聞こえない。

「……お姉さん……？」

静かに……そつと声をかけてみる。

その奇妙に掠れた音の波が廊下を曲がると、ぼんやりとした霞が奥から返ってきた。

「なあに？」

耳朶に触れると、それは確かに知っている女性の声に変化した。

安心が、どつと押し寄せてくる。と同時に、綾子は一気に空気を吐き出していた。

「なんだ、いるんじゃない！」

そう言いながら綾子は家の中に入ると、廊下の先に向かい、そこを曲がった。

「……！」

目の前の光景に、思わず足を止める。

冷たい……冷たい手が、綾子の心臓を握り潰す……

横に並んだ和輝の前では、虚ろな表情の女性がよたよたと部屋の

中を彷徨っていた。

髪を乱し、痩せた腕を伸ばしながら…何かを追いかけているように見える。だが、臍に微笑む女性の前には、何も存在していないのだ。

「…お姉さん…どうした、の…！」

やっと、悲鳴を上げることが出来る…だが、足は動かない。動けない…立っていることも難くなりそうだ…

食卓の上に、僅かに水が残るコップと、半分に裂かれた茸がある。
「…シビレタケか！」

和輝は厳しい顔をする、その女性に駆け寄っていた。

彼女は、そんな和輝など見えていないようだ。部屋の入り口でとうとう座り込んでしまった綾子を見ながら、愉しそうに声をかけている。

「ほら、綾子ちゃん…私の子どもはね、空を飛べるのよ？ ほら…」
伸ばされているその腕を、和輝は素早く自分のハンカチで縛ってしまった。

全く抵抗しないその体を横に倒すと、足を押さえ、脱いだコートの袖でこれも動かないようにしてしまう。

「嫌…こんなの…」

小さく頭を振りながら…綾子は恐怖で目を見開いていた。

そんな彼女へと、転がされている女性はまるで何事も起きていないかのように、感情を映さなくなった瞳で話し続けている…

「ほら。とうとう、私にも子どもが産めたのよ…」

「やめてええーっ！」

…綾子は…全身で叫んでいた……

「そんなことがあったんだね…」

玲は龍真と顔を見合わせると、泣き続ける綾子へと痛々しい視線を向けた。

救急車で女性を運び、綾子を自宅にこうして送ってきたのも、全

て和輝だ。

その和輝は、ローニアと一緒にあって綾子の肩を抱いている。皆を呼んだのは…流石の彼も、一人では不安だったのだろう。今は随分と落ち着いてきているが、先程までの綾子の泣き方は尋常ではなかった。

和輝はその瞳を深い悲しみで彩りながら、龍真と玲を見上げた。

「あの茸は、幻覚を見せるんだ。勿論、体にも害がある…でも、きっと、あの人はそこまで考えなかっただろうな…」

「そんなものが、簡単に手に入るのかよ！」

怒りに満ちた龍真の言葉に、和輝は黙って頷いていた。

「…あの人にとっては、辛い気持ちを軽くしてくれる…素晴らしい薬だったんだろう…」

「違う…！」

不意に、綾子が口を開く。

瞳を強く瞑りながら、必死になって、言葉を押し出す…

「お姉さん…そんなに、…弱くない、わ…」

「綾子…」

「…子どもが出来なくて…いつも…悩んで…苦しんで…

でも…そんな…幻に頼るなんて…そんな…」

「…その人が子どもを産めなかったから、離婚したんだね」

玲の低い呟きに、龍真は噛み付くように叫んでいた。

「冗談じゃないぞ！ そんな勝手なことがあるかよ！」

「龍真さん…！」

少し強く、ローニアが窘める。

淡い蒼を含む銀の瞳が綾子に流れるのを見て、龍真は舌打ちすると横を向いてしまった。

…そう…その理不尽さに一番憤りを感じているのは、綾子なのだ…

「体外受精は、何十万もかかるし、成功率もまだまだ低いし…失敗すれば、始めからまた入院しないといけないんだ…

…その人の生理のサイクルに合わせながら治療をするから…経済

的にだけでなく、時間的にも負担が大きくて……」

和輝が、誰に言うでもなく、静かに続けている。

「一方で、排卵を促進する薬で、二人以上の子どもが出来る確率も高くなるんだ……」

でも……一人でいいから……親の中には、他の『生命』を殺すこともあるそうだよ……

人間なんて……結局、そんなものなのかも知れないね……

切に望んでいたのに……邪魔になったら、その『生命』からの反応が身近に感じられない間に、殺してしまう……

子どもが産めないから……邪魔になつて、捨ててしまう……」

「ですが……それは、『人間』の《全て》ではありません……」

……魄鬼のローニアの言葉は、静かだった。

「……お姉さんだって……そんな人じゃないわ……」

綾子が再び唇を震わせる……

「お姉さん、言つてたのよ……卵子を取り出す時は、本当に泣けてくる、って……私、何してるんだろう、って……」

……泣きながら……話してくれたのよ……！

それでも……卵子を自分の中に戻した時……それが何回目でも……嬉しくなる、って……

妊娠したかどうか、調べに行った時……お姉さん……+や±が出るたびに、喜んで……」

喘ぐように、息を吸い込んでいる……

「でもね……いつも、出血してしまつて……又、駄目だった、って……」

男の人って、そんな時の……お姉さんの笑顔を……とても……とても

悲しい笑顔を……全然、知らないのよ……！」

あの人……あれ程まで……あれ程まで変わるなんて……

子どもが産まれない……だから、今迄の《全て》を捨ててしまうなんて……

『子どもが産めない』……それだけで、その人は『女性』ではなくなるとても言うのだろうか。

…今迄の想いも…愛情も…全て、完全に、失せてしまつと言つのだろうか……

綾子には、分からなかった。

分かりたくもない。

でも、分からないといけないのかも知れない。

でも…分からない。

……彼女の胸の中では、不安と猜疑と絶望と……どす黒い血のような液体が渦を巻き、のた打ち回っていた……

「代理母のことも考えたらしいよ……」

和輝が、穏やかな声で続ける。

「でも…『他人』が産むんだからね…自分達の遺伝子を受け継ぐとは言つても…本当に体と心を痛めて産むわけじゃない…」

矛盾しているようにも思えるけど…でも、だから、止めたそうだよ」

精一杯の力で、綾子を支えている。すぐ傍のローニアには、それが十分に分かつていた。

震えようとする声も、抑えている…和輝もまた、実際に幻を追う女性を見ているのだ。動揺していないはずがない。

それでも、彼は穏やかになろうとしているのだ。そうしなければ…どうして、綾子を支えていられるだろう…

暫し、沈黙が深く…皆の頭上に横たわる。

重く垂れ込めた静寂は、暮れてゆく美しい夕映えの下、払うことの出来ない闇を創り出していた…

…不意に、階下で電話が鳴り響く。

やがて足音が近付いてくると、ドアの外でそつと綾子の母親が声を掛けてきた。

幼なじみの龍真が代わって出ると、下に向かう。

だが、すぐに駆け戻ってくると、乱暴にドアを開け、玲を部屋の外に引っ張り出した。

「どうしたの？」

龍真は部屋の中に聞こえないことを確認すると、低く、真剣な声で玲に囁いていた。

「病院からだったんだ。あの人が、逃げ出したらしいぞ」

「……！」

押し殺した叫びが玲の口から漏れる。

「どうする？ 綾子を置いていくことも出来ないぞ」

和輝とローニアだけでは、すぐに何かあったのではと勘繰ってしまっただろう。漸く、落ち着きかけているのだ……

「考えてる時間なんて無いよ。」

どうしても、僕だけでも行かないといけない気がするんだ。

……嫌な予感がする」

「俺もさ。何かが宮木町に入り込んでいるようだ。」

一人で大丈夫か？」

「うん。それより、ローニアさんと一緒に、綾子ちゃんの傍を離れないでね」

「勿論だ」

その女性が、どんな状態で病院を離れたのか分からない。自らの意志なのか、邪気に囚われているのか、それも分からない。

だがいずれにしろ、この近辺で女性が向かう先があるとすれば、それはこの綾子の家なのだ。誰かが、残らなくてはいけない。

復讐は……？

……それなら、今、この時でなくても可能だったはずだ。

だが、邪気によってその意志が強められていたら……

……疑問は解答を得られないまま、心の中を巡る。

玲はそれ以上の疑問を心に許さず、すぐに黄金色の痕跡を残すと駅前病院へと『飛んで』しまった。

龍真はそんな彼を黙って見送ると、そのまま再び部屋へと戻っていった。

「…っ！」

病院の上に出た瞬間、辺りに渦巻く邪気の凄まじさに、思わず玲は身を竦めていた。

…地下の…水脈が乱れてる…？

あの女性は何処だろう。

人の病んだ心に、邪な存在が入り込むのは簡単だ。

恐らくは……

漆黒の瞳に沈黙と哀れみを湛えながら、水脈の『気』をその身に集めている存在を認めた玲は、ゆっくりと降下を始めていた。

近付くにつれ、魅惑的な…蠱惑的な香りに包まれる。

若者を惑わすその芳香も、だが玲にとっては不快なだけだった。

「何処に行くの？ 蛟女^{カウメ}」

穏やかな言葉に、薄暗い道を浮かぶように歩んでいた美しい女性
は、微笑みながら足を止めた。

「決まっているでしょう。この『体』が望む所よ」

昼間、病院へと担ぎ込まれたその女性は、舞い降りた少年に向かつて妙なる声で応えている。

「違うよ。お前が望む所だよね」

「同じことよ」

蛟女は…その女性は、くすくすと笑いながら続けた。

「この『体』は、自分を棄てた男を憎んでいるわ。

子どもを産めないから、『女』として認めない。そんな身勝手なことを考える存在に、復讐したがっているのよ。

だから、私はこうして抵抗も受けずに、この『体』に入り込めたの。

この『体』を使って『男』を誘惑しても、殺しても、その血を吸っても、何もいけないことはないでしょう？」

胸元で腕を組むと、玲は鋭い視線で女性を見据えていた。

「復讐を願っている限り、その人は『過去』から出られないんだ。だから、無いものを追い求めてしまう。」

それは『夢』じゃない。『過去』に引き摺られた『幻』でしかない。

僕に出来ることは、お前を追い出して、その人に『未来』を眺めてもらうことなんだよ。

この世界にはね、思っている以上に沢山の人々がいるんだ。

その人を『女性』として、『人間』として愛してくれる人は、きつという。

確かに、子どもを産むことは『女性』の素敵な力だよ。

だけどね、蛟女。それだけが『女性』の《本質》じゃないことを、僕はその人に知ってもらいたいんだ」

「随分と綺麗なことを言うのね。

でも、それでこの『体』が納得するかしら？」

楽しそうに微笑む蛟女に、玲は失せた表情のまま続けた。

「それは分からないよ。

僕は、その人じゃないからね。

ただ、これだけは言えるんだ。

『理想』だって、《現実》であり、《真実》なんだ。

だからこそ、人はこの荒んだ塵界で生きていける。

その人が《真実》を知るためには、いくら時間をかけても構わないんだよ。

その『時間』こそが、人生なんだから」

玲の全身を、黄金色の炎が嘗め始める。

蛟女も紅蓮の炎をその背に負いながら、優美な唇を開いていた。

「《真実》なんて、この『体』にとっては苦痛でしかないわよ」

「うっん。綾子ちゃんがいる限り、絶対にその人は変われるよ」

組んでいた腕を解き、右手を挙げる。

『力』を放ち、結界を張ろうとした瞬間、別の『力』を感じて玲はその動作を躊躇ってしまった。

「見付けたぜ！ この化け物が」

荒々しい喜びに満ちた声が、不意に飛び込んでくる。

見たことも無い若者だ。溢れ出す『力』を抑制もせず、思いのままに进らせている。

蛟女は美しい顔を歪めると、舌打ちして玲に背を向けた。

「くたばれ！」

「やめろ！ その『体』は……」

だが、若者は諸手を振り下ろし、『力』を放つ。

瞬時に蛟女の前に回ると、玲はカードを取り出し、滑らせた。

目に見えない壁が現出し、更に『力』で補強する。

「くっ……」

直後、精霊を伴わない風が宙を裂き、敢え無くカードの防壁を粉砕してしまう。

その爆風に煽られながらも、玲は鋭利な疾風の刃を食い止めていた。

その間に、蛟女は『体』を捨てて逃げ始めている。

若者も玲のことなど意に介さず、霧となって逃れる蛟女を追って素早く闇の中へと消えてしまった。

なんて無茶なことを……

流石に無傷ではない。

すぐに若者を追いかけてようとしたが、目の前に倒れている女性に気付くと、痛みも忘れ、玲は急いで駆け寄っていた。

気絶はしているものの、外傷は見られない。

遠くから、走ってくる複数の足音が聞こえる。

玲はその女性を優しく抱きかかえると、病院の人々を静かに迎えていた。

「曖、少し薬局で薬を買ってくるよ」

本を読んでいた曖は、疲れた父親の声に驚くと、慌てて部屋を飛

び出していた。

「駄目よ、パパ！ 横になっていないと……」

気分がすぐれず、青い顔をした父親を、暖は居間に座らせると優しく言った。

「風邪の時は、お休みするのが一番なの。」

お薬は、私が買ってくるから」

薬局は、通勤で使っている駅からの通り道には無い。

もう一つの駅の近くだ。距離も、それ程遠いものではない。

「いや、こんな夜遅くに出掛けるのは……」

だが、こんな状況での暖は、普段とは違い厳格だった。

「駄目！ パパにはお薬がいるんだもの。」

大丈夫よ」

安心させるように微笑みかけると、暖は急いで部屋に戻り、寝間着から着替えていた。

「起きたら駄目よ？ パパ」

扉から笑顔を見せた暖は、すぐに玄関へと消えてしまう……

「……暖も変わったな……大きくなったものだ」

その呟きは、すぐに静寂を纏い……薄闇の中へと溶け込んでしまった……

.....

(……？ あれは……)

天から、純白の雪が降り始めている。

闇に煌き、散り舞うその花々の下……綺羅は、普段通りに蛟女を見張っていた。

先程の病院の一件では、幸い川瀬玲の御蔭で自ら動くことはなかった。

だが、あの少年も今は蛟女を見失っているようだ。病人を優先し

たのдарう。

その時、綺羅の視野に一人の少女が駆け込んできた。

そう…確か、その川瀬玲と親しくしている少女だ。

彼女は車も少なくなつた夜更けの交差点を、走って渡り始めている。

そんな少女には見向きもせず、今は女性像を保っている蛟女が道に出て近付いていく…

「……！」

その時不意に、蛟女を追いかけていたあの若者が現れた。
リストには無かつた『能力者』だ。

（まさか…？）

尋常ではない高レベルの『気』が集められている。
今しも、少女と擦れ違おうとしている蛟女に向かつて……

（…あいつ！）

立ち上がりかけた綺羅は、次には意識する間もなく、素早い身のこなしで横に転がっていた。

視界に冷たく光る刃が過ぎる。

（誰？）

そんな単語が脳裏に浮かぶ前から、綺羅は銃を抜くと構えていた。
だが、既に辺りからは気配が失せている。

（…いけない！）

優しい少女の姿を思い出し、急いで視線を戻したが……

……既に、風は闇を舞っていた……

……

「この辺りなんだけど……」

病院を出るとすぐ、玲は蛟女を追いかけて空を駆っていた。

いつのまにか、空は一面、輝く白い羽根で満ち、寒さも増してきている。

…香笹町まで来たんだ。

見覚えのある風景を眺めながら、玲は音も無く飛び、眼下を探っていた。

「…あれ？」

あれは…

少し先で、広い道を一人の少女が渡っている。

あの仕草は…

「曖ちゃん？ どうしたんだろう、こんな夜中に…」

だが、不意に言葉が止まる。

曖に近付いているのは…

蛟女！

玲は一気に『力』を高めると、曖に向かって滑空した。

その時、もう一つの影が目に入る。

あの若者だ。

彼は…

「やめろおおっ！」

だが…

…次には…

「曖ちゃああーん！」

嘘だ…

…絶対に…

「嘘だああーっつ！」

鋭い風の刃に手足を切り裂かれながら…

玲は…絶叫していた…

大きく見開かれた、漆黒の瞳の中…

無数に切り刻まれた曖の体が…

「破片」が…

鮮やかな赤を纏い…闇に、散る……

純白の敷布の上に…美しい黒髪が広がり……

「これで、やっと奴等の『力』の一つが手に入るぜ。
なに、泣いてやがる。

こんなガキ、それに比べたら…」

「……………！」

空に向かって…玲は、《全て》の『力』と共に吠えていた……

途轍もない爆発が、地を走る……

……………《全て》が……

……………消える……………

……………
……………

綺羅が爆風から逃れようと身を起こす直前、彼女の前に一人の若者が立ち塞がっていた。

まるで気配を感じさせず、綺羅の訓練された体も動かない。

黒髪の若者の姿を視認して初めて、綺羅は咄嗟に身構えようとしていた。

だが、若者の方が早い。

彼は黙って、右手を横に滑らせていた。

(…！)

不意に、綺羅は周囲の存在全てに影が落ちた気がした。

「結界の中だよ。」

綺羅… 見ているがいい…」

その悲痛な口調に、いつしか綺羅は警戒も忘れ、その言葉に従っていた。

.....

(…く、ん…)

暖の「破片」を前に、玲は倒れ伏していた。

身も心も硬く張り詰め、その瞳は見開かれたまま、ただただ銀の雫を零している…

暖の鮮血に濡れながら……

…玲は、自らの中の赤い血の送り手を、止めてしまうつもりでいた。

……造作もないことだ。

(…君…！)

…声がする…？

（玲君…！）

砕け散った…玲の『存在』の奥底から……

……溢れてくる……？

「玲君！」

しゃくりあげている……？

優しい声……

「悲しまないで……！　お願い……」

血の泉に沈む玲の背中に……

……縋り付いている……震えている……

「ごめんなさい……」

……

「折角、私……玲君に、『好き』になってもらえたのに……」

「……あ……」

虚ろだった漆黒の瞳が揺らめく…

…悲しむ声に、焦点を取り戻していく…

「玲君…」

儂く…消え入りそうな泣き声…

…泣かないで…

玲は瞳を閉じていた。

泣かないで、曖ちゃん…

「…守れなかった…」

ごめんね…ごめんね…ごめんね…ごめんね…

「僕…もう…」

自分が声を出しているのかも、本当は分からない。

泣いているのかも…

だが、その慟哭している玲の姿に、周りの存在の全てが呼応し、悲痛な叫び声を上げている。

大地は震え、建物は軋み、風は唸り、雪は渦を巻く…

曖は…透き通った姿の曖は、その混乱の中、玲の背中にしがみつきながら、頬に涙を伝わせていた。

「うつん…玲君…来てくれたもの…」

…ありがとう……」

継る力が、一瞬、強くなる。

次の瞬間、その腕が解かれていくのを感じて、玲は思わず顔を上げていた。

「曖ちゃん…！ 曖ちゃん…！

…消えないで！」

水の幕の向こう側で、だが、曖は全てを悟った者として、小さく頭を振っていた。

「…『何処か』には、行かないといけないの…」

「曖ちゃん！」

「…でも…きつと……きつと、ずっと、玲君の傍には居られるの…」

「曖ちゃん！」

その小さく愛おしい姿の横に、不意に一人の女性の姿が浮かび上がる。

…曖に似た、豊かな髪が背に流れている。

曖はその女性に笑みを向けると、玲に抱きついていった。

「玲君…お母さんの……」

「え……」

玲には、その女性が精霊なのだと分かっていた。

降り続く、雪の精霊…

母親もそれを察し、優しく微笑むと玲にそつと触れていた。

「玲君…今まで、曖のこと、本当に有難う御座いました。

夢鏡ノ泉で人と化した私にも、曖にも…人間の世界は、結局、悲しみでしかなかったのです…」

……例え、そこで素晴らしい愛を見付けたとしても……」

「……！」

「曖は…玲君。

貴方と出逢えたことで、貴方と枝葉を交えたことで、精霊ではなく、人としてその《生》を新たに受けることが出来ました……」

…もう、貴方たちは、離れることはないのですよ。

暖の道は、過去とも未来とも、重なり、繋がったのです…」
首に抱きつく暖の腕に、力が加わる。

その想いを感じながら…玲は、次第にはっきりとしてきた意識の下で、暖を抱き返していた。

「玲君…」

「暖ちゃん」

「『好き』になってくれてありがとう…」

……でも…ごめんなさい…」

一度強く、その双眸を閉ざす。

そして、優しい笑みをその頬に映すと、再び濡れた瞳を開き…玲は透き通る暖を見つめた。

「うつん…」

…暖ちゃん。

今も…これからも、『好き』だよ…

きつと、…それが大事なんだ…

…きつと………」

「うつん」

暖が、ゆつくりと離れていく…

…その心配に揺れる瞳に、玲は励ますように頷いていた。

「大丈夫…大丈夫だよ。」

暖ちゃん…もう……

…泣かないよ」

「玲君…」

素敵な笑顔が…薄らいでいく…

「…いつも…ずっと、一緒だよ…」

暖ちゃん……」

そして…玲は俯くと…

……顔を隠してしまった。

ごめんね…少しだけ……

……微かに、両肩が震えていた……

……
……
……

純白だった雪が、紅く染まって舞い降りてくる。

結界を解いた若者は、『時間』の揺らぎを秘めた声で、重く…静かに呟いていた。

「綺羅…これも『運命』だと思うかい…？」

蹲って動かない少年を見つめながら…綺羅は黙って瞳を濡らしていた。

…やがて、掠れた声が…美しい唇の間から零れ出す…

「…いいえ。」

……違っわ……」

綺羅は、若者…志水を見上げると、そっと微笑んだ。

「…………『永遠』よ……」

1 2 離析

おわり

『雪泥鴻爪』

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2372g/>

雪泥鴻爪

2010年10月8日14時59分発行